

だいたい川内と会話するだけの文章

ほし。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文字通り

台本形式ではありません。地の文がすこしあります。1か2か3で言うところ一人称です。

手探りしつつ書いているので更新は遅いかもかもしれません。

追記

(2020/7月末くらい)

主に注意すべきことのひとつとして、当鎮守府の川内の人格像は、原作の川内のそ

れとはすこし離れています。苦手な方は可能なかぎり自衛なさっていただけるとあり
がたいです。

ミ☆

目次

94	閑話：提督に対する動搖のさせかた	
	贈り物	84
	贖罪	76
	休暇の暇	69
	姉妹	58
	唐突の	50
	惰眠	42
	遭遇	32
	性格	19
	変人	13
	着任と秘書艦	1

	素直	261
	閑話：普通の艦隊旗艦と夫婦の漫才時間	246
	夏祭	222
	勧誘	205
	動搖	189
	楽しい時間の過ぎ方	173
	被り	162
	特技	151
	わりとよくあること	129
	早朝	121
	妖精	113
	愚鈍	103

S K I T	け ぶ る つ き	綻 び	補 強	本 音
413	365	340	306	282

着任と秘書艦

清々しい朝だった。

木製の古いにおいのする講堂には、春の陽気に照らされた空気が誇らしげに満ちていた。乾いた空気は厳格な雰囲気にならざるやうによく、高揚した思考を取り纏めてくれる。しんと静まり返る涼しさに、自身の声がよく響くのが分かった。

「——本日よりこの鎮守府の艦隊指揮を執ることになった。以後よろしく」

講堂の壇上から眼前を見渡すと、そこそこの信頼と期待を乗せた視線がこちらに注がれていた。若輩者の人間がこの立場に就くことに反感を持つ者がいてもおかしくないかと踏んでいたが、おおよそ上官としては認めてくれるらしい。

艦装と呼ばれる装備を見に纏わない彼女たち『艦娘』は、整然と直立しこちらに目を向けている。武器を保有していない彼女たちは、ただそれだけのことで兵器ではない若き少女のように思えた。

そのような容貌の者に、延々話をするのも面白くない。軽い挨拶をそこそこに済ませて、あとは隣に立っていた艦娘——大淀に進行を任せ

『では、各々自由に。解散』

ここから長々と話が続くと思っていたら、解散の指示が下された。大淀も面倒だったのだろう。

既に散り始めた艦娘たちの喧騒を見るに、これは不可逆的なものだと悟る。しかたない。もとより咎める気もないが。

ともあれ解散というのなら、私も自由にこの鎮守府を散策するとしよう。

「提督はこの後手続きが残っています」

「そうか」

少なくとも、私の自由は保証されていなかった。それはそうだ。私の立場で自由など与えられるはずもない。

大淀に先導されるがまま壇上を降りる。司令室に向かうのだろう。先に大淀にそこだけは案内されたが、私のものだと思われる机に書類が山のように積もっていたのを確認している。

これが社会なのだ。楽をして仕事などできるわけがあるまい。きつと私に自由など必要ないのだろう。

「提督！」

講堂を出たあたりで、不意に声をかけられた。明るい声だった。

提督とは私のことか。覚悟のようなものはしていたが、実際にそう呼ばれてみるとどうにも歯が浮くような心地がする。早い段階で慣れておきたい。

振り返ると、10代後半くらいの容姿をした少女が立っていた。ノースリーブの独特な衣服とマフラーに身を包んでいて、芯の強い双眸をしている。

この制服は見覚えがある。記憶の中の資料を捲っていく。

「君は川内か」

「はい！ 川内型軽巡洋艦一番艦、川内です！」

「……先の時代では御国のための献身、敬意を表」

「あーそういうのいいですって！」

「そうか」

兵器としての時代を持ち出すと、露骨に話を遮られる。

良くも悪くも、いまままでに十分言われ慣れてきているのだろう。いい時代だと感じた。

「それで？ 何か質問か」

「はい！ ええと、その」

わざわざ話しかけてくれたのだ。上官となる私を知るか、あるいは自身を私に認知させることで、この鎮守府での生活を円滑に過ごせるように図ってくれているに違いはない。

他の艦娘はまだ分からないが、少なくとも川内についてはどのような性格かわかったような気がする。

きっと彼女は、心配りができて、やさしく、人のことを思いやれる者で――

「提督って、彼女はいますか？」

なるほど。元気なだけだった。

*

着任初日。

講堂で短い挨拶を済ませた後は司令室に籠り、ひとまず急を要する書類を片付け、急を要さない書類もついでに手を付けておき、ようやくひと息ついたころには既に夕方となっていた。

ため息交じりにしばし休憩をとっていると、書類の処理に占有されていた脳が冷やされ、周囲の状況を考える余裕がうまれてくる。

「すまない、助かった」

隣でぐったりと机に伏している艦娘——川内に声をかける。

講堂を出てすぐに声をかけてくれたが、手続きの仕事を優先するよう大淀に指示され、彼女のことは後回しにせざるを得なくなつた。

そのことを川内に伝えると、「手伝え」と指示されたと勘違いしたのか何なのか、私の手続きを手伝ってくれることになつた。理由を聞く暇さえなかつたため、彼女の真意は確かめられていない。

こうした作業は私も彼女も初めてだったようで、共にあたふたしながら事務作業をこなした。時間はかかったが、一人でやるよりは断然早く終えることができたはずだ。

心にはなんとなく幸福感がある。仕事とは疲れるものだが、達成感を感じることができるときのものだと臍気に理解した。

ただ一つ残念なことがあるとすれば、終えねばならない目の前の責任と作業量のせいで、川内が私に尋ねてきた本来の用事を忘れてしまったことくらいか。

「それで、なんの用だったか」

「……………あ、ええとね」

机に伏して動きを止めていた彼女は、呼ばれて数秒後に自身のことだと自覚したらしく、むくりと上半身を起こした。それなりに疲れているようで、ゆっくりとした挙動。

そのままの調子で私を見据え、言葉を落とす。

「提督って、彼女はいるの？」

ああ、そうだ。彼女は元気な性格だった。朝に見せた敬語が消えているのも、元気だから仕方ないことなのだろう。

質問内容もとても元気だが、聞いてどうするということのか。どうもしないのだろう。どうにかできる情報でもあるまい。

意図があるとするなら、提督の立場にあるものにプライベートなど不要だと間接的に伝えてくれているのかもしれない。なるほど。納得はしない。

「なぜ私にそれを」

「話しやすくなるかなー……って。こういうのを、えっと、なんだっけな。アイドルだからアイコンだか」

「……アイスブレイク」

「あーそうそう。それ」

基本的にオリエンテーションを織り交ぜるアイスブレイクとは多少異なると思うが……なるほど。

そのつもりで話しかけてくれたのなら、やはり彼女はなかなかいい性格をしているようだ。話題選びには最悪だが。

「まあだから、実際に彼女がいるのかいないのかはそこまで重要じゃないんだけどさ」

「そうか」

「要は、話しやすくなるのが大事だと思うんだよねー」

「ああ」

着火剤は無難なものならなんでもいいのだ。会話の火種さえ起こせば、自然に空気は解凍される。

川内とは美味しい茶が飲めそうだ。

「初対面の者と今後も連れ添うつもりなら、ひとまず話しかけることが大事だ。君とは気が合いそうでよかつ——」

「それで、彼女はいるの?」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あは」

着火剤を間違えるとむしろ空気が凍ることもあるが、間違えなければいいのだ。間違

えなければ。間違えさえしなければ。

ありえないこととは思いますが、仮に間違えてしまったのなら、できる限り話題を逸らすのが1番いい。

「いた方がいいかもしれないな」

「え？」

「私は決してしないが、女性の多い職場では劣情を抱く輩もいる。特定の相手がいるならその心配もないはずだ」

そうした事件は少なくない。男女問わず、性への意識が過敏すぎる者は一定数いる。

『艦娘』という存在が一般に女性とされる以上、私に特定の相手がいた方が彼女たちとしては安心できるのかもしれない。

「あー……たぶん、提督っていい人だよな」

「は？」

「提督は1人の相手に尽くすんだらうけど、ふつう、簡単に手を出すような人に自制心も誠実さもないと思うよ」

「……ああ、そうか」

冷静に考えてみるとそうかもしれない。ゴミはゴミだ。

しかし、彼女の評するところとは違い、私はたいして善良な性格をしているわけでは

ない。話題を逸らすことにだけ意識を寄越したため、物事を深く考えていなかったただだ。

その場だけの、恣意的な弁論をしたにすぎなかった。『いい人』なんかじゃあ、決してない。

「それで、彼女は？」

まだ聞くのか。

先程空気が凍りついたことを気にも留めていないらしい。元氣だ。

「……………川内。君こそどうなんだ」

言ってしまったからすこしだけ後悔した。話題を逸らすには際どいものかもしれない。

しかし先に聞いてきたのは川内だ。ここでセクハラだのモラハラだの騒がれることもない。今の段階で推定できる彼女の性格からしても、そのような言動はとらないはずだ。

それを抜きに考えると、ここでの逆質問は少なくとも悪手ではないだろう。

そのあたりの都合など、出会って半日ほどの相手に伝えやすい情報でもない。まして上官に。私なら腹を斬つても忌避したいものだ。

「私はいないよ。提督は？」

「………」
悪手らしかった。

「私は答えたよ。ほら、提督」

「………」

「てーとくー？ いるのー？」

「………」とところで明日からも今日以上の執務が続くと思うと少し億劫になるな。近いうちにはこれに加え作戦指揮や演習なども行わなければならぬ」

「だよねー。んじゃ私、明日からも手伝うよ。秘書艦やるね。で、彼女は？」

「………」わかった」

彼女には話題逸らしは効かない。1度逸らした話題に乗った上で、ひと段落着いたタイミングで掘り返すタイプの人間だ。

答えなど既に分かりきっているのだから、意地の悪い性格をしているものだ。

——私に残されたたつたひとつの冴えたやり方は、自爆することだった。

「私にはそのような間柄にある女性はいない」

秘書艦になるとまで言われた。大きすぎる対価に、ここで答えないはずもなかった。

飛んでくるのは嘲笑か。同情かもしれない。どちらにせよ性質の悪い質問だ。少し怯えながら相手の反応を待つ。

「ふーん。いないんだ。……あ、心配しなくていいよ。提督は信用できる人だってみんなすぐ分かると思うから」

「……そうか」

しかし幸いなことに、川内は元気な性格だった。意地の悪い意図などありもしない。彼女にとっては純粹に会話をしていただけだったようだ。

すこし後ろめたさを感じる。彼女のために何かしなければならぬ。そうしなければ気が済まない。ような、気がする。

「……………」

川内から視線を外し、司令室の窓に目を向ける。水平線には沈もうとする太陽が見えた。

既にその半身は海の向こうに消えている。日が沈むまで少ししか時間が残されていないようだった。

「……もう夕刻だ。夕飯をとろうと思うが」

「提督、食堂の場所分かる？」

「まだ分からない。私ができるのは司令室と講堂のみだ」

「そっか。じゃ、後で案内するよ。秘書艦だしね」

「……秘書艦の件は本当に任せるが、いいんだな？」

「ん」

「そうか。……では、案内頼む」

席を立つ。

川内には今日だけで手に負えないくらいの借りを与えられてしまった。内心ひねくれた性格だと判断してしまったこともある。せめて夕食を奢るくらいはしてやらなければならぬ。

……思つたより、川内は純粹な性格をしているようだった。

それこそ『いい人』だ。

「……あ、そうだ。提督」

先行して司令室を出ようとドアノブに手をかけた川内が、くるりと振り返つた。

忘れ物を取りに帰るようなその素振りに、少し身構える。

やがて私の注意が彼女に集まったことを確認すると、川内は笑みを浮かべて口を開くのだ。

『いい人』な彼女が次に紡ぐ言葉が、少しわかる気がした。

「——着任、おめでと。これからよろしくね」

変人

着任して数十日が経った朝。

司令室には窓辺からの朝日が射し込み、飾り気のない内装を面白みもなく照らしている。

そのような地味な空気の中、目を背けたくなるほど厳しい執務に励む傍ら、ふと浮かぶ思索の数々を追いかけてしまい、作業に手がつかなくなった。

気分を変えようと、一度執務に向かう手を止める。2人分の茶を淹れ、秘書艦として仕事を手伝つてくれていた川内にも休憩をさせた。

「……………」

「……………」

静かだった。

私と川内の間に会話は無い。いや、いつもはもつとうるさいもんだが。出会って数日もすると、話すこともなくなるのかもしれない。

とはいえ不愉快なものではなく、むしろそのためにゆつくりと茶を呑むことができ

「川内」

喉を通る茶の熱さに安心を覚えていると、話すことが自然と湧いて出てきた。

会話とはこうした恣意的なものだったと思ひ出す。

「なに？ 提督」

川内はゆつくりと返事をする。彼女もまた、茶の安心感に浸っているようだった。

「着任して気づいたが、ここは独特な奴が多いな」

君も含めて、と落としかけた言葉を囁下する。

少なくとも本人の目の前では下手なことは言わない方がいい。それが上官として反感を買わずにいられる方法だと信じている。

独特だと思つてはいるが。

「んー、そうかな。そこまでそう感じたことは無いけど」

「……たとえば、君の妹」

「……？ どつちも普通の娘じゃない？」

自覚のない変人には難しい話だったか。

考えてもみれば、変人に変人の区別などつくはずもない。まして身内を。せめて、彼女の妹達に潜む常識との違いを教えてやるしか道はなかった。

「神通は普段こそお淑やかだが戦闘狂だ。那珂はアイドル志望。普通どころじゃない」

「……たしかに？　でもまあ、いい子達だよ。どっちも」
「それはな」

着任して数十日、色々な艦と交流してわかった。

ここは良い奴しかいない。一緒にいて楽しい奴しかいない。修学旅行で偶発的に一緒になった班が思いの他楽しかったような、そんな奴らだけがいる。

神通や那珂も癖はあるが、それも込みで面白い奴らだ。もちろん川内も。

この鎮守府に着任できたことへの嬉しさを感じつつ、湯呑みの中の液体を少しだけ呷る。

湯呑みが冷えてきた。

「正規空母たちはどうだ」

「あのあたりは、なんというか、独特というよりは……」

「……よく分からないな。ゆったりしている瞬間と張り詰めている瞬間の緩急が激しい。後者はともかく、前者がな」

「振り切ってるよねー」

メリハリがあると言えるのかもしれない。ただ、あまりにもおふざけと仕事の区別がつきすぎている。

当然、私が上官として彼女たちに接する際は、彼女たちもそれ相応の礼儀正しさを

もって私に応えてくれる。

それに対して、私が執務をすべて終え、ひとりの友人として彼女たちに接するとき、それはもうひどいものだ。楽しいが。

じゃんけんで負け、6人前の夕食を赤城に奢らされたのは二度と忘れないだろう。

思いつくと未だに納得がいかない。腹いせ以外の何ものでもないが、真偽に関わらず正規空母勢には変人が多いことにしておこう。

「戦艦は……武蔵と長門が目立つな。熱すぎるといふか」

「そこまでじゃない？」

「君たちの立場ならなんとも思わないかもしれないが、私の立場だと、その……」

「……？」

「信頼を寄せられすぎているのが怖い」

「……あー」

買いかぶり……とは言わないが、私の能力を少なくとも一段高く見積もっているような気がしてならない。

この鎮守府の中でも特に存在感のある2人に認められているのは作戦指揮上有利だが、そのような2人にあまりに強く信頼されてしまうと、いつか失敗する瞬間を考えてしまい押しつぶされそうになる。胃に穴が。

「重責はしんどいよね。ま、そこまで気にしない方がいいよ。私はかなり提督に期待してるけど」

「そうか。今日も胃が痛む。快調だ」

「それはよかったよ」

容赦がない。川内は初日から秘書艦を務めているだけあって、鎮守府で最も私に対する遠慮を知らない。

「こうした会話を愉しむ私の性格をよく分かっているようだ。」

「今あげた変な面子を考慮した上で、私は吹雪が一番落ち着いていると思っっているが」
「私もそう思うよ」

「従って、今日の昼休みは吹雪と一緒に昼食を摂ろうと思う。今日は出撃も遠征もさせていないはずだ」

「私も一緒にいいよね」

「……………ああ」

「明らかに残念そうな顔しないでよ。傷つくなあ」

川内が遠慮をしてくれないでいるので、私もそれに応えることにした。

川内は川内でこんな時間を楽しめているようで、言葉とは裏腹に笑顔が漏れている。

「冗談だ。なんだかんだ、君といるのは楽しい」

「そう。ありがとう、提督」

気がついたら、茶はすでに飲み干されていた。

それからは言葉もなく、手を止めていた執務を再開した。

昼食といういつたんの目的が見え始めたこの瞬間では、執務に向かう手も進むように感じる。

会話は止んだが、胃は痛むことをやめてはくれなかった。

ネット通販の履歴には胃薬が残った。

性格

昼食後の食堂は静かだ。

昼食を終え、大半の艦娘が午後の訓練に向かうか自室に向かうかし、賑やかさがなくなった食堂には、基本的には誰もいない。

そうした時間の中で、執務に追われる脳を休めふらりと食堂に立ち寄り、がら空きの席に適当に座ると、安堵と言うべき静寂が辺りを包んでいるのがわかる。

深海棲艦との終わりの見えない争いが続く中、安息とはなかなか手に入らないものだ。

戦時だからこそ、私はこの場所の静けさが大好きだった。

川内はその静けさを壊すのが趣味らしかった。

「提督つてさ、静かだよね」

隣の席に座る川内が訊ねる。秘書艦だからと休憩中にも私に着いてくるため、私の求める静けさは一切存在しない。

どうにも、知り合いとゆっくり過ごすときには喋っていないと落ち着かない性格らしい。

そんな彼女には、普段からそこまで口を開くことがない私は静かな人間のように感じるのだろう。

「そう見えるか」

「うん。言葉数少ないし、喋ってもそんなふうには素っ気ないし」

「自覚はないんだがな。私としては穏やかに接しているつもりだったが」

「……けっこう威圧感すごいよ?」

「そうか」

直した方がいいのかもしれない。そこまで無愛想に見えるというなら、いつも満面の笑みを浮かべながら過ごすべきか。

それでコミュニケーションが円滑に進むというなら、やってみようか。

ああ、いや、想像をして気持ちが悪くなった。やめだ。

私の素っ気なさは一生涯なおらない。諦めよう。

「……まあけっこう面白い性格してるし、そっち方面もつと出していいんじゃない?」
若干落ち込んでいると、そんな様子を見かねたのか、助け舟を出してくれたようだった。

しかし分からない。私の性格のどこに面白みを感じるのか、川内の感覚が分からない。ただのお世辞ではないだろうか。

「……たとえば？」

「この前の夜、司令室に入ろうとしてドアをノックしたときに聞こえたんだけど、一人でラップしてなかつ」

「してない。川内、何か欲しいものはあるか」

「……あは。夕食でいいよ」

一人でラップなど断じてしていないが、彼女にはこのあと奢らなければならぬ。

しかしもし仮に、万が一、百歩譲って私が夜間一人でラップをしていたとして、それを面白い性格だと評するのはどうだろう。

……くそ。

「……………」

「そんなに睨まないでよ」

「うるさいぞ夜戦バカ」

「ひ、ひど……」

「……………すまん」

「……………」

川内はやつぱり面白い、と言葉を落としたあと、誤魔化すように話題を変えた。

「それはそうと、提督はそのクマを何とかした方がいいよ」

「ああ、これか」

毎朝顔を洗っていると、嫌でも気付く。

私の顔には、目の下にうつすらと陰が浮かんでいる。いつからかは正確には分からないが、少なくとも着任してからのものだということは分かっていた。

「毎日の執務で疲れてるのは分かるけど、ちゃんと体調管理はしないと」

「……しているつもりだ」

「んー、寝てる?」

「まあ」

「そっか」

川内は本当に心配してくれているようで、とにかく寝ろと諭すような口調だ。

「川内、君は寝てるのか」

「うん」

「そうか。……私の場合、日々の作業効率には影響していないし、このままでもいいかと思っっているんだが」

「……だいたい怖い顔してるよ。人を平気で殺めてそう」

クマだけでそんなに人相が変わるものだろうか。

もともと無愛想だと思われていたようなので、そのせいでもあるはずだ。クマだけの

問題でもあるまい。

「あと気になったのがさ」

「なんだ」

「提督って、けっこうゲームとかするんだね」

「まあ少しは」

ゲームは好きだ。私にとっての娯楽といえばまず第一にそれが思い浮かぶ。

「……提督がやってるゲーム、私もちよつとやってるけど、提督のランクって今どれくらいなの？」

「1100いくかいかないか」

「『少し』ねえ……」

「言うほど高くないだろう。初雪は2000とか言っていたが」

「比べるところがおかしいよ」

そこまで異様に見えるだろうか。

さすがに今は一作品だけしかやっていないため、多少はやり込んでいる自覚はあるが、そこまで騒ぐほどではないはずだ。

「だいたい、いつやってるの？ 執務はちゃんとやってるの知ってるし、食事は私も一緒に食べるから何かしら話してるし」

提督という立場にある私には、あまり1人になる時間はない。提督だからという理由で、仕方の無いことだ。

また私は、誰かと一緒にいる時間にゲームなどはしたくない性格であるため、1人にならなければゲームができない。

つまり、そうした娯楽への時間は、川内からすればあまりとれていないはずである。

いつゲームをしているのか、疑問に思うのも当然だった。それを問う川内の声は少し怒気を孕んでいる気がした。

「寝る前に少しだけ」

「………何分？」

「3時間ほど」

「提督が自室に戻るのって、0時だよ。起床は6時だけど………いつも何時に寝てるの？」

「3時だ」

「クマの原因分かった？」

「………さあ」

「さつき寝てるって言ってたけど、嘘じゃん提督」

「私の中では寝てる方なんだ」

嘘ではない。私は極端なショートスリーパーらしく、いつか分からないほど遠い昔から毎夜の睡眠時間は3時間だ。

あまり理解されないが、3時間の睡眠でも、私にとっては毎日熟睡できているようなものだ。頭もスツキリとしてよく働く。

とはいえ、クマができたのは看過できない。

おそらく着任後の環境の変化に未だ慣れていないのが原因だろうが、人殺しなどはつきり表現されては治さざるを得ない。

しばらくは睡眠時間を長くしよう。

「改善する。それより川内、私も君に聞きたいことがあつた」

「……ちゃんと寝てね。で、なに？」

「君には初日から毎日秘書艦を務めてもらっているが、思えば君が訓練をしているような場面を見たことがない」

「……あー」

着任してすぐには気づけなかった。新しい環境と慣れない執務のおかげで、そこまで考える余裕がなかったのだ。

最近になって、違和感をはつきり認識した。彼女に出撃も演習もさせず、ただ隣にいて執務を手伝ってもらっただけでいることに、明らかに嫌悪感を抱いた。

「君の練度が高いのは知っている。だが、もし秘書艦の立場がそれを妨げているのなら、その、なんだ、他の者に代わりを頼んでもいいが」

「いや、それは大丈夫。ちゃんと自分で訓練は積んでるし」

「そうなのか？ 日中は秘書艦でずっと私についているし、そんな時間など取れていないと思っただが」

「いやまあ……ね」

言葉が濁る。目も合わせてくれない。

尻すぼみになる声に、だいたい察した。

「……夜間か？」

「ほら、私が夜戦好きなの、提督も知ってるでしょ」

「寝てると言ったな？」

「……それは提督も一緒じゃん」

川内は目を逸らしたまま応える。

慢性的に寝不足になってしまうと、次第に注意力が散漫になり免疫力も弱り、いつか体を壊してしまう可能性がある。

人に寝ろと言っておいて、心配はかけさせるのか。ずいぶん勝手な話だ。

……ああ、いや、そもそもは私が悪い。日中彼女をずっと私のそばにつかせているの

が悪い。

相手に責任を転嫁するほど甘えているばかりではだめだと、いよいよ分かり始めた。私はここの提督なのだった。

「川内。君の言う通り、私は今日早く寝ようと思うが」
「……うん」

「その前に今日の分の執務を終わらせなければならぬ。当然量が多い。まだ一人では捌ききれない。早く寝ることは叶わないだろう」

「そのための私だよ！ 秘書艦の務めだからね」
「楽しそうだ。秘書艦に関わる話題をするときはいつもそうだ。」

きつと秘書艦の立場にいるのが楽しいのだろう。私はその立場に立つたことがないから分からないが、楽しめているのならいいことだった。

「まあ、君にはこの後も手伝ってもらおうつもりだ」
「そうだよね」

「だが君の睡眠時間が足りていないことは事実だ。その原因が秘書艦であることにも変わりはない」

今度は絶望した表情が見えた。いま死刑宣告でもされたか。
極端な表情の変化が少し面白い。

「……君がこの役ををすすんでしたが、ついでにしているのは分かっている。私はそれを尊重しよう。今後も君を秘書艦にしておくつもりだ」

「……そっか。よかった」

張り詰めていた表情が、途端に安堵しきつたものに変わった。百面相とは何たるかを再確認できたように思える。

続けられるだけで安心の表情に変わるほど秘書艦に対して執着する理由が気になったが、いまはどうでもいいことだった。

「私がこの仕事に慣れるまでだ」

「え？」

「私が一人であるの仕事量を捌けるほど成長するまでは、夜間の訓練はしないでほしい」
「……………」

私がそこまで成長できたのなら、川内と共にとりかかれば半日もしないうちに執務は終わる。

そのあとの時間なら、彼女の好きないように鍛錬することができるはずだ。

「なるべく早く……すぐにそうできるよう、本気で努力する。それまでは私も娯楽も断とう」

「え……いや、そこまでしなくても」

「提督として、君だけ訓練をさせないでいるのは好ましくない」

「……………」

「それに、私のせいで無理をさせていたのは事実だ。体でも壊されるとこちらの胃が痛む。それを変えるためならなんだってする」

「提督……………」

申し訳なさそうな表情だ。私が私自身の尻拭いをしたただけだというのに。気に負う必要はないんだが。

「……………」ありがと。でも、ゆっくりでいいからね。提督が体を壊すことになったらこっちの心が持たないよ」

「……………」娯楽を断つから、睡眠時間は増える。人に無理をするなど言っておいて自分が無理をするようなことはしない」

「うっ……………」そ、それならいいけど……………」

君のように、寝ろと言いつつ自分が寝ない、なんてことはしない。

私が君に心配をかけていたのも理解した。ほとんど杞憂のようなものだったが。

「……………」でもさ、提督」

ふと腕時計を見ると、食堂に立ち寄ってから30分ほど経っていた。

食堂で長々と話をしすぎたように思い、そろそろ司令室に帰ろうかと考えていると、

川内から声がかかる。

嫌な予感がした。

「なんだ」

「べつに私一人を秘書艦にする必要もなかったんだよ？」

「……………」

「他の子とか……吹雪ちゃんとかなら、喜んで受けてくれただろうし。私と吹雪ちゃん
とで交代してやったら解決できたと思うよ？」

「……………ああ」

「……………あれ？　もしかして提督、秘書艦は私じゃなきや駄」

「駄目じゃない。思いつかなかっただけで」

「へへ……………へえ。そっかそっか」

「なんだその顔は」

抑えきれない笑いが込み上げてきたときのような、微妙な頬の上がり方をしている。
ニヤニヤと、意地の悪い笑みだ。

やたら表情豊かな性格で楽しい奴だと思っていたが、こんな顔をされると憎たらしく
思えてくる。

……………ちくしょう。

「……帰るぞ。私は早く成長しなければならぬ」

「あつ、ちよつ待つてよ提督！」

私にはやるべきことがあるのだ。こんなところで駄弁っている暇などない。

私が唐突に司令室への帰路につくと、慌てて追いかけてくる足音が聞こえた。

……ああくそ、思い出した、ラップ。あとで夕食を奢らなければならぬのだった。

今日は川内に弱い日なのかもしれない。せめて、これ以上調子に乗らせることだけは避けなければ。

……だから、秘書艦は川内がいい、とは思っていても、今日だけは絶対に言えなかつた。

遭遇

司令室を出て工場に向かい、そこで明石に装備開発を依頼し、司令室に帰る。片道だけでも10分ほどかかるこの作業は、それだけでも座りっぱなしの毎日にちょうどいい運動だった。

少し離席するだけの仕事であるため、基本的に川内は司令室で待っている。一日の中で川内と共にいない時間は、就寝時と入浴時、およびこの時間だけだった。

「あの、提督……私の姉を見かけませんでしたか……？」

工場から司令室に向かう途中、不意に後ろから声をかけられた。

歩みを止めて振り向くと、どこか見覚えのある衣服に身を包んだ艦娘が立っている。

……制服、姉妹でそろえているのだろうか。

「神通か。川内なら司令室にいると思うが。どうかしたのか」

「ええ。少し伝えたいことが」

「今から戻るところだ。伝言なら聞こう」

「いえ、私が直接伝えたいと……」

「そうか」

止めていた足を動かす。

神通が早歩きで隣についてくるのを確認して、少し歩く速度を落とす。

「……………」

「……………」

神通と2人きりでいるのは初めてだった。

いつもは間に川内を挟んでいるため、この距離には少し緊張が伴う。

「……………そういえば、今までに川内以外の艦娘と2人で会話したことはあまりなかったように思う」

「提督、何かとかけて姉さんと一緒に行動してますね……………」

「秘書艦だからそこは仕方ないが、他の者とのコミュニケーションが疎かになっている気がする」

「そうでしょうか？」

今だって、はじめて神通と2人きりで話しているのだ。

会話自体はどの艦娘ともしている。上官としても友人としても話すことは多いが、いっようなタイミングでも、必ずそこに川内がいる。

明石だとか赤城だとか、そのあたりの艦娘とは、資源や資材の管理の点で個人間で話すことが多いが、何気ない会話というものはなかった。

そうした会話をしたのは、赤城に奢らされたときくらいだ。思い出すと理不尽さに胃がキリキリキリキリキリキリキリ

「もう少し会話の機会を設けた方がいいな」

「今のままで十分だと思いますが」

「……いや、あまりに川内を介した会話が多いように感じた。川内が秘書艦である以上仕方ないと思うが」

「……でもたしかに、提督ともうすこし話したいと思う子は多いと思います。私含め」

「そうか。……ここでも支障が出ていたか。やはり私は早急に成長しなければならぬようだ」

「……睡眠、の件ですか」

「川内から聞いていたか」

「はい。とても嬉しそうに語っていました」

嬉しそうに……？ 彼女を喜ばせる要素などあつただろうか。むしろ秘書艦を続けられるかどうかの不安の方が大きかったはずだ。

少し気になるが、神通に聞いたところで答えがわかるはずもない。どうせ司令室に戻れば本人がいるのだ。直接聞くでしょう。

「……………」

「……………」

しかし、川内がいなければこんなにも会話ができないものなのか。

気まずい空気というわけではないが、無意識に会話の種を探してしまうくらいには、川内に頼ってきていたようだった。

「……提督」

絶妙な空気を破つたのは神通だった。

もともと、私は自分から話を振るような立ち回りができない。受けから入る会話が多いのだ。

そのため、ここで話題を与えてくれるのは大いに助かることだった。

「なんだ」

それにしてもこの男、もう少し柔らかな対応ができないものか。

先日川内から無愛想だと評されてから、そこばかり意識してしまう。変えたいとは思うが、なかなかどうして難しい。

「その……姉と一緒にいるのは楽しいでしょうか」

「まあ、そうだな」

「そうですか」

川内と共にいるのは、嫌ではない。そうでなければ秘書艦になどしないし、四六時中

隣にいて会話をするわけもない。

神通も、そこは分かっただけ聞いて聞いているのだろう。

「それなら……よかったです」

それでも、嬉しそうな声だ。見ると、頬が少し緩んでいた。

姉妹艦とは不思議なものだ。明らかに血の繋がりはないが、そこには友情とは呼ぶべきでない家族の絆があるように思う。

艦娘であるが故の奇妙な縁を、私のようなものには介入できない美しいもののように思いながらも、少し羨ましかった。

「……着いたな。一人だところこまでの道のりは長く感じるものだが」

気がつくと、既に司令室が視界に入っていた。

会話をしていると時間が早く過ぎるような錯覚がする。川内と話しこむときだって、同じような感覚を覚えるものだ。

司令室の前まで歩き、ドアを開ける。

黙々と執務をしていたらしい川内が顔を上げてこちらを振り向くのが見えた。

「あ、おかえり提督……と、神通ちゃん？ どうしたの」

川内は私が神通と共に戻ってきたことを不思議に思っているようだ。

川内に伝えることがあるのだったか。どうにも私を介さずに伝えたいことだったよ

うだが。

後ろでドアが閉まる音がした。

「姉さん。少し耳を……」

「ん？ なになにー？」

神通は川内の方に歩み寄り、早くも自らの仕事を果たそうとしている。

私が聞くわけにもいくまい。司令室に入つてすぐのところできつと佇む他なかった。

……まあ、聞こえはしないだろう。

「……………」

「うんうん。それで？」

神通は川内の耳に自らの口を寄せ、何かを口にしてている。

思った通り、神通は私には聞こえない程度の声量で話しているようだった。

「……………」

「……………う、うん」

「……………」

「……………え、あ、えつと」

「……………」

「……………そ、そっかあ」

べつに気になってはいない。

読唇しようにも、神通の口元は私からは見えないためできない。気になっているわけではないので、べつにいいのだが。

……それはそうと、やはり姉妹が共に様子を見てるとしつくりくる。

川内の隣には神通がいて当然のように思える。ここに那珂もいたなら、さらによかったのだが。

「ふう。すみません提督。気を使っていたいて」

やがて会話は終わったらしく、神通は私に頭を下げた。

どこに出ても恥ずかしくない艦娘だ。

「気にするな」

「では、私はこれで失礼します」

「ああ」

「……ま、またね神通ちゃん」

司令室を出ようとドア付近まで近づいてくる神通に、川内が声をかけた。

声が少し震えているが、一体どんな会話をしていたのか。全く想像もできなかった。

「あ、提督。伝え忘れていました」

「……? どうした」

私の横を通り過ぎ、ドアノブに手をかける瞬間、思い出したように私の方を振り返った。

なんだ。結局、私にも用事があったのではないか。

「先日『秘書艦は川内がいい』と仰られたようですね。昨晚姉さんが嬉しそうに語っていただきましたよ」

「ちよつ！ 神通ちゃん!?!」

「……………」

「それでは、失礼します」

今度こそドアノブに手をかけ、神通は司令室を出ていった。

少し笑みを浮かべていたのは、きっと見間違いではないのだろう。

その姿を見送ったあと、私は川内の方へ向き直った。

机に向かわなければ執務ができない。ひとまず机に座ることにした。……川内の隣だ。

「……………」

「……………」

会話がない。

神通のときとは違う、明らかに気まずい空気が流れていた。

原因は言うまでもなかった。

「……あ、あの、ていと」

「川内」

「は、はっ」

川内は緊張した面持ちで私を見る。手が震えているのを確認した。

真つ直ぐこちらを覗く眼差しに、何かを期待されているような感覚がする。

そのような雰囲気、私は——

「神通のこと、『神通ちゃん』と呼ぶんだな」

「……………え」

「妹にそのような呼び方をするのは珍しいと思ってな」

耐えきれない。

私には少し難しい空気だった。何かを察しろと言われて察することができるなら、ここまで無愛想な人間は完成していない。

これは逃げではない。戦略的撤退と言うべきものだ。こうして有耶無耶にするよう仕向けるのが最善の選択肢なのだ。

「……『神通ちゃん』って呼ぶの、変なの？」

そうすれば、この純粋な性格をした艦娘は釣られる。

「いいや、変とは思わない。珍しいと思うだけで」

「……呼び方、変えてみようかな。『神通』……はちよつと嫌だしなあ」

真剣に悩み始める川内の様子からして、もう大丈夫だと判断する。

純粹な奴でよかった。

「……そろそろ執務を再開するか。昼までにはある程度終わらせておきたい」

「んー、そうだね。頑張ろう。……『神通さん』。ちがうなあ……」

想像していたより彼女は無垢らしい。書類との睨めつこを再開する一方で、本気で神通の呼び方を考えているようだった。

本当に一緒にいて楽しい奴だ。

川内のように純粹ではない私は、赤城と神通にはいつかどうにかして一泡吹かせると決意した。

——執務を再開する。

惰眠

一般的に、昼食後の睡魔には耐え難いものがあるらしい。抗えずに寝落ちすることもあるようだ。

そうした体験はしたことがないため私にはその気持ちは分からないが、昔から周囲の人間がそう語るのを聞いて、そういうものだとして理解していた。

人間の中で最も深い部分の欲求なのだ。仕方ないことだろう。

資源管理に関する書類に目を通し、昨日一日でボーキサイト貯蔵量が半減した謎の事件に赤城への不信感を抱いていると、隣から呻き声が聞こえてくる。

「んー……あー」

「……手が止まってるぞ」

「んー」

艦娘も、多分に漏れないらしい。フラフラと頭を揺らしながら大本営からの伝達書の内容を確認する様子は、まるであかべこだった。

世間には艦娘を人間に対する脅威だとか国賊だとか揶揄する者も少数いるようだが、その評価を下すのは、まさにいま船を漕ぎだす寸前の川内を見てからでも遅くないはず

だ。

昼食後の執務中はいつも眠そうにしていたが、今日はいつにも増して眠たそうだ。あかべこになっているのは初めて見る。

さすがに睡眠不足というわけではないだろうが、疲労が十分に回復できていないのかもしれない。休暇でも取らせるべきだろうか。

「提督―」

「……なんだ」

「ちよつとだけ……ちよつとだけだから……」

「……………」

「寝てもいいかな……?」

眠くなるような口調で赦しを乞う川内は、見るともう寝る体勢に入っていた。机に突っ伏すような体勢で、何とか頭だけは持ち上がっている状態だ。

そこまで強烈な睡魔なのか。恐ろしい。

とくに咎める必要もないため、首肯で返しておく。

「30分ほどでいいか」

「……うん。ありがと」

「ああ」

目線を目の前の書類に戻す。鎮守府全体の食費があまりにも莫大になっているのを確認して、赤城の顔を思い浮かべた。

川内の体の力が抜けていく気配がする。

「……………」

腕時計の秒針の音がやけに大きく聞こえる中、私の筆が紙面を走る音や遠くの方の微かな喧騒が雑音を織り成す。

個人的には、昼食後の時間よりは、こうした作業中に聞こえる音の方がよっぽど眠気を誘ってならない。

すこしだけ、頭に靄が差してきた。

「……………てーとくー」

少しくぐもった声が聞こえた。

出処は言うまでもなく川内だが、机に伏したまま、ピクリとも動くことがない。机に話しかけているらしい。

「……………寝るんじゃないのか」

「……………そうなんだけど、寝ちゃうと起きれない気がする……………」

すこしわかる気がした。眠気はあるが、1度寝ると遅刻するであろう、焦れたい瞬間。

自身の睡眠時間の短さを過信しすぎた学生の頃など、1時間睡眠で乗り切ろうとして失敗した覚えすらある。

「寝ちやいそうだから、ちよつと喋り相手になってほしいな……」

「わかった」

「……やった」

会話くらいなら片手間でもできるだろう。

食費の削減は、特定の艦娘に安価で量の多い料理を食べさせれば解決できるかもしれない。

「……昨日吹雪ちゃんが言ってたんだけどさ」

「ああ」

「やっぱり吹雪ちゃんも、姉妹艦相手に『ちゃん』ってつけちゃうんだって」

「……それ、まだ悩んでいたのか」

先日話題逸らしのためだけに放った言葉が、そこまでの悩みの種になるとは思わなかった。

どう呼んでもいいように思うが、下手なところを刺激してしまったのだろうか。

『神通ちゃん』でも『神通さん』でもなんでもいいだろう。川内の好きなように呼べば」

「……でも、提督のことを『提督ちゃん』って呼ぶのは嫌でしょ？」

「べつに構わないが」

「えっ」

「川内が恥ずかしくないので、どう呼ばれてもいい」

「……『提督ちゃん』は私が恥ずかしいかな。やっぱり提督は提督でいいよ」

「そうか」

私の呼称は『提督』か『司令官』のどちらかのみなので、特殊な呼ばれ方をされたかった気持ちもあるが。

本人が違和感を持つと言うのなら素直に諦めよう。

「……そういえば、吹雪ちゃん、秘書艦やりたがってたよ」

「……………」

「『私も役に立ちたい』だって。いい子だよね」

「……そうだな」

吹雪はそういう奴だ。

真面目に仕事をこなし、真面目に人との付き合いをし、間違はなく一緒にいて楽しい艦娘。それでいて練度も高く、非の打ち所のない性格をしている。

秘書艦に就かせたなら、きっとよく働いてくれるだろう。

「……………秘書艦にしないの？」

「……ひとまず保留だ。君との約束を果たすまでは、すまないが待っていてもらう」
「……そっか」

たしかに、川内だけに負担がかかっている今の状態は何とかなければならない。現に、そのせいで彼女は机に突っ伏しているのだから。

しかし今すぐそうするわけにもいかなかった。私には私なりに、通すべき義のようなものはあった。

その後のことは……まだ分からない。

「……まだ答えを聞けてなかったんだけどさ」

途端に、川内の声が小さくなった。

その声量と言葉の内容で、彼女の言おうとすることがなんとなく予想がついたが、その先の言葉待つことにした。

「……提督はさ、秘書艦……私でよかった……？」

この前とは少し違う問いだった。しかし聞きたいことは同じなのだろう。

私は額面通りに受け取ることにした。

「ああ。君でよかった」

「……そっか」

君でないとだめだ、とは言わなかった。

私には逃げる選択肢が与えられすぎているように思う。もっと追い込まれたのなら答えられる気がするが、現実はそうでないのだから仕方がない。

「君はどうなんだ。……川内は、私が提督でよかったか？」

「……………それは」

「……………」

「……………」

「……………それは？」

「……………」

「……………川内？」

反応がなくなつた。川内の方を振り返ると、相変わらず突つ伏した姿勢を保つていた。

溢れるような吐息が聞こえるあたり、結局睡魔には勝てなかつたらしい。

私の質問に対する回答は得られなかった。一方的に質問をして逃げるのか。私が責められることではないが。

……………まあ、いいか。

「……………」

いつの間にか手を止めてしまっていた執務を再開する。川内との会話の片手間に執

務をこなすことなど、私にはまだ不可能らしい。

やることはまだまだあるのに、無駄な時間を過ごしてしまった。

いつか来る回答時間には、納得のいく回答をしなければならぬ。

それまでに用意しなければならなかった。逃げを許さない答えと、財政を圧迫する赤城への対抗策を。

唐突の

鎮守府だって、不眠不休で働くわけではない。

先日、当鎮守府の機動艦隊が、南方の小さな海域を深海棲艦から奪回した。これにより南方諸国との海路での物資輸送経路が増え、更なる海域の解放が見込まれる。

当然これは少しは人類への貢献となる。

大本営は、私たちが一定の戦果を果たしたと見なしたらしい。今朝、私のもとに通達があった。このご時世にも関わらず、紙での通達だ。

曰く、私とその管理下にある艦娘に一週間休暇を与えるだとか。

「……………」

嬉しい知らせだった。着任してから毎日鎮守府の運用と艦隊の指揮をし続け、ストレスの溜まる一方だったため、この休暇は魅力的だった。

普段から死と隣合わせの戦場に赴いている艦娘も、この休暇で心身ともに休むことができるかもしれない。

たったひとつ惜しむべきは、その通達があまりに急すぎたことだ。

私の目が狂っていないければ、休暇は本日から与えられる。……大本営の悪いところが

出ているような気がした。

慌てて確認したところ、ここしばらくは急を要するような出撃の予定はなかった。近海の哨戒と遠征の予定を組んでいるだけだ。

「……はあ」

時計を見ると、まだ朝7時前である。

普段なら、もうそろそろ川内が司令室に来る時間だが。

バタバタとドアの外に足音が聞こえるあたり、川内がここに向かってきているのはやはり間違いないらしい。

「てーとくー！ おっはよー！」

やけに高いテンションで司令室に入ってくる。毎朝こうだが、朝に強いタイプなのだろうか。

私には理解し難い。

「おはよう」

「……？ あれ、まだ始めてなかったの？」

執務をしている様子のない私に違和感を覚えたらしい。いつもは川内が来る前から執務にとりかかっているため、奇妙に感じているようだ。

「ああ。ここしばらくは何もしなくてよくなった」

「ん？ ん？ どういうこと……？」

「……これを読め」

説明するより見せた方が早い。大本営からの通達を渡す。

右から左に目線が動く。呆れた表情になるのが見て取れた。

「……急じゃない？」

「ああ。本当に」

「ね。こういうところ、ちよつとなあ……」

「どうにかすべきだな」

菱餅。

前もって告知をしてもらいたかった。それくらいできるはずだ。そこができたらあとは概ねいいんだが。

「……哨戒とかはするんだよね？」

「最低限はする。この付近だけだ」

「大丈夫なの？ まだ不安定な海域もあるんじゃない？」

「他所に任せるとはいいが」

「うわあ……もしかして、いつか私たちも他のところを任せられたりするのかな……」

「……他所が休暇を与えられたら、カバーするのは私たちだろうな」

「そっか。ま、仕方ないか。今回代わりにやってもらうし」

私たちが開けた穴は他に埋めてもらうしかない。他もそうなのだろう。

貸し借りが生まれるようで少し面倒なシステムだが、代替案が浮かぶわけでもないの
で納得せざるを得なかった。

腕時計を見ると、7時を回ったところ。哨戒任務が入っていた艦娘は既に起きている
だろうが、もともと今日は休みだった艦娘が起きているかどうかは怪しい。

さすがにあと1時間もすれば起きているだろう。

「8時頃にこの指示を放送するが」

「それまで暇だね」

「休暇を与えられたとはいえ少しは仕事があるだろうと思つたが、特にやることがない。
遠征もしないから資源の管理も楽だ」

「……やることがないよね」

結局やる必要もなくなったが、簡単な作業なら、本日の分は昨日のうちにある程度は
終えてある。最近は余裕をもって執務を切り上げることができているため、成長を実感
してならない。

この場面に限っては、少しくらい仕事があつたほうがいいが。暇だ。

「とはいえ折角の休みだ。川内も好きに過ごせばいいんじゃないか」

「そうだねー。執務ができないの、ちょっと残念だけど……ま、このあとは普通に姉妹で過ごすかなー」

「そうか」

いいことだ。

先日の川内と神通の様子を見ていてひしひしと感じたように、安心できるような関係である限りは、やはり家族は共にいるべきだ。

そこに尊いものを感じてならない。私も両親を大切にしようと思えるものだ。

「……あ、外出もしていいのかな。遠出するつもりはないけど」

「私に言えばいつでも許可は出す」

「そっか、ありがと。お菓子でも買ってこようかな」

「そうか」

姉妹で菓子を食べてつゆつくり過ごすのだろう。普段川内は秘書艦として私のもとにいるため、あまりゆつくり話すことはないはずだ。

この機会に、姉妹水入らずで、楽しく過ごしてほしいものだ。

「あ、そうだ」

川内が言葉を落とす。

『菓子』という言葉に何かを思い出したらしく、私に何か尋ねることがある様子だ。

「私たちはタケノコ派だけど、提督は大丈夫？」

「……あ、ああ。私はどちらでも構わないが」

「よかった。キノコ派だったらどうしようかなって」

「そ……そうか。あの、せんだ」

「あ、炭酸はいける？」

「……大丈夫だ」

「じゃ、オレンジジュースでいいよね。私たち炭酸飲めないし」

「聞く必要あったか」

やはり川内は朝に強いらしい。やけにテンションが高く、刹那的な会話を楽しんでいるように思える。

私には朝から寸劇を楽しめる気力はないが。少し羨ましい。

「それより川内」

今の私には、そうした会話よりも引つかかることがあった。

私の気のせいなのかもしれないが……川内のことだから気のせいではないはずだ。

「ん、なに？」

「私も一緒にいいのか？」

「え？ だって私秘書艦だし、一緒に……」

「これは休暇だ。秘書艦としての責務は忘れていい」

「……………あ」

姉妹水入らず、と思っていたら、いつの間にか私も勘定に入っていたらしい。

この川内という艦娘、秘書艦という立場が生活にまで染み込んでいる。働きすぎではないか。

「わ、私、提督と一緒にいるのが当たり前になってたかも。あ、あはは」

「……………」

さすがに恥ずかしいらしい。照れ隠しに自分が今放っている言葉の意味も分からず喋っているようだ。

それはそうだ。みんなそうする。私だってそうする。

「あ、あは……………」

「川内」

「……………なに？」

「私も一緒にいいいな？」

「……………うん。当然」

先程までは行く気がなかったが、気が変わった。

私もやることがないのだ。暇を潰せることがあるなら、強引にでもやりにいきたい気

分だった。

「あとで菓子を買いに行くか。近くにコンビニがあつたはずだ」

そうと決まれば気が乗った。

このあたりの地理にはまだ少し慣れていないが、そこはどうかなるだろう。

川内が誘ってくれたのだから、案内くらいしてくれるはずだ。

姉妹の空間に割り込んでしまうことに少し申し訳なさを感じていたが、それよりも楽しみな気分が勝っていた。

私も、勝手に川内と一緒に買い出しに行くつもりでいたことに気づき、一人で悶えた。

姉妹

最近は欲しいと願ったものがすぐに手に入る世の中らしい。

ある程度の需要を先回りで予測し、供給の手を止めない者たちがいる。特に、少し栄えた地域だと、供給の密度と数量が強力で、どこにいても目当てのものに出会える場所が見つかる。

鎮守府の周りも多少は栄える。蓮根畑に見慣れるような土地出身の私は、この地域の利便性に心を驚掴みにされてしまった。

つまり、コンビニは素晴らしい。

しかしコンビニの素晴らしさとは関係なく、無情にもドアの開く音がする。

「……………」

左手には様々な菓子が入ったレジ袋。

右手に提げたビニールの袋には、少し重みを感じた。

橙色の飲料——所謂オレンジジュースが、2リットルの容器に入っている。滅多に買わないサイズだ。当然1人では飲みきれない。

「提督？ 入らないの？」

「……ああ、入る」

右手に感じる重みなど、どうでもいい刺激に感じた。

よつぼどの刺激でないと、私のこの緊張のようなものは拭いきれない気がした。

招かれるがまま、部屋の中に踏み入る。玄関で靴を脱ぎ、5メートルほどの廊下を先導された先にリビングが見えた。

川内の……川内型の部屋に入るのは、これが初めてだった。

「提督、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「……ふふ」

「……なんだ」

「いえ、なんでも」

当然神通もいる。

私と川内を交互に見て、それから意味深な笑みを浮かべたが、真意を知ることにはできない。できなかつたが、少し悔しかった。

深呼吸をする。

休暇初日は川内型と共に過ごすことと決めた方がいいが、こうなるのを考えていなかった。

阿呆だったのだ。

誰かの部屋、特に女性の部屋に入るなど、未知の体験だ。だれも教えてくれやしなかった状況だった。

「……那珂ちゃん、いつまでそこで縮こまってんのさ」

部屋の隅でぺたりと座り込んでいる那珂に、川内が話しかける。

那珂は緊張した面持ちで私の顔を一瞬覗いたが、すぐに目を逸らされた。

萎縮の文字がこれほどまで似合う表情はなかった。

「……だって、いきなり提督が部屋につて、こ、心の準備が」

「いつも普通に話してるじゃん」

「それとこれとはちがうんだって……」

「もう……ごめんね、提督」

「いや、那珂の気持ちはよく分かる」

まさに私がそうだ。いきなり彼女達の部屋に入るなど、心の準備ができていなかった。た。

ああいや、少なくとも私には、大本営からの通達内容を鎮守府全体に放送し、それから川内と買い出しに向かうまでは、いくらでもその機会があったはずだった。

ただ私が朝に弱く、頭が働いていなかっただけで。

「……まあほら、ここ座ってよ」

いつまでもリビングの入口で突っ立っていた私を、川内がさっさと入るよう指示する。

長方形型の長机の長辺に沿って2つずつ、4つの座布団が用意されていた。指示されるがまま、川内の隣に座る。

私の対面には神通が座った。その隣に那珂が座る……はずだろうが、未だに部屋の隅で深呼吸をしている。

那珂の様子を見ると、不思議と私の緊張のようなものが解けるような気がした。

あそこまで緊張されると、私のものなど微々たるものを感じる。

「……他人の部屋に入るのは初めてだ」

「そうなの？」

「自室に招くくらいならいくらでもあるが……そうか、こんなもんか」

基本的な家具はもちろんだが、本棚やカレンダー、コンセントに差しつばなしの充電器など、ごく普通のリビングのように感じる。

先ほどうし見えたが、玄関から入ってすぐに寝室らしき部屋が左手にあり、右手にはキッチンのような空間があった。

食堂や浴場は鎮守府内の設備として存在しているため、キッチンやバスルームなどはないと思っ込んでいたが、完備されている。マンションの号室のような造りだ。部屋と

いうよりは、少しだけ狭い家。

まあ鎮守府付属の寮ならこれくらい普通か、と勝手に納得する。

「綺麗にしてるな」

「でしよー？ 普段から心がけてるたまも」

「姉さん、そこに脱ぎっぱなしの服が……」

「嘘っ!? さつき寝巻きぜんぶ洗濯機に……!」

「……………」

「……あ」

「……まあ、今が綺麗ならいいんじゃないか」

「う」

脱いだ服を後回しにしてしまうことは、忙しい朝なら稀にあることだ。

今朝だって、川内は秘書艦として朝早くから私のもとに来ていた。忙しいだろうから、仕方ない。

それより、神通は姉に関することに対してはそういった対応ができるらしい。この前、工廠帰りに遭遇したときもそうだった。

普段はからかうことなどしない性格なのに、姉妹補正だろうか。

「那珂ちゃん、私もそっち行っていい……?」

川内は穴があったら入りたい状態だ。

那珂に助けを求めているが、那珂は那珂でまだ大変らしい。無惨にも断られている。

「……あ、本来の目的忘れてたね。買ってきたお菓子出すよ」

「2リットルのこれもある」

「お皿とコップ持ってくるね。来客用あったっけな」

立ち直りは早い性格らしい。

落ち込みはじめてから、目的を思い出し行動に移すまでの、あまりの時間の短さに感心しつつ、キッチンの方に向かっていく川内の背中を眺める。

手伝おうかと思っただが、私が行っても邪魔になるだけだろう。

「……提督」

「なんだ神通」

しばらくぼうっとその方向を眺めていると、神通から声がかかった。

「今日から1週間、当鎮守府は休暇に入る、という認識でよろしいですか……?」

「その認識で間違いない。いまさらどうした」

「いえ、その……」

何か言い淀んでいる。目線からして、食器を取りに行った川内の方を気にした様子だ。

川内にあまり聞かれたくないのか。じりじりと近づいてきている那珂には遠慮しない話らしいが。

「提督は、休暇中でも『提督』として接するのですか？」

「……………」

何を言いたいのかは理解した。提督という鎖に縛られない私自身の意思だとか、その類のものだ。

問題は答えだった。回答に困る質問など出さないでほしいものだが。

「……………今この時のように、友人としてなら、接することはできるが」

「それも『提督』として……………ですよね」

「まあ、そうなるな」

私が自分をさらけ出すことは、あまりあつてはならないはずだ。それが提督で在るためのひとつの条件であると理解している。

提督としての決定に私情を挟んではならないが、そのせいで艦娘との関係を壊してしまふ可能性もある。良くも悪くも、私は常に提督でなければならなかった。

それを固く覚悟した上で、私はこの立場を志願したのだ。

「あくまで休暇なら、立場のことは忘れて、貴方自身の思うように動けばよいのでは

……………」

その決意が、こんなに簡単に揺らぐとは思わなかった。

休暇中ならいいだろうと思う反面、1度『提督』をやめた時点で、もう元には戻れないような気がした。

しかし、自分でも気づかないうちに答えは出ていたらしい。

私は無意識に口を開いていた。

「私は——」

「提督！ 来客用のなかったんだけど、私のもいいかな？」

声に振り返る。重ねた平たい食器と4人分のコップを盆に乗せ、川内が帰ってきていた。

「私はいいが、気にしないのか」

「うん。そういうところ、なんでもいいんだよねー」

そこを気にしない人間は珍しくはないが、私としては、上官に自分のコップを使われるのはこの世に存在する如何なる事象よりも嫌悪感を覚える。

川内がいいと言うのなら使わせてもらうが、少し躊躇いがあった。

「提督は気にするのですか？」

川内が皿を机に置いていく最中、神通が尋ねてきた。

『提督』どうこうの話は、やはり川内には聞かれたくないものらしい。私も何故か、川

内には聞かれたくなかった。

そこへの疑問に頭が回ってしまい、物事がよく考えられない。適当に話を合わせることにした。

「どちらかといえば、使わせてしまうことに気を使う」

「……やさしいですね」

「そんなんじゃないが」

「姉さんもそう思いますよね？」

「え？ 私？」

『私のためにゲームをしばらくやめてくれるって提督が言っ』

「わああああ！ 神通ちゃん!？」

恐ろしい。私には会話に入る勇気が足りなかった。

神通と川内が騒がしく会話する中、私は大人しく勝手に菓子を広げることにする。タケノコが目だったので、皿の上にはばら撒く。

2人からは少し離れて、机の端のほうに寄る。

「那珂ちゃんふっかつー!」

那珂は復活した。

那珂の席は私から斜めのところだが、神通と川内の騒がしさに巻き込まれたくないら

しい。わざわざ私の隣まで詰めてきた。

私も同じ気持ちだ。一緒に隅で食べよう。

「タケノコが好きなのか」

「トップシークレットだよ！」

「そうか、そこまで好きならたらふく食え」

「聞いてた？ トップシークレット、なの」

「分かってる。私の分も少しやろう」

「……提督、お耳掃除してあげよっか？ アイドルの耳掃除だよ」

「遠慮する」

「えー、残念だなあ」

人によれば金を払ってでもしてもらいたい行為だろうが、鼓膜に不吉な予感を感じたため、今回は見送ることにした。

またの機会に願う。

「……この2人、いつもこんな会話をしているのか」

「んー……いや、今が異常なだけど……なんでだろうね」

「……こつちを見るな。ある程度は分かっている」

「そうなんだ」

「ああ」

川内が神通に一方的に嬲られる会話を背景に、タケノコを摘む。

タケノコのあとに飲むオレンジジュースは、味覚がぐちやぐちやになった。

休暇の暇

休暇をもらってから5日目。

急なものであっても休みなら思い切り休もうと思っていたが、今日は朝から司令室の席についていた。理由はない。なんとなく。

特に何をするわけでもなく座ったまましていると、いつもの時間に川内が司令室に来てしまった。なんとなくらしい。

会話もなく、2人していつもの席でぼうつとしてしていると、小鳥の囀りが少し開いた窓から聞こえてくる。

憎いほど清々しい朝だ。豪雨かつ暴風な天気なら、少しはやることがあるのだが。頬について虚空を眺める私と川内に、もはや生気は感じられないはずだ。

やけに感覚が研ぎ澄まされ、そのおかげで、川内が口を開く動きがすぐに分かった。
「……休暇もありすぎるとだめだと思っただよね」

「具体的にはどこがだ」

「こんな風に、なーんにもやることなくなるから」

「ぐうの音も出ない」

昔から長期休暇は向いていない性格だった。

学校などのそれもそうだ。最初は後回しにしようとしていた課題だって、長期休暇への飽きが来てしまうと自主的に取り組んでしまっていた。

課題もすべて終わってしまったあとの残りの日々は、ひどく退屈だった。遊び呆けるのも飽き、やるべきこともない。死人のように日々を過ごしていた。

振り返ると、長期休暇を満喫できたためしなどないように思う。

川内も、きつと同じなのだろう。

「そういえば提督、ここ3日いなかったけど、なにしてたの？」

「実家にいた」

「帰郷してたんか……せっかくの休みだもんね」

しまった。初日の突発菓子集会で川内型たちには伝えたと思っていたが、記憶違いらしい。

下手をすれば失踪事件と間違えられたかもしれない。次からは気をつけなければならなかった。

「どんなことしてたの？」

「特に何もしていない。両親に挨拶をして2日過ごしたただけだが」

「……じゃあさ、提督の故郷って、どんなところなの？」

「特に何も無い。蓮根がそこら中で見つかるような田舎だ。これといった施設も娯楽もない」

高度が高い土地だった。土壌にもそこまで恵まれていない。

それでいて付近に平野があるわけでもなかったの、昔から栄えようがなかったようだ。

最低限電気と瓦斯と水道、あと気休め程度にネット環境が整ってはいたが、コンビニひとつもありやしない土地だった。

「そこまで田舎なんだ……？ でも田舎って、のんびり暮らせる感じがしていいよね」

「ああ。ゆっくり過ぎすのに最適だ。まず空気が綺麗。見た目がおぞましい虫や害獣などにも遭遇できる。田舎はいいところだな」

「……プラスポイント、空気が綺麗しかなかったの？」

そんなもんだ。都会に住む者が抱くイメージ通りの環境は、実際にはないことが多い。

田舎の自然には、誰もが避けたがるモノが溢れかえっている。逆に、誰もが触れていながら娯楽はほとんどない。

「……ああいや、娯楽はひとつあったかもしれない」

私にはせめて、たったひとつ娯楽だったものを教えてやることしかできなかった。

「幼少の頃は、町内会の爺婆が集まる会議所に友人数人で押しかけると、活発でいい子どもと可愛がられ菓子を恵んでもらえた。それが唯一の娯楽だった」

「……提督、幼少期は元気で可愛い子だったんだ」

「……………」

「ご、ごめんって」

言いたいことは分かる。私だって、幼少期の自分を振り返ってそう思うものだ。

しかし川内にそう思われるのは、なんとも言えない感情があった。……自分がよく分からない。

「……本当に何も無いところだったが、採れたての蓮根は美味かった。悪くはない土地だとは思う」

「そっか。そうだよね」

私が故郷を肯定するような発言をすると、何故か嬉しそうな表情をする。

……川内のことも、よくわからなかった。

「提督、故郷のことなら饒舌だね」

「そう思うか」

「うん。普段仏頂面で喋るのに、さっきは楽しそうに話してた」

「……そうか」

「……提督、今も可愛いね」

「……………」

「……あ、謝らないよ」

本当に分らない。こんな性格をしていたらどうか。調子を狂わされる私も、調子を狂わせる川内も。

神通をこの場に呼べばいつもの調子に戻るのだろうが、そのときは私も軽くない傷を負う。呼ぶに呼べなかった。

「……川内はどうなんだ。君の故郷は」

苦し紛れに話題の主役を譲る。

強ばった表情をする川内を見て、すぐに後悔した。

「え……あ、その、えっと」

「あ、いや……すまない。本当にすまない」

「……ううん。大丈夫」

——最悪の選択をしてしまった。目の前にいるのが何者なのかを忘れていた。少し考えれば分かるはずだったが、発言に思考が伴っていなさすぎた。

彼女が人間でないことを忘れるなど、最も忌避すべきことだった。私の立場なら、尚更。

「……すまん」

「もういいって」

慎重に言葉を選ばなければならない。

空気が重い。彼女に与えてしまった不快感を消すにはどうすべきか、その考えだけが頭に残る。

自責と後悔に押しつぶされそうだった。

「……つて言っても、提督は気にするよね」

「……………」

「提督」

「……はい」

「なんで敬語なの……ま、いいや。私はべつに気にしてないけど、提督はこの先もずっと気にしちゃうだろうから」

川内は普段の調子で私に話しかける。私の失言などまったく気にしていないような素振りで、苦笑を浮かべながら私の性格を語る。

本当になんでもないような表情をしている。

「明日、買い物に付き合つてよ。服買いに行きたいんだよねえ」

「……わかった」

それでも、声が震えるのは、隠せないようだった。だんだんと、表情も崩れそうになつてくる。

こんな普通の少女をここまで追い込んだのが自分なのだという自覚に、むしろ冷静になる。

自身が辛い時に他人を慮ることができるような艦娘に、自責だの後悔だのと落ち込んで、これ以上気を使わせるわけにはいかなかった。

「川内」

「ん、なに？」

「ありがとう」

「んー？ よく分からないけど、どういたしまして」

震えた声のまま、川内は笑ってみせる。

彼女の性格は、よく分からなくなったままだ。

それでもひとつ確かなのは、思っていた以上に、私が川内に支えられていることだった。

贖罪

鎮守府から車を20分ほど走らせたところに、大型のショッピングモールがある。そのことを知ったのは今日だった。

思えば、私的な用事で鎮守府を出るのは、今回の休暇がはじめてだった。このあたりの土地勘がなくても仕方がない。

「そういえば提督、今日は私服なんだ」

モール内のアパレルショップで服を吟味しつつ、川内が問いかける。

買い物カゴの中にはすでに衣服が放り込まれている。見るに、これからの夏に向けての選択らしい。

「軍服を着ていても他の客を威圧するだけだろう」

「まあそうだろうね」

決まった制服があると、毎日の服装に気を遣わなくてもよく、楽なものだ。学生の時分には理解できなかった感覚。

今の私にとってはそれが軍服だった。それさえ着ていれば安心して執務にとりかか

ることができた。

しかし軍服がある分、私には私服が少ない。

私も少し洋服を見ようと思ったが、生憎今いる店はどちらかと言えば女性向けだ。店内にいるのも若干気まずく、うろろと動き回るのも気が引けた。

「これとかどうかかな」

「似合う」

ネイビーシャツに黒パンツを選びながら、川内が私に問う。即答した。

ファッションは私には分からないが、川内には合うような気がする。きっと彼女にはクールな服装が似合う。

それがなんとなくでしかないことに、申し訳なさを感じた。

「……今日、私だけでよかったのか」

「ん？ なにが？」

「私には女性の感覚が分からない。君に合うような服装も、私の身勝手なセンスでしか判断できない」

「……んー」

「他の艦娘でも連れてきたなら、君に似合う組み合わせを的確に伝えてくれたはずだ」

2人でこの場に来てしまったために仕方なく私に尋ねてきているのだろうが、仲の良

い者が一緒ならそちらに聞ける。」

私は車の運転のために同伴しなければならぬが、足と財布の役目だけで済むはずだ。

友人との買い物や食事に上官がいるのも鬱陶しいだろう。邪魔をしないように適当に時間を潰すことくらいできる。

「……まあ、そうだけどき。そうじゃなくて」

川内は認識が違うらしい。

呆れたようにため息をつき、責めるような目を私に向ける。

「提督はどう思うの」

「……なにがだ」

「私にどんな服装が似合うと思う?」

難しい質問だった。どの答えが正解なのかわからない。

川内からは若干の威圧を感じる。答えが分からないなりに答える他なかった。

「……あまり分からないが、落ち着いた配色の服装がいいとは思う」

「うんうん」

「川内にはクールな印象がある。白Tシャツにジャケットを重ねるだけでも、本当に似合うはずだ」

「そっか」

「……だから、きっきの組み合わせが本当にいいと思うが」

「しかたないな、提督がそこまで言うならこれにするよ」

言い終わるや否や、川内は手早くネイビーシャツと黒パンツを買い物カゴに入れ、足早にカウンターまで向かう。反応からして、きつと悪くない答えだったのだろう。

会計は自分で払うらしい。私が払うと申し出たが、笑って断られた。彼女のこれはきつと建前の遠慮ではなく、本心からのものだろう。

財布になるつもりで来たが。支払いを断られた今の私は、ただの足でしかなかった。強引にでも会計をすればよかった。少しの焦りと責任が身を蝕む。

「……それだけでいいのか」

「ん？ まあ、正直私服はけっこうあるからさ」

「そうか」

「とりあえず目的は済んだし、このあとひまだねー」

「書店でも行くか？」

「まだ読み切れてない本多いんだよねえ」

「私もだ」

普段休みがないような職に就いているため、読もうと思って購入した本を読み切れな

いことが多い。

この調子なら、読了まで要する時間はおそらく数ヶ月に及ぶように思う。

この状況で新しい本を買う気にもなれない。川内もそうだとするならば、書店には行けない。

「んー、映画とか観に行く？」

「映画は好きだが、最近のものは分からない」

「私もそうだなあ。興味のあるやつないし」

「……昼食の時間でもないな」

「お腹すいてないよね」

「いよいよすることがなかった。」

服だけ買って帰るというのも呆気ない。私の心の中に燻る焦りを解消できるような立ち回りができればいいが、それを満たすような誘惑もなかった。

「しかたないや、帰ろっか」

「……ああ」

川内が歩き出す。駐車場に向かうつもりなのだろう。彼女の隣に並ぶ。

しかし今日私が彼女にしてやれたことは、車を動かしたことだけだ。これだけで贖罪になる気がしなかった。

何かをしなければならぬと、強く感じた。

「提督」

「……なんだ」

「昨日のこと、まだ気にしてるの？」

歩みは止めないで、川内は私の顔を覗く。思わず目を逸らしてしまった。

私はどうも隠し事が苦手な性格らしい。顔に出るのか体に出るのか分からないが、かしろいともとは挙動が違うのだろう。

川内には秘書艦として毎日私の隣にいてもらっている。気づかれるのも仕方なかった。

「……………」

「……気にしなくていいよ。もともと大丈夫だったしさ」

恥ずかしい。こんなことを言わせるためにここまで出向いたわけではないのだが。

川内は遠慮しがちな性格だ。私のことを気遣っていることはわかる。その厚意を無下にはしたくない。

「提督と出かけるだけでも楽しいし」

「……そうか」

それでも、依然として申し訳なさが残った。

私にできる最大限の償いをしたかった。そのための方法が思い浮かばない自分に苛立ちを覚えるほどには。

「……………」

何かが目についたようで、川内がふと立ち止まる。

私の方を見ていて、たまたま見つけたらしい。視線は私の後ろに釘付けになっていた。

「どうした」

「ううん、やっぱりなんでもなかった」

「そうか」

なんでもないわけがない。

川内には分からないように視線の先を追ったが、万年筆の有名なブランド店があった。

当然高い。彼女の今の手持ちでは買えないのだろう。そうでないにしろ、どのみち購入に1度は躊躇いを感じる価格だ。

止めていた足を動かす。

「……………」

駐車場までは少し距離があった。

「川内」

「なに？」

「すまないが、少しお手洗いに行つていいか」

「ん。ここで待つとくね」

「いや……車の鍵は渡しておく。先に駐車場に向かつていてくれ」

「おっけ」

何も関係はないが、手持ちはある方だ。

川内が歩いていく背中を確認し、私は後ろに振り返る。

最近のお手洗いは料金がいらしい。

財布が紙幣数枚分軽くなつてから、私は駐車場に向かった。

贈り物

「まあ、暇だよな」

明日から普段の執務に戻る。つまり今日はする事がないということだ。

起床し軍服に着替え朝食をとって歯を磨いてからは特にやる事がなかった。司令室でぼうつと座っていると、明日に待ち遠しさを感じる。

隣の川内も、やはり同じらしい。

「暇なのは分かるが、一昨日もここに来ていなかったか」

「んー？ そうだっけ」

「せつかくの休暇に仕事場になど来るな」

「提督もそうでしょ」

「……まあ」

なんとなく来てしまう。執務を恋しく思っているのか知らないが、何故休日にもこんな所にいるのか、私は。

川内も川内で、他に行くところがないものなのか。友人と過ごすなり趣味に耽るなりすればいい。

「他の艦娘はみんな外出するらしいが」

「……………え、ほんと？」

「……………哨戒を任せている者や、初雪も含め部屋に籠るやつもいる。さすがに『みんな』は誇張がすぎたが、昨日のうちに外出許可を得に来た艦娘は多い」

休暇も最終日だ。ローテーションで全艦娘に休みの日を与えてはいるが、本格的に休める機会など、今回を逃せば長期にわたって来ないはずだ。

当分ありつけないほど珍しい休日には、友人と楽しく過ごす時間を作りたいのだから。

私は休暇が終わると聞いて心が休まったが、本来は休みにこそ心を安らげるべきなのだ。

「みんな暇だから外出を選んだはずだ。暇なら暇なりに、やりようはあるだろう」

「んー……………たしかに私も吹雪ちゃんとかに誘われはしたけどさ」

川内は誰でも打ち解けられる。交友関係の幅広い艦娘であるため、こうした際に誘われないわけがない。

本来、彼女は暇になるはずのない艦娘だ。よく暇になれるな、とむしろ感心する。

「なんとなく気が乗らなくて」

「そうか」

なんとなくなら仕方がなかった。気が乗らないなら断ったっていい。そんな日もある。

私だってそんな日もある。

「それにしても暇だ。読書の気分でもないし、暇しか感じていない」

「……そういえば吹雪ちゃん、提督も誘うつもりって言ってたけど」

「……………」

「暇なら暇なりにやりようはあるよね」

「……なんとなく、気が乗らなかった」

「ふーん、そっか。私と同じだね」

「何をニヤニヤと」

「……………へへ」

何が楽しいのか。私だって誘われたから行こうと思った。ただ何となく、面倒だっただけで。

「あーあ、みんな今ごろなにやってるのかなあ。暇だなあ」

「……遊びの誘いに乗らずに暇を嘆くなど、傲慢だと思わないか」

「艦娘も、そこだけは人と変わらないよねえ」

「あくまで君個人の話だが」

「提督も誘い蹴って暇だと言ってるんでしょ？ 私と同類だよ」

「人間とは傲慢な生き物だ」

「提督個人の話なんだけど」

「ずいぶん生意気な秘書艦だ。好感が持てる。」

川内とこうした恣意的な会話をするのは久しぶりのように思う。いや気のせいだった。

「……ねえ、今日なにかあったの？」

「なにがだ」

少し声のトーンを落として、川内が尋ねてくる。

あまり刺激しないように注意しているらしい。触れられたくないところかもしれないと探っているのだろう。

たしかにまだ触れられたくはないが、川内の思うようなものではない。

「いや……なんか今日の提督、珍しくそわそわしてるなって」

「……………」

昨日もそうだったが、そんなに分かりやすいだろうか。

なるべく外に出さないように、本当に心がけていたはずだったが。

「そわそわ……そんなことはないと思うが」

「はー？　ほんとーかなー」

「……隠しても無駄なのはわかった」

秘書艦の立場は大きいのかも知れない。私の機微にすぐ気付く。私だって、彼女の挙動が少しでもおかしければ気づくだろう。

長い時間を共に過ごした友人とはそんなものだ。

「……まだ、あと少しだけは待ってくれ」

「なに？　心の準備が足りない感じ？」

「まあそんなところだ。まあ、そこまで急を要する話でも、重要な話でもない」

ずっと機会を伺っていたが、どうにも切り出すタイミングを掴めなかった。『明日でもいいか』とさえ思った。

言及されなければずると引き伸ばしていたかもしれない。

——既に何かあると悟られているのなら、気も楽だ。少し覚悟をしてから話すことにする。

「そういうえば提督って、どんな本読んでたりしてるの？」

気を使って話題を変えてくれる。本当に良い奴だ。

「最近はまだ読んでいないが……『たったひとつの冴えたやり方』は読みかけだ」

「あ、私もそれ読んだことあるよ」

「SFが好きなのか」

「んー、別に。タイトルに惹かれたただけだね。提督はSF好きなの？」

「いや……タイトルに惹かれたただけだ」

「いいタイトルだよねえ……」

私はよく、題名だけ見て衝動買いをしてしまう。あまり理解されないが。

表紙買いはしない方だが、表紙に釣られて買うのと感覚は変わらないはずだ。

「読みかけなんだっけ。どこまで読んだの？」

「寄生」

「あー」

中盤。まさに今から転結に入ろうとする場面だ。

「いいところじゃん。はやく読み切ったら？」

「……読む時間がないのがな」

「休暇って知ってるかな、提督」

「読書は疲れる。休みの日は休みたい」

「……分かっちゃうのが悔しいなあ」

結局暇を持て余すのだから読書も良いとは思いますが、やはり億劫になる。

勉強をたのしいとは思うけれど、休日に自主的に取り組もうとは思わない学生の気分

に似ている。

私にとって読書は執務だった。

「……川内」

「なに？」

「気を使わせてすまなかった」

「え……？」

「先に言うが、ここまで気を使わせておいて、たいして大きな話ではない」

川内との会話には安心が伴うようで、どうでもいいことを話しているうちに、だいぶ心構えができた。

机の引き出しを開ける。

「川内、これを受け取ってくれ」

引き出しから取り出し、丁寧に包装された箱を渡す。包装紙に書かれたブランド名を見て、川内が目を見開くのが分かった。

理解したらしい。

「これ……」

「万年筆だ。気に入らなかつたら捨ててくれてもかまわない」

「……捨てるなんてしないよ。ありがとう」

昨日購入した万年筆。気に入ってはくれたようで、大切そうに抱えてくれている。

……ネームは入っていないが、その程度くらいなら許してくれるだろう。

「そっか。やっぱ、バレてたか」

川内は何か思い出す素振りをして、そう言葉を落とす。昨日のことだろう。

人の心を勝手に覗いてしまったような心地がして、少し申し訳ない。

「欲しかったんだよね、これ。すごく嬉しい」

「そうか。それならよかった」

思った以上に喜んでくれる。贈ってよかったと、本気で思えた。

「……でも、もう気にしてないって言ったのに」

「それは分かっている」

彼女が過剰な謝罪を好まないのは知っている。私が失言したときもそうだった。

そこは汲んだ上で、私は行動したのだ。

「それには謝罪の気持ちなど、ひとつも乗せていない。乗せてはいけなと思った。君

が『気にするな』と言ったからだ」

「……………」

「……ただの謝罪のためなら、渡すのにここまで悩まなかったはずだ」

「…………じゃ、これって」

川内が尋ねる。少し驚いたような表情で、私の方を見ていた。

どんな解釈をしたのか分からないが、大方『提督らしくない』とでも思っているのだろう。私らしくないことくらい、分かっている。

神通の言葉が脳裏に蘇った。

「……私はまだ『提督』でありたい」

「……そっか」

ずつと神通との会話が頭の中を回っていた。この鎮守府内での私自身とどう向き合うか、考えない瞬間はなかった。

結局、休暇の名目を借りたとしても、私は自ら『提督』をやめようとは思えなかった。それだけの勇氣を持っていない。

それでも、現にこうして、彼女への贈り物は購入してしまっている。

あのときの私が『提督』でいられたのかは、今の私には判別できない。あまりに刹那的な意思での購入だったためだ。

なら都合のいいように捉えることにした。私の中では答えを出さずにすべて有耶無耶にして、受け手に委ねることにした。

「私からは何も言えない。君が勝手に判断してくれ」

「じゃ、そうだね……『これからも秘書艦をよろしく』くらいに捉えとくよ」

「そうしてくれ」

それが一番楽な方法だった。逃げは楽なのだ。

いつか答えは出すだろうが、今はいい。そのときの自分に任せることにした。

「提督」

「……なんだ」

「これからもよろしくね」

よくもまあそんな恥ずかしいことを笑顔で言えるもんだ。川内らしいとは思うが。

とはいえ、応えないわけにもいかない。

「ああ。今後もよろしく」

「……提督、そんな笑顔でできるんだね」

「……………」

やはり応えない方がよかったかもしれない……が。

——まあ、たまには、いいか。

閑話：提督に対する動搖のさせかた

訓練と演習の合間はやることがない。

私達艦娘には様々な任務が与えられているけれど、出撃をしない日には休憩する時間も十分にある。私にとってのそれは、鎮守府内を目的もなく歩いて暇を潰す、退屈で無意味な時間に過ぎなかったが。

一緒に訓練を受けていた駆逐艦の娘達は、訓練を終えると演習までの暇を喜んで寮の方へ駆けていった。能天気ともとれる彼女達の素直さが、今は羨ましい。

私の場合、退屈でない瞬間があるとすれば、人影を見つけてはゲリラ的に声をかけることくらいか。

たとえば、提督だとか。

「提督」

「なんだ」

「おはようございます」

いきなり背後から声をかけたのにも関わらず、提督は驚いた様子もなく反応を返して来る。他の娘達はみんな肩を強ばらせるのに、彼だけは違っていた。

きっと工廠から司令室に戻る最中なのだろう。姉が連れ立っていないことからすぐに分かった。

「……おはよう。神通。また君か」

「また、と申しますと？」

「工廠から戻る途中に会う艦娘、君以外にいた試しがない」

「偶然ですね」

「怖いくらいだ」

抑揚のない声で、提督が言葉を落とす。

相変わらずの無機質な声は、彼が着任してからも随分経つたと言うのに、未だに少し怖く感じる。

……本当に偶然なのだけけど。

私に組まれた訓練と演習の間にある休憩時間は、彼が工廠に行くタイミングと、おそらく被っている。それだけでなく、休憩時間には暇つぶしに散歩をしているのも効果の強い一因かもしれない。

「今日も急ぎですか？」

「時間はある」

「でしたら、少しお時間いただけませんか……？」

「1時間ほど余裕があるが……何の用だ」

「いえ、すこしだけお話でもできればと」

「そうか」

やった。

提督と2人で話す機会は少ない。その原因は私の姉が秘書艦として常に提督の隣に立っているためでもあるだろうけれど、最たる原因は彼の抱える仕事が多すぎることだ。

普段は執務に日中をほとんど費やすため、私達との接触の機会が減多にない。夜間は姉が着いて回っているため、最低でも3人での会話になる。

しかし、今日は1時間前後の余裕があるらしい。

明らかに着任当初とは仕事量が比べ物にならないほど膨れ上がっている今になって、それだけの余裕を持てるとなると、彼の仕事を捌く能力が格段に跳ね上がったことは火を見るより明らかだった。

「立ち話も面倒だ。神通、コーヒーくらいなら私が奢るから、食堂に寄っていいか。司令室にも近い」

少し笑みが零れてしまう。

無愛想な口調のまままで気配りを利かせてくるあたり、提督らしい。きっと艦娘ひとり

ひとりのスケジュールをすべて頭に入れているのだろう。

——訓練後の疲労くらい、気にならないのだけれど。

「私の分は自分で出しますが……はい。食堂でお話を」

「たすかる」

「すみません提督。結局奢っていただいて……ありがとうございます」

「気にするな。それで、要件は」

「特にこれといった用はないのですが……」

ほかに誰もいないがらんとした食堂で、対面になって座る。

円周が長く底の深い紙の容器いっぱい注がれたコーヒーを少し呷ると、熱さで舌が焼けそうだった。

「提督とこうして話す機会が減多にならないので」

「1対1は稀だな。……川内以外は」

「……姉がご迷惑をおかけしていませんか？」

「心配する必要はない。よく手伝ってくれている。むしろ感謝したいほどだ」

「……そうですか」

意外……ではないけれど、提督の姉に対する評価は高い。

姉からもよく『褒められた』などと何度も聞かされる。提督と姉、どちらも共に能力を向上させて、かつ良好な関係を築いているらしい。

身内が褒められて嫌な思いをする家族なんてほとんどいない。私も例に漏れないようだった。少し、うれしい。

「そういえば、君と那珂は昨日出かけていたな」

「はい。連続休暇の最後だったので」

「そうか。楽しめたか」

「ええ。とても良い映画でした」

「映画……」

無表情のまま、提督が考え込むような素振りをする。

この人は本当に感情が死んでいる。感情を表に出すことを知らないようにさえ感じる。『提督』だからだろうか。

——こんなときくらい、やめてしまえばいいのに。

ずっと着ぐるみを被っているのはきつと疲れる。それを和らげるために素を出したって、誰も責めやしない。提督が負う責任くらい、ここの者ならみんな理解している。

「君が映画を観るイメージなどなかったが」

「たしかに映画を自ら観に行こうとは思いませんが……妹の趣味なので」

「なるほど。恋愛映画か」

「想像しやすいですか」

「まあ、那珂だからな」

妹にどのようなイメージを持っているのか。だいたい予想はつくけれど、私からはとても聞けなかった。

あれはあの娘の素顔だから、いつかは好意的に捉えてほしい。

「……川内は誘ったのか？」

「いえ、もともと用事があると伝えられていたので……」

「用事」

「はい。内容は聞きませんでした」

「……そうか」

提督は少し目を伏せて、コーヒーから浮き上がる湯気をひたすらに見つめている。動揺。僅かでも提督の表情が変化したような気がして、どこか嬉しさを感じた。

姉からは、昨日は司令室にいたとだけ伝えられたけれど。きつと用事とはそのことだ。提督ならそれは分かっているはず。

彼の心が揺らぐ瞬間は、いつも姉が関わっている。

「……提督」

「なんだ」

「昨日、とある方に聞いたのですが」

今を逃せばこの先ずっと言う機会を逃すように感じた。提督が多少なりとも動揺を
しているうちに、言っておきたかった。普段の提督にはすぐに躲かわされてしまうだろうか
ら。

——弱っている敵は追い詰めて叩くのが私達艦娘の常識だ。それを今このタイミン
グに適用するだけなのだから、私は間違っていない。

「その方に遊びに行かないかと誘われたとき、『川内は来るのか』と尋ねたそうですね
……?」

「……」

「……」

「吹雪にはしばらく明石の手伝いでもさせるか」

名前は伏せたのだけれど。私のせいだとぼつちりを受けさせることになってしまっ
た。心が痛んだ。

心の傷みはどうでもいいとして、嬉しく思うこともあった。提督の目線がひとつに定

まらず、空気中で不規則な動きをするほこりを眺めているように、ゆつくりと大きく動いているのを確認する。声こそ起伏の欠片も感じないくらい平坦なのに、挙動には動揺が露わになっている。

こんなことを思うのは失礼だけれど、ある種のゲームの、友人の立場にあるキャラクターになったような感覚だった。ちゃんと背中を押しているのは分からないけれど。

——とはいえ、言ってよかった。

「結局姉は行きませんでしたか……」

「ああ」

「もし姉が行くと答えていたら、どうなさっていましたか？」

「……………」

「今はまだ、分かりませんか？」

「……………ああ」

「そうですか」

甘い。温くなったコーヒーを一気に飲み干し、席を立つ。口の中が苦味に覆われたが、今はちよūdい刺激だった。

「提督」

「……………なんだ」

「答え、考えておいてくださいね」

「そうする」

きつと彼なら、本気で考えてくれるはずだ。形はどうあれ、答えも出すはず。

姉以外には実直でいられる彼なら、そう遠くない未来には。

期待に胸を踊らせながら、食堂を後にする。

退屈だったはずの暇は、いつの間にか楽しいものに変わっていた。

「——え？ それ、ほんとに提督のこと？」

「はい。ずっと無表情で、未だにあまり慣れません」

「……そうかなあ。提督、色んな表情すると思うけど」

「……そうですか。それなら、よかった」

愚鈍

今日は朝から頭が冴えなかつた。

起床して朝食を摂り、歯を磨いてから服を着替え司令室に向かうまでに5回壁に頭を打ち付けた時点で、笑えないほどぼうっとしていることに気がついた。

それでも執務には影響がなかつた。見慣れた形式の書類を手慣れた手順で処理するだけであるため、特筆すべき難点など存在しなかつた。

「料理とかできるといいよね」

「急にどうした」

「お昼近いから」

昼前の空腹が執務に向かう力を失わせてくる時刻。

川内は既にすべての集中力を昼御飯の想像に注いでいるらしく、料理の大切さを説いている。私も一部賛同する感覚を覚えつつ、なるべく目の前の作業に注意する。

曖昧ですつきりと冴えない曇った頭では、会話をしながら執務をこなすことすら無理難題のように思えた。

「自分で美味しい料理つくれると楽しいと思うんだよね」

「それはそうだが」

「でしょー？」

「私には氣力が足りない。雑なものでも調理できるだけでいい」

「えー。料理できる男の人とかかっこいいけどなあ」

「氣持ちは分かるが、そこまで辿り着くまでの過程は長い。」

「今まさに興味のあるものでない限り、多大な時間を費やしてまで練度を上げようとは思わなかった。私は怠惰な人間なのだ。」

「内容を流して読んで判を押すだけの作業に入ると、意識を彼女との会話に注ぐ余裕も生まれてきた。」

「まあなんとというか、私ももうちょっと家庭的になれたらいいなって。趣味も作りたいたい」

「先の休暇で無趣味の辛さを十二分に知ったらしい。」

「私がここに着任するまでは夜戦という楽しみを持っていたと聞いているが、秘書艦の立場のおかげで寝溜めができずに夜戦などできるはずもない。」

「そもそも、莫大な時間をかけて安全に少しずつ海域の解放をしていくつもりでいる私の指揮下では、他の鎮守府との共同作戦や大本営指導の大規模作戦時以外に夜戦を行うこともない予定だ。」

私が着任して以降、この鎮守府はこれといった大きな修羅場を経験していない。私に夜戦経験は無かった。

今後川内が秘書艦を辞退することがあっても、彼女が夜戦をすることは滅多にないだろう。私の艦隊運用と川内の趣味はこれ以上ないほどに合わないのだ。

「料理なら夜戦よりはマシな趣味になりそうか」

「そうそう、けっこういい趣味になりそうつて思……あれ？　いまひどいこと言われた？」

「気のせいだ」

川内に夜戦をさせられないと考えると、新しい趣味を持つてくれることは都合がよかった。

ただの罵倒にすぐ気づけない川内に、少しだけ笑みがこぼれるのを感じた。表情の制限は難しく困る。

「……鳳翔あたりなら喜んで教えてもらえるとと思うが」

「んー、頼ってみよっかな……」

ちらと川内の方を見ると、腕を組んで渋い顔をしている。任せた分の作業はすべて終えたようで、万年筆は書類の小山の前に置かれていた。

仕事が早い。

「……すまん」

「え？」

「私が執務を早く処理できるようになるまでは、それも少し抑えてもらわなければならない」

「あーもー、だから、謝ることじゃないって。私から秘書艦申し出たんだから。気にしてたらずつと前に辞めてるよ」

「……ああ、そうだな。私の悪い癖だ」

謝罪を口にしなければならぬ機会が多い社会に、随分と毒されているようだ。僅かにも相手への蟠りを感じると、つい口をついて出るようになってしまった。

今日はぼうつとするせいでさらに口が緩まっているように感じる。気をつけなければ。

「というか提督」

「なんだ」

「それ、最後の書類だよ」

「は？」

工廠からの高速建造材使用の許可申請を受理したところでそう告げられる。

机周りを見渡す。書類が積み重なった山が右手にあるが、これは処理済みの山だ。処

理しなければならぬ山は、いつもなら左手にまとめてある。

……ない。ほどほどの空腹とゆっくりした会話、目の前の書類の処理に、にぶい脳の処理能力はすべて占有されていたようだ。視野狭窄で気づいていなかった。

「……今日の作業量、そこまで少なかったか」

「面倒なのはいつもより少なかったけど、量は変わらなかったよ」

「……そうか」

流しながら処理できるものが多かったとはいえ、ここまで早く終わるとは予想していなかった。

しまった。やることが全くない。

「遠征と演習の結果報告、あとその資源管理がまだ残ってはいるが」

「今日もそうだったけど、報告だけ聞いて次の日に処理すればいいと思うよ」

「……遠征班が帰投するのは夕方か」

「それまでやることないよね？」

全くもって川内の言う通り、遠征班の報告を聞くまでやるべきことはない。

この場合を想定していなかったわけではなく、むしろそれを目的に日々の執務に励んでいたのだが、この日に限っては想定外が過ぎた。

頭の回転がまるでない感覚のする今日にこうなると、何をしていたのか分からなくな

る。

働かない頭では思考が纏まらない。ひとまず、常々言わんとしていたことを伝えることにした。

「……これから先、日によつては日中に執務を終えることができるかもしれない」

「うん」

「そんな日には訓練を受けさせることもできる」

「それが約束だったよね」

「毎日この状況に持ち込めるかは分からない。まだ約束が達成されたとは言いがたいが」

「たまたま楽な作業が重なっただけで、本来ならもう少し時間がかかっていたはずだ。」

正式に約束を果たすことができたかと問われると、そうは思わない。

「その意識は川内にとつても似たようなものらしく、領きを返してくれる。」

「……正直午前で終わるとは思っていなかった」

「夕方の前くらいに終わるかなーって思ってたよ」

「私もそう見込んでいた」

腕時計を確認すると、まだ朝と昼のどちらとも形容し難い微妙な時間帯だった。見込みより6時間は早い。

「本来は君の訓練時間を確保するための約束だったが……今日のこれは不測のものだ。」

今から訓練に行けと指示するのも酷だろう。今日はもう休んでくれていい。解散だ」
あとは自由にしろと伝える。

先程料理について語っていたが、この時間からなら鳳翔の指導を受けることもできるだろう。新しい趣味を見つけるためにも是非行つて欲しいが。

なぜ私の顔を見たまま留まっているのか。

「……聞いていたか。解散だ」

「うん。自由時間つてことだよね」

「自由時間だから私の隣にいると?」

「まーやることないしさー」

「……趣味くらい作れ」

「提督がそれ言うの?」

反論できない。憐れに陰気な雰囲気を出しながら休暇を共に過ごした川内には、私の趣味の少なさが筒抜けだった。

「まあでも、秘書艦になってから夜戦もできてないし、そろそろ趣味も必要だよね」

「暇を無駄に過ごすのは辛いか」

「うん。提督もそろそろ作つた方がいいんじゃない?」

「……ゲームなら趣味と呼べる」

「……封印してるよね」

「君の夜戦と同じだ。私に限っては、今はまだ趣味を我慢する時期だと把握している」
約束をきちんと果たせるまでは自粛をしなければならない。

辛くはない。努力とはそういうものだ。

「……鳳翔なら今日は休みだが」

「休日でも頼んだら料理教えてくれるかな？」

「そこは鳳翔だ」

「だよねえ」

話を戻すと、好感触の反応が返ってくる。

いい反応だ。趣味を持つてくれるなら、私の精神的負担も少なくて済む。

「まだ昼前だ。ちようどいい時刻だろう。聞きに行けばいい」

「んー……そうだね。教えてもらうよ」

いまいち決めあぐねているようだったため、後押しをすることにした。

きつと鳳翔なら、優しく教えてくれるはずだ。悩む必要もないと思うのだが。

「……提督は行かないの？」

遠慮がちに尋ねてくる。他人に聞きづらいことを聞くようなよそよそしい態度に、なぜかすこし腹立たしさを感じた。

やはり今日は頭が冴えていない。この苛立ちの理由も推察できないほど、思考が鈍っていた。

「……先程も言ったが、私は雑なものでも調理できるだけでいい」

「……で、でも提督、この後暇でしょ？」

「……それはそうだが」

「どうせやることないんだったら教えてもらおうよ」

未だによそよそしさを感じる川内の提案だったが、やはり反論する余裕もない。

目覚めてからずっと頭が弱い今日に限っては、彼女の意見を鵜呑みにして従うことが最善の方法だった。

苛立ちは残っていたが、原因の分からない今はひとまず無視することにする。

「……やはり趣味は作っておいた方がいいかもしれない。上官たる者、精神的に満たさず健康でない状態は好ましくない」

「……つてことは？」

「鳳翔の居場所は分からない。ひとまず空母寮に行くか」

席を立つ。川内からは既に他人行儀さがなくなっていた。

「……なんなんだ。」

「……へへへ」

嬉しそうな響きの笑い声が聞こえたが、気のせいだと思ふことにした。

妖精

憂鬱な色をした雲が空を覆う日には、僅かな蒸し暑さが司令室に籠る。

紙の擦れる音や紙面に染み付くインクの音、窓に叩きつけられる雨の小さな音が、集中故の静けさを際立たせる。

「ねー、提督」

漢字と片仮名と平仮名、加えて数字とアルファベットが嫌がらせとばかりに乱雑に敷き詰められた難解な紙面を睨みつけながら、川内が言葉を落とす。

執務中の私語が発生するのは、たいていそうした書類にぶち当たった瞬間だ。

……ちようどいい休憩にはなるか。私も作業に向かう手を止め、川内の方へ向きなおす。

「妖精さんに執務任せられないのかな」

「………思ったことがないわけではないが」

今の川内がそうであるように、苦手なタイプの書類を処理しなければならぬときには、誰かに押し付けてやりたいような黒い感情が湧くことがある。

当然押し付ける相手はおらず、いたとしても押し付けるわけにはいかないため結局自

分で処理するのだが、あまりにも書類処理が嫌な場合、妖精に丸投げしようと思ってしまう。

結局自分で終えなければならぬのだから、最初からゴネずに向き合う方が効率がいいのだが。

「艀装工程や整備などの大半を彼らに任せてしまっている。これ以上の作業や責任を負わせるのもな」

「まあそっか」

「仕事が終わった妖精はそこらでふわふわ浮いていてくれればいい。それが妖精の役目だ」

「ふわふわしながら休んでる姿、癒しだよねえ……」

「全くだ」

神出鬼没で警戒心の強い彼らが、隙をさらけ出して同じ場所に留まり寛いでいる姿を見かけると、どうも猫のような愛らしさを感じる。

猫と妖精はそれとなく似ているのだ。どちらも愛でるべき存在。

猫と妖精が戯れている場面を目撃するようなことがあれば、あまりの癒し力に精神が擦り減り頭がエラーを起こすだろう。エラー猫。

「そういえば、妖精さんの姿を司令室で見かけたことあんまりないんだけど」

「……………ああ」

「急に声のトーン落ちたね……………」

自分でも分かるほど、声の調子が落ち込む。ため息が似合う声色だった。窓の外の雨音もよく合う。

「私は気にしていないことなのだが」

声の落ち込みは偶発的なもので、気分が下がったとか絶望しているだとかそんなじゃあない。

提督たるもの、如何なる状況においてもそんな状態でいることは許されない。あつてはならないはずなのだ。

……………はずだったんだがな。

「妖精さ……………妖精たちに避けられているように感じる。司令室に滅多に來ない事実もそうだが、私のそばへ近寄ることに躊躇いを持っているようだ」

「……………あー」

「それが私の心を抉つたりなど決してしていないが、やはり関係は良好であった方が円滑な艦隊運用ができるだろう。どうすれば避けられなくなるだろうか」

「……………提督、やっぱ可愛いね」

「……………」

「ごめんって」

川内は茶化すように笑いながら謝罪の言葉を述べる。薄っぺらく全く誠意のない謝罪だった。

前にも似たような状況があったように思う。ちくしょう。

「んー、まあ、やっぱ無愛想なんんじゃないかな」

一応しっかりと考えてはいたらしく、意見を述べてくれる。意地悪く振り切れない性格が、実に川内だった。

私は無愛想らしい。着任してすぐの頃にも素っ気ないなどと評されたものだったが、未だにその評価は変わらないようだ。

「改善しようと思っていたが……まだ駄目なものか」

「休暇終わりの次の日に聞いたけど、神通ちゃん、まだ提督がちよつと怖いらしいよ」

「……そうか」

そこまで威圧感を与えているのか。ここまでくると重症だろう。

最近はやや猫などの小動物にも牙を剥かれることが多い。理由が分かった今、本気でなおそうと覚悟する。猫と妖精のためだ。本気にならないわけがない。

「……昔は猫も妖精も、私の周りに集まってきてくれた。大人になる過程で失ったモノが大きすぎる」

「……お通夜ムードだね」

「べつに気にしているわけではないが……」

「はいはい」

軽く流される。気にしているのは筒抜けだった。

「とうか『昔は』って言ってたけど、提督っていつから見えるようになったの?」

「妖精が、か」

「うん」

難しい話だ。妖精が視界の端をちらちらと動き回る生活は当たり前になっている。

『当たり前前』の始まりを覚えているかと問われると、微妙な答えしか出せない。私が朝食をパンに切り替えた日時など分かるはずもないし、学生の時分に感じていた両親への反骨精神がいつ消え去ったのかも分からない。

そんなもんだ。最初のことなど曖昧にしか思い出せない。

「見えるようになった日付は明確には分からない。気がつけば隣にいた。当時の文脈は覚えていないが、幼少期に一度目にしてから認識できるようになった」

「最初から見えてたわけじゃないんだ?」

「先天性で見える者の方が珍しいはずだ」

「生まれた時から見えるの、私たち艦娘くらいなのかな。生まれたって表現でいいのか

分からないけど」

建造以外で艦娘が生を受ける瞬間、所謂ドロップの瞬間の詳細は判明していないが、建造にしろドロップにしろ、ある程度の艦装を身にまとった姿で発生することが知られている。

艦装を動かすには妖精の援助が必要であるため、艦装を纏う発生と共に妖精の視認ができる能力を得るようだ。

そうした理由から、艦娘は人間とは違い、本当に妖精との意思疎通ができていうに思う。

本当に羨ましい。私も妖精ときちんとコミュニケーションをとりたいものだ。来世は艦娘がいい。

「……妖精さん、最初はどこで見かけたの？ 海沿い？」

「分からない。しかし私の実家は海も何も無い田舎だ。山の中かどこかで見たんだろう」

「ふーん。そっか。山って珍しいけど……」

なぜか興味ありげに聞いてくれる。私の妖精話に需要があるものなのだろうか。

それならいくらでも会話の種はある。妖精の小動物感の愛らしさを語るだけで良いのなら、何時間でも余裕で語り続けられる自信がある。

「……ま、過程はどうでもいいや。提督が見える人になつてくれて、本当によかつたよ」
「……………」

「そうじゃなきや、提督がこの鎮守府に来ることもなかつたもんね」

「ああ。そこまで評価してもらえらるほど艦隊運用の才能があるかは微妙だが、やれるだけのことはしよう」

「そういうことじゃ……ああいや、まあ、うん。そうだよね」

言葉とは裏腹に、半目になつた辛辣な目線が痛い。

やめてくれ。川内の発言の意図するところに気づいてはいるのだ。それはたぶん、君も分かっているだろう。

『友人になれて良かった』などと面と向かつて言われてしまうと、気恥ずかしくてならないのだ。許せ。

「執務を再開するぞ」

「……逃げた？」

「何がだ。早く執務に戻れ。夕方までには終了させたい」

手を止めていた執務に向き直る。訝しむ川内の目線をひしひしと感じるが、振り向いてはいけないような気がした。

私には書類の山が待っているのだ。思考を活字にダイブさせる。慢性的なボーキサ

イト不足。赤城。

「はー！ 提督はほんとずるいなー！ てーとくはずるいなー！」
雑音が聞こえるが、執務に集中している私の耳には無音に近い。
きつと雨粒が窓を叩く音だろう。さつさと執務を終わらせよう。

早朝

朝の目覚めから司令室に向かうまでの時間は短い。

起床後に顔を洗い口を濯いでからすぐに簡単な朝食——所謂インスタント系の食品を食べ、歯を磨いて軍服に着替え寝巻きを洗濯カゴに放り込んでおく。

それだけの行為に時間がかかるはずもなかった。

自室から司令室に向かう際に感じた冷えた空気に包まれた鎮守府内には、昼間の喧騒も陽気もなく、生気を感じない孤独な空気が漂っている。

嫌ではなかった。一人で落ち着くことのできる時間は、一日のうちこの時間も含め小一時間程度しかない。日中騒々しい友人がずっと隣にいることもあり、1人になる時間が好きでないと行ってしまえば嘘になる。

司令室のドアを開く。時刻は午前6時より少しあと。

川内が来るまでの1時間ほどは、自分のペースで着実に執務ができる。

「……あ、提督。やつほ」

できるはずだったが、私の椅子に座ってふんぞり返っている川内を視認してしまった。私に1人の時間は必要ないようだった。

「珍しいな。こんな時間に」

「今日は早めに起きちゃったからさー」

湯呑みふたつに給湯器の湯を注ぎながら川内に語りかけると、眠そうな声が返ってきた。想像通りの応えだったため、特に何を返すこともなく給湯器から湯が流れ出るのをぼうつと眺める。

司令室のドア横のスペースに備え付けてあるこれのおかげで、わざわざ食堂にまで向かう手間が省ける。たすかる。

「わ、ありがと。……あつつ」

茶を淹れた湯呑みを座っている川内に寄越す。川内は礼を述べたあと手で湯呑みを覆うように持ち、その熱さに悶えている。私が茶を淹れてやったとき、毎回こんな痴態を晒しているが、阿呆なんだろうか。

この時間に呑む茶は本来なら私一人で静かに楽しみたかったが、この阿呆が来てしまったのなら仕方がない。騒がしいのも嫌いではなかった。

自分の湯呑みを手に持ったまま、おぼろげに思う。

戦果を報告する際の艦隊旗艦のように、執務机の前に突つ立つたまま。

「それで？」

「ん？ なにが？」

少し時間をおいてみてもなんの変化もなかったため、耐えきれずに話しかけてしま
う。

朝っぱらから突つ立つたままにいるのも疲れる。そろそろ湯呑みを持つ手も熱さで
限界になつてきた。

「そこをどいてくれなければ座れないが」

私の席に居座つたまま湯呑みを傾けている川内にジト目を向ける。

この艦娘、いつまで厚かましくそこに座っているつもりなのか。湯呑から口を離した
川内が苦笑いを浮かべるのを見て、ジト目の効果を確認する。

生まれて初めてこんな目を向けたが、様々な場面で使えそうだ。

「そこ空いてるじゃん」

「……君の席だろう」

「いやー……うん」

川内が乾いた笑いをこぼす。普段ならもっと巫山戯てくるはずだが、この瞬間では大
人しく引き下がってきた。

この目、ここまで効用があるのか。脅しに使いそうだ。

「ごめん、やっぱこういうのはちゃんとした方がいいよね」

完全に萎縮しているが。顔を強ばらせている。やりすぎたのかもしれない。

「……いや、今日は君の席に座ろう。そのままでもいい」

刺激のない日常もよくない。多少なりとも変化があった方が、新鮮な気持ちで執務に集中できるだろう。

ジト目を向けるのをやめ、川内が席を移動しようとする前に席を奪っておく。手を過剰に温めてくれていた茶を少し口に含んで、そのまま飲み込んだ。

対面から隣に移動したわけだが、川内には少し身を引かれてしまっていた。そこま

か。
「……今の目、意識してやってたの?」

「所謂ジト目というものだが」

「……それ、妖精さんたちとか駆逐艦には向けない方がいいよ」

今後一切使わないようにしようと思慮する。

そもそも私が妖精にジト目など向けるはずもないが、万が一見られてしまつては、ただでさえ距離を置かれていた状況がさらに悪化するだろう。

駆逐艦の多くにも、まだ威圧感を与えてしまっているらしい。吹雪あたりは着任初日

から普通に接してくれたが。

「なるべく笑顔で振る舞うようにしなよ」

「……昔から苦手だ。写真を撮ると言われたときも、どのような顔をしていいかわからなくなる」

「……提督、普段普通に笑えてるのにね」

川内の評する限り、私はよく笑う人間らしい。

私は全くそう思わないが、自分でも気が付かないうちに表情を緩めてしまっているのかもしれない。

……笑顔が多いなどと評価してくれるのなら、引いたまま会話をしてほしくないのだが。

「……身を引いたままでいられると少し気になる」

「提督がこつちに詰めてきたらいいじゃん」

「……………」

「ほら、ここに空いてるよ?」

川内が自らの座る椅子を半分開け、ポンポンとその場所を叩く。肘掛けのない椅子であるため、座ろうと思えば座ることができる。

……座れと? そこに?

「……………」

「あれー？ もしかして座れないのー？ てーとくー？」

動き出せないままにいる私を、川内がここぞとばかりに煽ってくる。

普段の寸劇の気色が強い会話でも強く出れないわりに、私が何も言えずにいると強気になれるようだ。こいている。

「……………」

「今日はずっと一緒の椅子に座って一緒に執務したかったんだけどなー」

「……………そうか」

ニタニタと私を見つめる川内の様子を見て、なにか吹っ切れる感覚がした。

一方的に煽られるままでは、茶も美味しく飲めない。

腹は決めた。秘書艦として普段から私の手伝いをしてきている彼女がそう望むのなら、私はそれに従うまでだった。

「……………え」

素っ頓狂な声を上げる川内をよそに、湯呑みを持って川内の方へ向かっていく。

半分空けてもらっていた椅子に座りなおし、机の上に積み重なっていた書類から昨日まとめておいた遠征の報告書を引っ張り出す。

川内の顔も匂いも息遣いも、すべて近くに感じ取れてしまい少し気恥ずかしかった

が、茶を飲み干すことで有耶無耶にした。彼女が望んだのだ。気にしてはならない。

川内はそっぽを向いて顔を見せないようにしている。表情が見えないが、だいたいわかる気がした。

「……顔が赤いぞ。どうかしたか」

「……え、いや、その」

「大丈夫そうだな。今日はこのまま執務をしようと思うが」

「……い、いやあ、それはやめた方がいいんじゃないかな」

「遠慮するな。君が望んだことだ。普段助力してくれている分、できるかぎり応えてやらなければならない」

「……うう」

私の方に顔を向けてくれないまま横で戸惑ったように声を詰まらせる川内に、表情筋が動くのを感じた。手で押さえて確認すると、頬が上がっているのが分かる。

幸い、彼女はこちらを向いていないため、この表情を見られることもない。川内が私の方に振り返るまではこのままでもいいか、と表情を抑え込むのを諦めた。

——悔しいが、彼女の『よく笑う』という評価は妥当なものかもしれない。

昼過ぎ、同じ椅子に座っている場面を遠征の報告に来た吹雪に見られ、ジト目を向けられた。

ジト目の威圧感を身をもって知るいい機会だった。

「提督、もうよくない？ そろそろ自分の席戻っていいよね？」

『『今日はずつと一緒の椅子に座って一緒に執』』

「ああああああ!!! わかったから!!!」

「君が言い出したのなら最後まで実行しろ」

執務は捗った。

わりとよくあること

秒針の乾いた音が室内に響いていた。

ここ数日で増えた分の所属艦娘のリストを更新したあと、次に待つ書類に手を伸ばす。左手で書類に触れたところで、手首の腕時計が視界に入ってしまった。

現在時刻を確認する。午前10時すぎ。いいペースで作業を進められている。昼食後くらいにはすべて終わられると見積りを立てたが、そのことへの喜びよりも居心地の悪さが先行してしまう。

司令室内の空気は最悪だった。ピリピリとした空気を出す者が1人と、苦笑いで私に同情するような視線を送る者が1人と、米櫃を片手に呑気に白米を味わっている者が1人。

適当に椅子に座らせた3人はずっと無言だ。何か話してきてくれた方が、こちらとしても行動しやすいのだが。

ひとつひとつ書類を処理していくごとに、目線は机上の置き時計と腕時計を3往復ほどしてしまふ。辛い。

なにより最悪なのが、この空気の原因である川内がこの場にいないことだ。川内とど

うでもいいことを話して気を紛らわせたかったが、実際ここにはいない。というより、今朝から姿を見ていない。

「……赤城」

最悪な空気を打ち崩すために、ひとまず声を出してみる。

幸せそうに食を堪能している赤城に声をかけたのは、彼女だけが余裕そうな心持ちをしていたからだ。

「ふあい？ なんれふか？」

すぐに返事を返そうとしてくれたらしい。口の中に運んだ白米をこぼさないよう口元を押さえつつ、私の呼びかけに応じてくれる。

口元を押さええているせいで、くぐもった声になっている。緊張を全く感じないその様子に、ついため息が漏れた。

「飲み込んでからでいい。鎮守府の運営費のうち食費だけが膨大に膨れ上がっているとだけ伝えておく」

「……………ふう。わかりました。すこし抑えます」

「頼む」

首肯をもって返してくる。努力はしてくれるようだ。いま白米を楽しむのはやめてくれないらしいが。

「……提督」

低い声でした。

赤城との会話で少し気が紛れていたが、先ほどからずっと威圧感の強い艦娘に声をかけられ、再び気分が沈む。

声の出元へ目線を動かすと、鋭い眼光がこちらを睨んでいた。

「なんだ、長門」

「川内はまだか」

「わからない。先ほど携帯に連絡を入れたが返事がない」

「……携帯に連絡か。そうか。わかった」

長門の声が低くなるのを確認した。さらに空気が悪くなる予感がして、胃が痛みだす。

実際はそこまで怒りを抱いていないのだろうが、ビッグセブンと評される者の存在感は息が詰まるほど苦しかった。

気圧されないうよう堪えるだけで精一杯だ。

「……………」

長門から目を逸らすと、その先で吹雪と目が合った。

苦笑いを浮かべられる。同じような心持ちらしい。

——簡単にいうと、遅刻だった。朝7時にこの場に来る予定だった川内が、午前10時を回つても姿を現さない。

遅刻だけならまだよかった。普段私の手伝いをしてくれているため、午前をすつぽかして午後から司令室に来て、1日くらいは黙認できた。

運が悪かったのは、今日が秘書艦と私、およびその日の各艦隊旗艦による定期的な通信機能確認、士気の確認を行う日だったことだ。

通信機能の確認とは言っても、通信は妖精を介するものであるため不都合は起きにくい。また、少しでも不調のある者には自己申告するよう義務付け、実際それは機能している。艦娘のための環境作りも私の仕事である。故に士気の低下もある程度は未然に防いでいるはずだ。

つまりこの定期的な確認は形式上のものでしかない。その行為にあまり意味はないが、形式上のものであるが故に形だけは行わなければならない。時間の無駄だがこれが規則だった。

この確認に必要な人員は、私と哨戒任務に当たっていない各艦隊旗艦、それと秘書艦。つまりそういうことだった。

「そろそろ全体放送で呼び出した方がいいんじゃないか？　なあ、提督」

「……ああ」

旗艦たちをここに集合させた時間は午前9時半だった。この場にいる3人には、既に30分ほど待たせてしまっている。

今日は特に今すぐに必要な演習や遠征もなくすべて昼食後に組んであるため、最悪午前中に川内が現れてくれればそれでいい。そこだけは救いといったところだ。

とはいえこれ以上待たせるわけにはいかない。彼女たちには彼女たちなりに出撃前の過ごし方があるはずだ。それを阻害してしまっていることは間違いなかった。

ふだん執務の場として使用しているが、ここは司令室だ。執務機の裏にある全体放送用のスイッチを入れ、備え付けのマイクに手をかける。

『あー。連絡だ。川内本人でも他の奴でもいい。とにかく川内を司令室まで連れて——ッ!?!』

爆音がした。音源の方へ視線を向けると、肩で息をする川内と、勢いよく開ききった司令室の扉が跳ね返るところが見えた。

少し跳ねた髪や服装の乱れを見るに、恐らく寝坊だろう。

この場の全員から視線を向けられた川内は、息を整えることもせず、川内はすぐさま口を開ける。

「いめんなさい！ 遅れました！」

『解決した。以上だ』

放送を切る。音量からして、川内の声も入っていただろう。

鎮守府全体に自身の遅刻を晒したわけだが、当の本人は気にした様子もなく息を整えはじめている。

「お待たせしてしまいすみません。今すぐに通信機能の確認を行います」

数秒だけ荒い息を漏らしたあと、川内は秘書艦として淡々と言葉を落とす。

普段よりよっぽど秘書艦らしい言葉遣いだ。

「……寝坊か？」

長門の冷たい声が響く。

静かな言葉に確かな怒りが込められている……ような気がしたが、おそらくそんなことはない。

威圧感が強いだけで、とことん優しい性格をしているのが長門だ。

「つ………はい。寝過ぎしました」

「そうか。……まあ普段の激務は私達も知っている。責めはしないさ」

やはりりたいして怒ってはいなかったらしく、冷たい口調のまま事を穏便に済ませようとしている。

身に纏う雰囲気と言動がいちいち一致しない奴だ。もう少し笑顔を増やせばいいの

に。……しまった、言われ覚えがある。

「じゃーいまはらつうひんかくにんでふね？」

「……『じゃあ今から通信確認ですネ？』らしいです」

口元をおさえた赤城が尋ねてくる。聞き取りづらい言語を話していたが、口の中の白米が原因らしい。

この艦娘、川内が司令室に飛び込んできてからも平然と米を食べていたが、もう少し緊張感を持たないものなのか。

ところで何を言っているか分からなかった。翻訳をしてくれた吹雪には感謝する。

「……はあ」

ため息が出る。長門の威圧感は今も変わらない。こいつはいつもこうだ。少し気圧されそうになっていたのが馬鹿らしかった。

「はやく始めよう。待たせてすまなかった」

これ以上時間をかけるわけにはいかない。とつとと済ませることにする。

「……以上です。今日はすみませんでした」

「待たせてすまなかった。解散してくれ」

形式上のものだけに、始まってしまえば早かった。席を立ててからすべての行程を終えるまで5分もなく、そのまま旗艦達に正対し解散の指示を出す。

確認の作業はほとんど川内に任せていたが、その姿は秘書艦らしい丁寧なものだった。普段からそうしてくれるとありがたい。

「提督、今日のお昼ご一緒していいですか？」

解散指示に従ってさつきと帰ってくれるかと思ったら、赤城から声がかかった。長門と吹雪も私の方へ向いていることから察するに、恐らくこの2人もついてくるのだろう。

それは構わないが、赤城の右手には空になった木製の米櫃が掴まれている。

「……さつきまで食べていなかったか」

「あれは朝食です」

「そうか」

はたして午前10時に摂る食事が朝食かどうかはさておき、昼食を共にするのは嬉しい誘いだ。

まずこの場にいる面子が揃うことが珍しい。現在旗艦を任せている3人はこの鎮守

府の中で比較的練度が高いため、どうしても海へ出てもらう機会が多くなる。

この機会を逃せば暫く巡ってこなさそうだ。ありがたく乗らせてもらうことにする。

「……ああ、そうだ。川内も一緒になるが」

「ええ。わかっています。いつもそうですよね」

いつも通り川内もついてくるだろう。そう告げると、当然とばかりに返された。

分かつてはいたが、四六時中一緒にいればニコイチセットだと思われるのか。今のところ、実際その通りになってしまっているが。

川内の方へ目線を向けると、やけに頬を緩ませていた。見なかったことにする。

「正午を回ったあたりには食堂にいます。その時間帯に来ていただければ……」

「分かった。なるべく早めに行こう」

昼食まで待たせるわけにはいかない。30分ほど前に向かつてもいいだろう。少しの間暇になるだろうが、川内がいるなら会話が絶えることはないはずだ。

昼食の約束も終え、ようやく解散の空気だ。

はやく帰ってくれないだろうか。長門の存在のせいで息苦しくてたまらない。

「それにしても……提督」

その長門から声がかかる。

鋭い目線を投げかけられ身を引きそうになったが、寸前で留めた。駆逐艦にとっての

私が悪印象であるようなもので、長門に対する私は駆逐艦なのだ。

長門にはきつと威圧している意識はないのだろう。私が気圧されては彼女に失礼かもしれない。

「携帯に連絡を入れたんだったか？」

「……………」

ああいや、今は威圧しているようだ。嫌な予感がした。

全体放送をかける前に川内に送信した、司令室に来るよう促す旨の連絡を指しているらしい。

「君たちは互いに連絡先を交換しているんだな」

「……………」

次の展開が読めてしまう。ちくしよう。

「私は提督の連絡先を知らないが。赤城と吹雪は知ってるか？」

「いえ……………」

「司令官のは知らないです……………」

長門の問いに赤城と吹雪が答える。

確かに彼女たちの連絡先は知らない。連絡は全体放送で事足りる。わざわざ連絡先を知っておく必要もなかった。

それを聞いて長門は満足そうに頷いている。最初から答えを知っていたんじゃないかな
いか。

「……………」

「秘書艦だからか？」

「……………そんなところだ」

「……………ふつ。そうか」

相変わらずの存在感は残したまま、長門が笑顔を落とす。

いい笑顔だ。私を辱めるのにはちょうどいい。

「では失礼する」

笑顔を貼り付けたまま長門は司令室を去った。嫌味な笑みだった。

その後を追うように、赤城と吹雪もこの場を後にした。

ここの艦娘は去り際に爆弾か何かを落としていかなければならない規則でもあるの
だろうか。少なくとも、神通と長門には課された規則らしいが。

「……………」

確認作業の際に席を立っていたため、ひとまず自席へもどる。私が動き始めた後、一
拍遅れて川内も席へ向かうのが分かった。

3人が去った後の司令室内は静かだった。

いつもならもつと煩いはずだが、遅刻したことへの負い目のせいで会話を切り出せずにいるらしい。だいたいわかる。川内はそこで悩むような性格だ。

腕時計を確認する。午前10時半。そろそろ執務を再開したいところだが、ここは話しやすい空気を作るのが私の役目だろう。

「……あの、ていと」

「珍しいな」

「えっ……？」

川内の言葉に食い気味で語りかける。

ネガらせるだけの暇を与えてはならない。そんな暇があるくらいなら、申し訳ないが、私の戯言に付き合ってもらおうことにした。

「普段遅刻などしない奴だろう、君は。神通も寝過ごしは看過しないと思っていたが……今日は早朝から哨戒に当たってもらっていたな。運が悪かった」

「……………」

「最近執務と訓練を両立してもらおう日も増えた。疲れているのなら遠慮なく言ってくれ」

「……そんなんじゃないよ」

「そうか。なんでもいいが、無理はするな」

口に出してしまえば、自ら志願して秘書艦をしてくれている彼女に怒られかねないが、無理をさせているのは私だ。

一日に執務の半分と午後からの訓練を行わせているのが大きな負担になっているのは考えるまでもなく分かるだろう。今回の彼女の遅刻は本来、彼女への負担を認識しながらも『今は仕方ない』と対処を後回しにしていた私が一方的に悪いのだ。

今の私は完全に無能だ。

少しでも負担を減らすべきだ。私がそれを実行すべきなのだ。

「……提督は無理してない?」

「君のおかげで執務は日中で終わるし、作戦会議や指揮も今のところ苦ではない」

「そっか」

「ああ」

「……よかった」

川内の頬が微妙に上がるのが分かった。嬉しさというよりは安堵の表情だ。素直に優しさを他人に向けることのできる性格が羨ましい。川内が隣にいて居心地がいいのは、彼女が健気で『いい人』であることにほかならない。

だからこそ、彼女の執務の量を減らすなどして負担を減らそうとせず、にいた利己的な自分が矮小な存在に思えた。

明日からでも負担を解消することは決心したが、それだけでは私の中の罪悪感のようなもの崩すことはできない。

何かできることを考えるようにした。

「……遅刻についてだが」

「……うん」

「成人したての頃、上官との飲み会に1時間遅れたことを思い出した」

「えっ……大丈夫だったの？ それ」

「怒られはしなかった。雰囲気重くなることもなかった。むしろ軽くなった」

「……財布が？」

「ああ」

次に発声しようとした単語を先回りされる。

長く秘書艦を続けているためなのか、私の会話の流れが読めるようになってきたようだ。

私がやらかした遅刻は、仕事上のものだったなら、きつと怒鳴られたり殴られたりするくらいはあつたかもしれない。たいして怒りを買わなかったのは、それがプライベートトな待ち合わせだったからで。

私の紙幣の減りが著しかったことを考えると、カモが来たくらいに捉えられていたか

らでもあるだろうが。

「よくあることらしい」

「え？」

「遅刻。真つ青になって上官へ詫びを述べようとしたら、そう答えられた」

「……………」

「遅れた時間の長さに関わらず、遅刻は誰だつてしてしまうことがある。それだけで怒る理由にはならないんだと。私の場合、飲み会代が浮いたとむしろ喜ばれた」

「…………提督」

遠回しに、遅刻のことを気に負うなど伝えるつもりの話題選びだったが、分かってくるだろうか。財布の下りを先回りした川内なら、汲んでくれるんじゃないだろうか。

察してくれたならいいんだが。

「よくあつたらダメじゃない…………？」

「…………それはそうだが」

そうか。ここはまだ無理らしい。

「だから、その…………」

結局私から伝えなければならぬようだ。察してもらうのが最善だったが、仕方ない。

「……川内。今日のことは気にしなくていい」

この言葉を捻り出すために苦勞した。

自身の意見を直接外に発信するのは、昔から苦手なのだ。

「1度の失態くらいでそこまで落ち込まなくていい。『よくあることだろ』と免罪符を引つ提げて大きい面をしている」

川内の顔を覗きながら言葉を発する。

こんなときにも相手と目を逸らさないでいられる自分に感謝をしたい。相手がどんな表情をしているか把握できて助かる。

——長門たちが去ってから、ずっと泣きそうな顔をしていた。

四六時中隣にいないければ気づけないくらい、些細な表情の変化だったが。

「……バレてた?」

「普段脳天気な君が落ち込んでいるところは珍しい。普段見ないような表情をしていたら否応でも分かる」

「……そつか。脳天気って部分は納得いかないけど」

反論の言葉を織り交ぜつつ、川内は困ったような表情をする。

すまない。気付かないふりができるほど、私は思慮深い人間ではないのだ。

「正直な話、君の遅刻で迷惑しなかったかと問われると言ひ淀まざるを得ない」

「……うん。そうだよね」

「だがその原因は私にある。それに加え、私は君に対して今まで迷惑をかけ続けてきた側の人間だ」

「……」

「だからと言うわけではないが、気には負うな」

「……うん」

「それになにより——」

一旦言葉を切る。息が苦しい。一度に多くを語りすぎた。

ゆっくりと息を吸って、次の言葉を紡ぐ。

「君にはいつも助かっている……と、何度告げたか分からないが、要はそこだ。私も長門達も、この鎮守府の者なら全員、君への感謝を感じている。今日一日の失態くらい、それに比べれば小さなものだ」

「……うん。ありがとう。それだけでも気が楽になったよ。ほんとに、ありがとう……」

一番伝えたかったことを言葉に出した。

自身の感じたことを外部に漏らすことは苦手だ。川内の反応を確認する余裕もなかった。それくらい、私にとっては気力を必要とする発言だった。

呼吸を整える。いつの間にか息が乱れていたようだった。

数秒して息が落ち着いたあと、もう一度口を開く。話を進めることにする。

「……まあ、いつも助かっているとはいえ、上官として、今回の件の責任を負わせないわけにはいかない。私も奢らされたんだ」

「まあそこは、うん」

「一応罰は課そう。そこまで重くはない」

気に負うなどは言ったが、罰も課さずなあなあで終わらせるのは私の面目がない。軽いものでも罰を課するのが最善だろう。

「君には残りの書類を7割ほど処理してもらおう」

「……え、ちよつと待って、提督」

「負担が偏るが、割り切ってくれ。それなりの罰にしなければならない」

「……提督」

「そうと決まればすぐに始めるぞ。さっさと手を動か」

「提督ッ！」

「……今のは私が悪かったが、煩い。声量は抑えてくれ」

「あ、ごめん」

大声を出すほど納得がいかない部分があったようだが、注意をすると謝罪が返ってくる。私が完全に悪いのだが、つくづく『いい人』だと感じる。

話の腰を折ってしまった。頷いて彼女の意見を促す。

「提督さ、私が寝てる間、私の分の仕事までしてくれてた……よね？」

「……………」

神妙な面持ちで尋ねてくる川内に、私も慎重にならざるを得なかった。

だが、だいたい何を言わんとしているかは理解した。

「残った7割って、普段の私の執務の量より少なくならない？」

「残っている作業自体少ない。残りを全て任せるのも私が暇になつて仕方ない。7割が適切だ」

「でも……………」

「この際だ。話がある」

「この後決めておこうと思つていたところだ。話を切り出すには都合がいい。

「……………」

「君が秘書艦を快く受けてくれているのは分かっている。君の希望がない限りやめさせることもない。それは以前から変わらない。ただ、一つだけ決めた」

彼女への負担をどうにかして減らそうと考えていた。考える時間が少なく、おそらく最善の策とは言えないだろうが、少なくとも今までのように実行しないよりはマシだ。

了解を得られるかが問題だが、ひとまず提案だけはしよう。

「今後は朝早くに来なくてもいい。好きな時間に……と言つてもどうせ早く来るだろうな」

「……………」

「朝早くには来るな。早くても午前9時からにしろ。これだけだ」

単純に執務にかける時間を減らす。

まだ二日に一日ほどの頻度だが、執務を昼食前後で切り上げることのできた日は、川内を午後の訓練に参加させている。

今まで通り午前7時から5時間ほど執務を続け、そのあと訓練に参加させるよりは、微量でも彼女への負担が減るはずだ。

問題は、秘書艦の仕事を快く思つてくれているらしい川内が、これを認めてくれるかどうかで。

「……………どうだ？」

「……………秘書艦は続けられるんだよね？」

「ああ。君が望む限りは」

「……………分かった。今のままじゃ、また今日みたいなことがあるかもしれないしね」

納得はしてくれたいらしい。汲々、といった表情で、やはり少しは葛藤があったようだ。

申し訳ないが、必要犠牲だ。

——それにしても、そろそろ仕事に入らなければまずいんじゃないか。

そう伝えようと目を合わせようとすると、すぐに目を逸らされた。

この反応は知っている。何か言にくいことを口にしようとしている時のものだ。

「……ごめん、提督。ありがとう」

「気にするな。遅刻はよくあることだ」

言にくいことなら敢えて解釈違いを起こしてやろう。

そう思い、悪意などまつたくなく、善意のみで構成された厚意で、わざと勘違いした発言をする。

「いやそこじゃなくて。……あーもう！ やっぱいいい！」

叫んでからブツブツと小言をこぼし始める川内に、やはり面白い艦娘だと感じた。

まだ着任後3ヶ月ほどだが、川内という艦娘についてはかなり知れたように思う。

それが無性に嬉しかった。気分がいい。今まで遅刻の件にしか触れてこなかったが、少しだけでも褒めておくべきか。

「色々言ったが、長門たちへの『秘書艦』としての対応はよかった。……君が秘書艦でよかったよ」

「……へえ」

あからさまにニヤニヤと笑みを零す川内。

普段ならその笑みを抉り取るか無視するところだが、今日くらいはいいかと思えた。

特技

午前9時。大本営に資源を要求する手配を終えたあと、既に残り少ない書類の束を手繰り寄せ次の書類を処理する。

ここしばらくで執務の速度は大きく向上した。たどたどしく書類を処理していた頃とは違い、慣れ親しんだ形式の書類が多くなってきたためだ。

作業量は日によるが、仮に私一人がすべての作業を担ったとしても、ほとんどの日は夕方までに終わることができるだろう。

執務すべてを一人で背負うつもりは毛頭ないが。

司令室のドアが開く。いつものように元気な声が――

「ハイ提督！」

「……気でも触れたか」

「ちよっ!?!」

元気な声だったが、ずいぶん紅茶のにおいを感じた。ような気がした。気のせいだった。

「ひ、ひどくないかな……」

「朝からうるさい。仕方なく罵倒が」

「あ、そこなんだ」

川内が自分の席につくのを確認して、書類に目を戻す。

彼女がいれば昼食前後あたりで書類処理が終わる。心強い味方だった。

彼女の手助けには本当に助かっているが、朝から謎のテンションでいられるその精神力は解せない。

「それで、今のは金剛か？」

「うん。似てた？」

「いや」

「だよー」

本人は頑張っていたらしく、それ相応に雰囲気は似せていたが、声質が劇的に合っていないかった。

なぜそこまで無謀な試みができるものか理解しかねる。昨日まで普通の挨拶だったのに、いきなり真似をしだすのも分からないし、最初の1歩に難易度の高い金剛を選んだのも分からない。

まあこんな奴か、と納得した。

「真似をするにしても、もっといい人選はあったろう」

「那珂ちゃんとか?」

「似ると思うが、あのテンションは金剛より面倒だ」

「んー、やっぱ神通ちゃん?」

「あのお淑やかさを再現できるものなら」

「……私には無理かなあ」

姉妹ならある程度似るだろうが、那珂も神通も、川内とは異なる方向に振り切れている言動をしているイメージがある。川内にその再現を求めるのは厳しいように感じた。

だいたいこの艦娘を真似しようとすることにまず暗雲が立ち込めている気がする。誰も彼も個性が強すぎて、本人の模倣はとでもできそうにない。

川内も例外ではないように思う。適当に夜戦夜戦言っていればいい気もしたが、思い返せば彼女の口からそこまでその単語を聞いた覚えもない。アイデンティティの主張に乏しい。

「那珂ちゃんも神通ちゃんもダメって言うし、文句多いなあ提督は」

「ダメとは言っていない。やってみればいい」

「……えと、なんかないかな? 私でもできそうな真似」

恥をかきたくないのか、姉妹の真似はしてくれない。

金剛の件で既に恥も外聞もないと思うが、そこに触れると恐らく怒られる。黙ってお

くことにした。

「まあ、長門なら似るんじゃないか」

「……ほんとに?」

疑わしげな目を投げかけてくる。なんだその目は。文句が多いな。この艦娘は。

どちらかと言えば川内の雰囲気寄りで、よく聞いてみれば声もなかなか似ているため、そこを考慮した本気の選出だったか。

既に喉の調子を整えているあたり、試しはするらしい。文句は言いつつも私の期待に応えてはくれる。秘書艦らしいと言えば秘書艦らしいのかもしれない。

「えつと……『この長門に続けッ!』とか?」

「似てるな」

「ん……? ほんと? わかんないな……」

まあ予想通り似てはいるわけで。

目隠しして聞けば長門本人だと錯覚するほどには完璧だったが、彼女ははたいして自覚がないようだ。

自身で認識する自らの声と、他者の聞くそれとでは、聞こえ方がかなり違う。彼女が気づけないのも仕方がなかった。

「提督はないの? 声真似とか」

「ない」

「ええ……私もやったんだからやろうよ」

「……執務に集中しなければ」

「昼前には終わるよね？」

「……………」

書類の山に目線を移す。

この瞬間まで執務を放棄して川内との会話に勤しんでいたが、それはある程度時間にゆとりがあるためだ。彼女の手伝いがあれば、私ひとりで作業をするより数倍効率がいい。それほどまでに、秘書艦の存在は大きかった。

話題を逸らすとすれば、そのあたりの話題に託ける他ない。

「……そういえば、この時間からの執務で大丈夫か」

午前9時以降から司令室に来るよう要請してから、十数日が経った。

その転換について、今までにいくらでも尋ねる機会があったが、本人から直接意見を聞くことに少し恐れを抱いていたせいで、なんとなく聞きづらかった。

あの日からよく川内の様子を観察するようになったため分かるが、特に無理をしているような素振りはないし、どうせ彼女は嘘でも肯定してくれる。それは分かっていたが、それでも否定される可能性を拭いきれずにいた。

いい機会だ。軽い会話から聞いてみれば本音を得やすいだろう。

「……正直助かってるよ。気を使ってくれてありがとうね」

「……私は何もできていない。また遅刻されても困るからそうしただけで」

そもそもあれは私のミスだ。本来なら偉そうにこんな発言ができる人間じゃあない。

それをわかった上でわざわざ私に感謝を述べるような艦娘だから、こんな言動ができているのだ。むしろ感謝しなければならぬのは私だった。

「そっか。まあ、ありがとう。ちゃんと負担は減ったよ。……でも、いま話題逸らしたよね？」

「そうか。君への負担が少しでも解消されたのならよかった」

「後半無視しないでよ……」

見逃してはくれないらしい。分かってはいた。

負担が減ったと確認が取れたなら、逸らす先の話題はもうなかった。仕方なく本流に戻ることにする。

「……いやまあ、披露できるようなものがあればいいが、特にこれといった特技はないんだ」

「艦隊の運用上手いと思うけど」

「その評価はありがたいが、それは仕事だ」

「素因数分解するだけのアプリやってなかった？」

「あれは暇つぶしだ」

「……けっこうガチガチだったよね？」

確かにすこし得意ではあるが、少し齧りかけの素因数分解のみが特技の人間に価値があるものか。それが唯一の特技になるくらいなら、なくていい。特技と認めるには少し抵抗があった。

虚しい。平凡を極めるのも程々にしなければ。

「んー……？」

川内が唸る。目を瞑って顎に手を当てて、深く考えるような仕草だ。

そこまで真剣に考えることだっただろうか。私の特技などどうでもいいことだろう。

やがて何か思い出したようで、満面の笑みとともに私の顔を覗いてきた。私はこれから追い込まれるのだと理解した。

「じゃあラップとか」

「……ラップ？ 歌唱法のことか？ なぜその単語が……」

「いつか聞いたことあったと思うけど、この前一人でラップしてなか」

「してない。幻聴だ」

「……まあ、そういうことにしてもいいけどさ」

ニヤニヤと意地の悪い笑顔で私を見つめてくる。

この前食堂で似たようなことを聞かれたように思う。夕食を奢らされたんじゃないのか。そこですべて闇に葬り去られたと思ってはいたが、まだ引きずるのか。

「……提督さ、自己評価低くない？」

「そうは思わないが」

「本当に？」

「執務が早く終わる度に成長を実感してよく喜んでる」

「それは分かるけどさ。顔に出ないけど」

自己肯定感なら有り余っている。一時的な自己嫌悪ならよくあるが、自分で自分を認めるだけで人生を楽しめるのだ。自己肯定をしない択は考えられない。

「……色々と、特技だつて認めてもいいと思うんだけどなあ」

「自己評価というよりは考え方の違いじゃないか」

自己肯定感が高くとも、それと特技の有無が関係する訳ではない。どの範囲までを特技とするかは、結局個人の考え方によるだろう。

私の考えによれば、特技になりうるものの範囲は微小区間にまで区切られているらしい。

「んー……ま、そんなもんか。ようは、提督の考えじゃ、ラップも特技じゃないってこと

だよね」

「……………」

「上手かったよ」

「……………」

「執務、しよつか。ごめんね、遮って」

「……………ああ。執務はする」

一人でラップなど断じてしていない。していないが、あとで茶でも淹れてやろうと思つた。納得はしていない。

次に処理しようとしていた書類を引き寄せつつ、川内の様子を観察する。何食わぬ顔で執務に取りかかろうとしている川内に、少し黒い感情が芽生えた。

茶の代金を払ってもらうことにする。

「川内」

「ん、なに」

「神通の真似でもしてみてくれ」

「……………え」

川内の声が濁っているのを確認した。心の底から忌避したいらしい。頬がひくひくと痙攣している。

こんな表情は初めて見た。もつと見せてほしい。

「君のそれは私にない特技だ。見ているだけでも楽しくなる」

「……いや、でもさ」

「……すまん。勝手に無個性を自覚してしまつて少し気が滅入つてしまつた。できることなら見てみたい、が……」

「……………」

「無理ならいい。執務に取りかかってくれ」

押すだけ押して中途半端に引く。

書類の方へ視線を戻し、暫く様子を伺つてしていると、隣から唸る声が聞こえてくる。迷っているらしいことはわかつた。

「……わ、わかつたつて。やる。やるから」

やがて彼女が言葉を落とす。私の要望に答えてくれるらしい。

引けば弱いのは知つていた。押しにも弱いが。

とにかく釣れた。口元が吊り上がるのを感じ、すぐに真顔に矯正した。まだ頬を緩ませるべきではない。

「えつと……いくよ？」

わずかに顔を紅潮させつつも、川内は覚悟を決めたようにそう告げる。悉く良い奴

だ。私のような人間の隣にいるには惜しい。
ひと呼吸置いたあと、彼女の口が開く。

執務が捗った。

被り

「そういえば」

「ん、なに？」

執務をあらかた終え、そろそろ食堂に足を運ぶかと思いい立つ時間帯だった。

ディスプレイやら紙面やらを眺め続け疲労した目をほぐしつつ、思い浮かんだ言葉をそのまま言い放つと、隣から視線が送られてくる。それに応えるよう視線を寄越すと、こちらの顔を覗き込むように見ている川内と目が合った。

川内を相手に今更気を張ることもなく、息の詰まる話をすることもない。執務で過熱した頭を冷やすには、彼女との会話がちょうどよかった。

「君から『夜戦』の言葉を聞くことはあまりないな」

「……あー、まあ言わないね」

「夜戦が好きだとは知っているが」

「うん。夜戦は好き」

いつか川内本人から聞いたところによると、昼間の演習でも目隠しを付けて擬似的な

夜戦の練習をしているらしい。夜戦を好む性格なのは間違いないのだろう。

執務の処理に余裕ができている今なら、私に言ってもらえればスケジュールを調整して少しくらいなら夜戦の機会を設けてもいいと思っているが、どうもそこまですることでもないようだ。意外だった。

「夜はいいよ。暗闇の中で動くのは気分がいいんだよねえ。まあ寝るけど」

「……規則正しい生活を送っているようでよかった」

「執務は大事だからね」

「助かる」

夜にかける情熱は確からしいが、ある程度は妥協してくれている。趣味を削るようであまりだけ申し訳ない。執務の手伝いに対しての感謝は伝えることにした。

個人的には、夜に十分寝てくれることに対して感謝を述べたいが。

毎朝元気な挨拶をしてくれるあたり、きちんとした生活を過ごさせているようだ。適切な休養をとってくれるだけで安堵感を得られる。不思議な感覚だった。

「結局、君は夜型なのか朝型なのか」

休養をとってくれてありがたい話とはかく、川内が夜に強いのか朝に強いのかそろそろはつきりさせたい。

朝から耳を劈く大きな挨拶ができるかと思えば、夜戦こそ連呼せずとも夜には嬉しそ

うに鼻歌を歌って動き回っているこの艦娘、睡眠と食事のみでエネルギーと気力を賄いきれているのだろうか。

「夜型か朝型かなら……まあ、夜戦明けの朝もたいして辛いしないし、どっちも？」

「……もうそれでいいが、夜も朝も騒がしいのは勘弁してくれ」

「抑えてる方なんだけど……」

「深夜帯に近づくごとに声のボリュームが大きくなっていて、ことを自覚したほうがいい」

「……そんなに？」

自覚できていなかったらしく、川内は苦笑で尋ねてくる。

夜に近づくほど目に見えて元気になっていく様は見ていて面白いものだが、いつ苦情がくるか気が気でない私の身にもなってほしい。これが提督業だというのなら、それはそれで受け入れる。

「まあ元気でいいとは思う」

「雑なフォローだね？」

「そんなことは」

あるが、これ以上上手くフォローしようもないのが事実だ。特に騒ぎ立ててくるわけでもないが、夜に対する込み上げる喜びを抑えきれず音量に直接結びつけてくるのが面

倒だった。

最近はずままでに秘書艦としての仕事が済んでいるにもかかわらず、だいたい就寝寸前の午前0時まで川内が傍にいるため、その声量を直接浴びるのは私に限られる。今のところ他の艦娘の迷惑になっていないのは幸いだった。

あそこまで活発になれるなら、いつそ夜戦に行かせてもいいんじゃないかと感じる。そのほうが戦果的にも川内の気分的にも、私の鼓膜としても好都合だ。

夜戦バカの肩書きを持っているからには、やはり夜戦に赴いてもらったほうがいいだろう。

「夜は好きだし夜戦も好きだけど、そう連呼するほどでもないよ」

失礼な考えを悟られたらしく、川内が不満げな表情で苦言を呈してくる。どうしてこうもバレルのか。

「そうか。そんなもんか」

「うん。そんなもんだよ。私はね」

自身を指す言葉に重さを置いた川内の返答のおかげで、彼女の言わんとするところはだいたい理解した。

「川内としては夜戦したいけど、私としてはどっちでもいいというか」

艦娘はなかなか複雑な存在だ。

彼女達の自我は完全に艦ふねのものを引き継いでいる。詳しく解明されているわけではないが、単純な兵器であった頃の働きそのものが彼女達の行動や思考の基調となっているようだ。同じ艦名を有する艦娘が多数存在した場合、それらの行動原理や思想はほぼ統一される。

それだけなら明快で分かりやすいが、そこに環境による性格の差異が加わるから面倒だ。艦娘として生きるうちに上塗りされる補正によって、艦ふねとしての自我は少し薄まる。

つまり『川内』は複数存在するが、そのどれもが同じ性格をしている訳ではないのだ。同艦名の複数個体個々人の識別に向いているのでありがたい設計だ。

「……朝から変なテンションでいられるのは君だからか？」

「どうだろ……ま、そこは別の私に聞けばいいんじゃないかな」

「他所との繋がりにはほとんどない。しばらく答えは得られそうにないな」

他の鎮守府とは通信でやり取りする程度で、未だに合同演習すら行ったことがない。それは執務の処理に時間を裂きたかったためだったが、今はもうその必要もないはずだ。そろそろ色々なコンタクトを取ってみてもいいだろう。

着任してからの期間は、ほんの少しだけ長くなってきた。海の隅ついで細々と孤独にやっっているだけの運用は、そろそろ脱却すべきかもしれない。

「……………」

「……………」

会話が途切れた。話せるだけ話したので、この話題について私からはこれ以上掘りようもなかった。

キリがいたため昼食をとろうとし、食堂へ誘おうと川内の方へ目線を寄越して——何か言いたげな表情を確認したので、ひとまず待つことにした。

数秒ほど待っていると、川内が息を吸うのが分かった。

「……あのさ」

「なんだ」

「この鎮守府にも、他の私が来ることってあるよね？」

「ああ。可能性ならある」

ここには被っている艦娘はいないが、同じ艦娘が複数存在する鎮守府があるとは聞いたことがある。

同じ顔の者が同じ場所にいる状況を想像できなかつたが、まあ双子みたいなものか。「まあなんだろう、そうなるうちよつと怖いよね」

「怪談話は信じるタチか？」

「え？」

「ドツペルゲンガーの話じゃないのか」

「あー……まあそれもちよつと怖いんだけどさ」

「そうか、怖いのか」

「う……いいじゃん別に。あーいや、そこは関係ないんだって」

話の腰を折るのは得意だった。川内が怒ったように眉を顰める。

少しくらいは申し訳なさを感じるだろうと身構えていたが、むしろ嗜虐心のようなものが擦られた。抑えることにする。

「もしここに違う私が来たとして、その場合、その私にどう接すればいいか分からないっていうか」

「……………」

「ほとんど同じ存在だから、完全に代わりが効いちやうし。私自身の立ち位置も分からなくなりそうだし」

「代わりにはならないと思うが……まあ、言いたいことは分かる」

ドツペルゲンガーに対する恐怖だって、そこにあるのだろう。

自分ではない自分のようなものに居場所を奪われ、それなのに周りはいつもと変わらない態度で、全く違和感を抱くことなくその自分のようなものと過ごしている。

そうなるかもしれないと想像して一人で勝手に怖くなるような、あの感覚。それに似

たものを感じているのだろう。

結局怪談話に怯えているようなものだ。その手の話は苦手らしい。

「少なくとも、神通や那珂なら、君との距離感が狂うこともないはずだ」

「それは間違いないって信じてる」

「ならそんなもんでいいだろう。そこを信用できる相手がいるだけで、少しは楽にならないか」

「……うん。ちよつとはね」

「そうか。残りの怖さは……まあ、そのまま怯えていてくれ」

「ひどいね？」

匙を投げると、責めるような目を向けられる。

申し訳なかったが、怪談話を怖がっている者を宥める術は有していなかった。怯えている姿も、もう少し見ていたい。

「それで、提督は？」

「……君との接し方は変わらない自信がある」

「そっか、ありがと。……私もそう信じてるよ」

何を問おうとしているのか分かりづらい質問に勘で答えたところ、どうも返答としては正解だったらしい。

つまり、別の川内が着任した場合、私がちゃんと接してくれるかどうか尋ねたよう
意図の分かりづらい質問はやめてほしい。私はよくするが。

「……提督さ」

「なんだ」

「何度でも聞くけど、秘書艦は川内でよかつたんだよね？」

深刻そうな声色で、川内が尋ねてくる。下から覗き込むような目線を受けて、少し戸惑った。

何度か聞かれた覚えのある質問だった。その都度曖昧な返答を返してきたが、まともな返事をすべきだろうか。一応、伝わるように言つたつもりではあったが。

まあともかく、微妙に上がった口の端さえ隠しきれていれば、私ももう少しは真面目に受け止めたのだろう。

「……答えを分かつていて聞いているだろう」

「あは。ばれるか」

「……はあ」

悪びれもなく笑顔を向けてくる川内に、思わずため息がこぼれた。

答への再確認に私を使わないでほしいものだ。気恥ずかしい思いをするのは私だけで、私にはなんの利益も見込めない。それでも答えはするが、いいように使われている

ようで面白くなかった。

「何度でも言うが、川内でよかったとは思っている」

「……へへ」

一応、本心からの言葉を伝える。嬉しそうにニヤつく川内を尻目に、はやく次の言葉を紡ぐことにした。

「それ以上に、君でよかったよ」

顔を背けつつ、そう言い放つ。体温が上昇するのが分かる。

恥ずかしいことを言っているのは理解していた。聞くに耐えない発言だっただろうが、求められた以上、そこは本音で答えなければならぬ。

「……提督」

「今度はなんだ」

「ごめん……もっかい言つて?」

「は?」

「いや、今のセリフさ、もっかい言つてほしいんだけど……」

「……………」

嫌な予感がする。

振り向くと、やけに身を乗り出した川内が、期待の目を私に向けていた。

今の恥ずかしい発言を、もう一度繰り返し返せと要請しているらしい。

ああ、聞こえなかったのだろうか……とはならない。なつたとしても、これ以上恥辱を受けるつもりはなかった。

「もう昼だ。食堂に向かうか」

「て、提督？ 聞いてた？」

「行くぞ」

「ちよつと待って提督。提督？ 待ってってば」

急いで席を立ち、司令室のドアに近づく。

慌ただしく私の後についてくる足音を確認して、ドアを開いた。

司令室を後にして、食堂へと向かう。

後ろから喚く声が聞こえるが、今日の献立を想起して無視することにした。

楽しい時間の過ぎ方

夜。食堂で提供される夕飯は美味しい。一日の執務で疲弊した体に活力を補ってくれる。

私の執務とは比べ物にならないほど消耗の激しい一日を過ごした艦娘達の喧騒を背景に、クリームシチューを口に流し込む。まあ当然美味しいので頬も弛みがちだ。

酒が入っているらしい隼鷹の、離れていてもよく聞こえる喧しい言説を横目で見つ、食を進める。

一人でいる静かな時間も好きだが、騒がしさの中で食事をとるこの瞬間も好きな時間だ。

「ね、提督」

左隣の席で同じくシチューを啜っていた川内が、ふと思いついたように話しかけてくる。

川内の言葉のイントネーションから、会話がどんな展開になるかはある程度予測できた。次に何かを尋ねてくるだろうと悟り、一旦スプーンを口に運ぶのをやめる。

顔だけをそちらに向けてみると、興味津々といった表情でこちらを覗いている様子が確認

できた。

「なんだ」

「提督って何歳なの？」

「……………」

箸に持ち替えて混入飯を口に入れる。白米の方が好きだ。定期的に出てくるが、食糧難に陥っているわけでもない今の段階でこれを食べるのは気が滅入る。

さて…………どう答えたものか。私の身辺、そのあたりの情報なら着任に際しての書類上におおかた記載していると思うわけだが、そこは前任と大淀あたりしか確認していなかったようだ。

「…………あれ、聞いている？」

「ああ」

「そっか。よかった。で、何歳なの？」

「成人はしている」

「それはそうだろうね」

巫山戯た返答では納得してくれないようだ。それはそうだ。誰だってそうだ。私だってそうなる。

とはいえ、いきなりのことで少し困惑している。

「……急にどうしたんだ？」

「んー？ いや、ただ思ったこと口にしたただけなんだけど……」

「そうか。まあ、そうだよな」

取り立てて特別な意味などない。ただの会話だ。そういうものだ。

川内は若干俯きがちになつて、チラチラとこちらを見てきている。言いにくいもの、というよりは面と向かつて言うのは恥ずかしい部類の言葉を落とそうとしているらしい。

「まあ……提督のこともつと知りたいしき」

「……なるほど」

予想通り恥ずかしくて言えないようなセリフだったが、そう言われてしまうと答えざるを得ないような空気を感ずる。

答えはしないが。

「……その、なんだ」

「うん」

「私の年齢に興味を抱くような艦娘は少ないだろう」

「そうかなあ」

「間違いなく需要はない。知りたくない者の方が多いはずだ」

「卑屈だね？」

「卑屈かどうかはこの際いい」

卑屈というより、この場を切り抜けるための詭弁だった。

幼少期にはこれほど前向きな人間はいないと近所で噂されていたほど前向きだったのが私だ。今はそこまでもないだろうが、それはどうでもいい。

「需要がないのに供給しても仕方ないだろうと考えるが」

「まあみんなからの需要は分からないけど、少なくとも私には教えてくれていいよね？」

「……………」

「好き好んで提督の年齢聞いてるんだしさ」

「……………」

なるほど。全くの正論に何も返すことができない。こんな時に限って、私の詭弁は打ち勝てないようだ。

「それで、何歳なの？」

「…………今年で25だ」

「けっこう若いね？」

「そうか？」

言うほど若い年齢ではない気がするが。

川内が艦として進水してからほぼ100年……という意味なら、私などまだまだ子供のように思えるだろうが、恐らくそうではない。聞いたところ艦の記憶はまったくの完全というわけではないようだし、彼女の性格からしてもない。

「あ、その、見た目より若かったとか、そういう話じゃないよ？　むしろ、そのくらいかなあつて思つてただけど」

「それは分かる。見た目が実年齢より老けていたのなら、君はたいした感想を零さないはずだ。君はそういう奴だ」

「……なんかそこまで私の性格を理解されてるの、悔しいんだけど……まあなんというか、『提督』にしては若いなつて思つて」

水をひとくち飲みつつの川内の言葉に、なんとなく合点がいった。

提督として任務を任される人間には、ある程度歳をとつた者が多い。現在はその方が適切だとされていて、私自身もそうあるべきだと考える。前任も初老の男性だ。その中では飛び抜けて若い方である私は、すこし異質に見えるのかもしれない。

「……これから先、きつと若輩者の提督は増えるはずだ。そういう時代が来るんだ。私はその先駆けであるに過ぎない」

「そうなんだ？」

「ああ。だから、私の才能が特別に認められたとか、そういうわけではない。残念なこと

に

「そつか。まあ、それでも25歳は若いんじゃないかなあ。25歳だからね。25歳」

「……………」

連呼するのはやめてほしい。もう今年で四捨五入すれば30歳が視野に入ってくる年齢になるのだと認識したくない。

精神は未だに大人になれていない段階で、自覚もなく惰性で成人してしまった今の私が、心になんの誇りもかかえないまま幼心に憧れた『大人』になるのに、ひどく抵抗がある。

若いと評される私が、自分でも分かるくらいにはあまりに未熟だからこそ、提督には経験豊富で落ち着いた風格のある年配の方を起用するべきだと思っただが。

ふと思ったが、なぜここまで自らのことを振り返らなければならぬのだろうか。私の情報などどこにも需要が——川内だけには需要がありそうだが、そう聞いて面白い話でもあるまい。そろそろ攻守交替の時期ではないか。

「……………君は？」

「え？」

「艦娘としては、いくつなんだ」

彼女についての情報なら、需要は確実にある。仮に他の者に求められていなくても、

少なくとも私にはある。

……彼女と同じような言い分になってしまっているが、まあ、いい。

シチューに口をつける。美味い。

「艦娘としてなら、17だよ」

「……若いな」

「見た目通りでしょ?」

「ああ」

そのあたりの年頃の学生のような外見はしている。

艦娘にも年齢の概念はあるらしいが、あまり深く考えない方がいいだろう。未成年に戦争に行かせている現状は、目を瞑る他ないのだ。

「正式に艦隊に加わったのは7年前。艦隊は7周年! だねー」

「そうか。……練度も高いはずだ」

深海棲艦に対抗できる勢力として艦娘による艦隊が組まれたのは、18年前が初めてのことだ。

とはいえ当初は戦術的にも法律的にも効率のよい艦隊運用はできず、襲撃の被害を抑えるだけでも手一杯だった。ようやくあらゆる環境が整ったのが8年ほど前。その時期からの、ある程度完成された訓練を受けた艦娘たちは、基本的に練度が高く、海域を

奪還する機会も劇的に多くなった。

7年前に着任したらしい川内は、その訓練を最も長く受けてきた世代だ。深海棲艦との戦争において、1番必要とされる類の艦娘……の、1人。

端的に言えば『強い奴』だった。

「なあ、川内」

「ん？ なに？」

「君は——」

背後に心配がしたため、言葉を止める。誰に聞かれてもいいような内容だったが、どうもこれは隣に座ってきそうな感じがする。

たとえば、英国の紅茶のような、心地のよい匂いがすれば、それが誰なのか分かるかもしれない。

「テートク！ 隣いいデスカ？」

「……金剛か。私は構わない」

食堂なら川内以外との接点もよくあるもので。

私が答えるより早く机にトレーを置いた金剛は、席につく段階だけは私の答えを待つてくれた。

わざわざ私のような者の隣になど来ずに、姉妹で固まって食べればいいものを……と

思ったが、いつも姉妹でいるからこそ、なのかもしれない。

「……108歳」

「……？」

「いや、気にしないでくれ」

右隣で、スプーンに掬ったシチューに息を吹きかけ冷まそうとしている金剛を目に捉え、それを食するさまをまじまじと眺める。不思議そうな表情を送ってきたが、じつと見続けていると居心地が悪そうにシチューに向き合った。ずっと見られていると食べづらい性格らしい。

それにしても、できれば対面に座ってほしいものだ。左隣には既に川内が座っているため、隣はもう間に合っている。誰もいない対面が寂しい。

バランスがおかしいとは思わないのだろうか。それとも、私に変な部分に敏感になりすぎているのだろうか。

「そういえば、金剛。丁度良かった」

「ん、なんデスカ？」

「この間、川内が君の物真似をしていた。あまりにも再現度が高かったもので、君にも見てほしいと思ってな」

「えっ、ていと」

「それは是非見たいデス！」

「……うっ、ううう」

左から恨めしそうな視線を感じるが、きつと気のせいだろう。私はそういう部分に鈍感なのだ。

しかし念のため、金剛の方だけを見ておくことにした。

「川内のワタシのモノマネまでー、きーん、にー、いーち、キューー!!」

キラキラと目を輝かせている金剛は、もう私にも止められない。

川内の方から感じる恨めしそうな視線は、金剛のカウントダウンと共に焦りをもったものにならなくなっていくように感じた。

「え、えっ、と」

「……………」

「へ、へーイていと——」

夕飯がより美味しく感じた。

金剛のおかげで普段より騒がしく夕食を食べ終えたあとも、しばらくは取り留めのな

い会話をしていた。川内に長門の真似をさせたり那珂の真似をさせたりしていたくらいで、特にこれといって面白い会話はなかったが、川内と2人だけのときとは異なる楽しさがあった。

金剛は心の底から明るい奴だ。一緒にいるだけで、場の空気が柔らかくなる。無愛想らしい私にとって、羨ましい才能だった。

川内への無茶ぶりのネタがなくなってきたあたりで、そろそろ帰ることにした。食器を返し、食堂の出口の方へと向かう。

あたりにいる艦娘はいつの間にか少なくなっており、それに気づかないほど長い間会話をしていたのだと感じさせられる。

「……………」

川内と金剛が談笑しながら出口に向かっていくのを、一步引いて見つつ、私の肩あたりの背丈の川内と、私より少し小さいくらいの金剛を見比べて、艦種の差をひしひしと感ずる。

戦艦に分類される者は総じて背丈が高いが、長門型にもなると私よりも大きい。大和型はそれよりも一回り大きい体躯だが、思えば彼女たちの威圧感が強いのは身長の方が強いのではないだろうか。

「……………」
「めん、ちよつとお花を摘みに」

「ああ。ここで待つておこう」

食堂を出たところで、自然が川内を呼んだらしい。

金剛と2人で彼女の帰りを待つ。川内でもきつとそうだっただろうが、金剛とはこんなときにでも会話が絶えない。

「……テートク」

しばらくとりとめのない話をした後。すこしだけ落ち着いたトーンで、金剛が私を呼ぶ。

普段とは違う声に視線を寄越すと、どこかこちらを窺うような様子があった。

「なんだ」

「この後は執務デスか？」

「ああ……いや、明日の用意も含めて終わっている。ひとまず司令室には戻るが、特に何もする予定はない。なにか用か」

「いえ、用があつたわけではないデス」

「そうか。わかつた」

なんの確認なのか分からない。なにか含みのあるような言い回しでもなかったのだから、大したことではないだろう。

とはいえ、答えとして間違つてはいなかったらしい。声のトーンは普段通りのものに

戻っていた。

「そういえば、と金剛が零す。

思い出しかけている言葉を辿るように考える素振りを見せたあと、しばらくすると言いたいことを思い出せたらしく、こくんと頷く。

そして私の方へ向き直し、繋がった言葉を落とし始めた。

「テートク、雰囲気変わりマシタ」

「……私には分からないが」

「今なら、駆逐艦たちもきつとテートクの優しさを分かってくれるはずデス」

「……確かに怯えられてはいないが、やはりまだ距離を感じる。この調子で少しずつ慣れてもらえればいいだろう」

「慣れるというよりテートクが変わっ……まあ、なんでもいいデスが」

彼女曰く、どこかしら私は変わったらしい。無愛想だと指摘されて以降、それをなおそうと努力してきたが、報われたということだろうか。

自覚はないが、そういうことにしておいた方が都合がいいかもしれない。

「川内のおかげネ。川内に感謝しなさいヨ」

「……まあ、そうかもしれない」

「川内が変わったのも、テートクのおかげデス」

「彼女はそこまで変わったように思えないが」

「……テートクの目は節穴デスか」

そうは言われても、私自身は着任以前の川内を知らないのだ。劇的な変化があったかどうかは分かるはずもない。

「……テートク」

「今度はなんだ」

「川内が長い間この場所にいなくなるとしたら、寂しくないデスか？」

なにを聞いているんだこの艦娘は。

「……………」

「……………」

「……………さあ」

曖昧に返す。まともに考えたくないと感じた。それが答えだと思った。

金剛がひとつ短いため息を零す。

「私は部屋に戻りマス！ あとは川内とよろしくやりなさいネ！」

「……………」

私との会話に一定の納得が得られたらしく、一方的に言葉を言い残したあと、彼女は去っていった。

最後の言葉は必要だったのだろうか。この艦娘は去り際になにか茶化すような言葉を落としがちだが、やはりそういう規則があるらしい。

「提督！ と……あれっ」

「川内」

「行っちゃったの？」

「ああ」

金剛が去っていつてすぐに川内が戻ってきたため、ひとまず司令室の方へと向かう。彼女としてはまだしばらく金剛と話していたかったらしく、名残惜しそうにする。普段会話をしているようなイメーজのない組み合わせだったため、話せて嬉しかったのかもしれない。

「……このあと、暇だな」

「うん。まあ司令室で暇つぶしかなあ」

「私と話すくらいしかしないだろう」

「まあね。でも、それだけで、わりと時間が早くすぎるからさあ？」

「……否定はしない」

川内と共にいると、会話の片手間にいつの間にか執務が終わっているし、夜にはいつの間にか遅い時間まで話し込んでしまっている。

一緒にいて楽しいのは、否定できなかつた。

「……………」

司令室に戻るまでずっと、金剛の言葉が頭の中から離れなかつた。

もし今後、川内がいなくなつた際、私は日々を上手く過ごせるのだろうか。そんなありもしない仮定の想像をして、すこし虚しくなつた。

動揺

半身ほどの夕陽の明るさが窓から射す司令室で、夕方の時刻を指す短針をぼうつと眺める。

書類処理が完了したあと、残る執務が遠征班の帰投を待つだけになり、暇になった司令室では、短針の動きはいつにも増してゆっくりなものに感じた。

時折、極限の暇の中でふと思ひ浮かんだ思考を共有しようと思ふ隣を振り向き、誰も座っていない椅子を確認しては置き時計に目線を戻す。

——つい先日までこの時間帯にそこにいた艦娘は、いま隣にはいない。

分かつていたことだが、執務に費やす時間が減り、彼女が訓練や演習に参加するようになってから、彼女と共にいる時間は大幅に減った。

そのことに対して寂寥感を覚えることなどは、決してしていない。しかし、一人でいる時間に何をすればいいのか分からなかった。

「やつほー提督！」

——だから、演習終わりにわざわざ私の元に来てくれるのを、私は喜んで迎え入れる他なかった。

「今日も疲れたなあ」

自身の席で机に上半身を投げ出した川内が、疲れの籠もったため息とともに言葉をこぼす。

演習を終えてそのままここに直行してくれたようで、まだ汗も乾ききっていない。そのような状態でわざわざ来てくれたことに、申し訳なさを感じる。

演習とはいえ、行うのは完全な戦闘行為だ。

艦娘が戦闘状態に移行すると、 β —エンドルフィンの分泌過多と艤装の負荷増大が起こり、人間には耐えきれないほどの重圧が彼女たちの身に降りかかる。その代わりに超人的な身体能力を得るようだ。

しかし、人間より遥かに強い造りの彼女たちにとっては、戦闘状態を数時間継続した

としても、ただ全力で走り続けてきたくらいに負荷でしかない。

たとえそうだとしても、わざわざ真つ先にこんな所に来ずに、もっと休むことのできる場所に行ってもらいたくてならなかった。

「……お疲れ様」

「あれっ、提督が素直に労ってくれるの、なんか珍しいね」

「そうでもないだろう」

「いやいや、いつもは無言でお茶出してくれるとか、そういう回りくどい労い方じゃん」
「回りくどいのか」

自分なりに最善の労い方をしていたつもりだったが、そこまで回りくどいものなのだろうか。

私の感覚は、世間一般と離れていることが多すぎる。もっと普通の人間のような感覚で、もっと普通に川内と接したいものだが。

「だいぶ回りくどいよー？ まあ本当にありがたいんだけどね、そういうのちよつと可愛いく思っ……あは。睨まないでよ」

「……………」

「でもいつもありがとね。直接的な言葉はないけど、お茶を出してくれるだけでも、今日も一日生きて働いてよかったって、そう思えるからさ」

「……そうか」

「まあ、でもやっぱり可愛いよね、提督」

「……」

川内の感覚も、世間一般のそれとはかけ離れているようだ。

「それで、あの、提督。できればお茶飲みたいな……っつて」

「この流れで出ると思うのか」

「あ、あはは」

厚かましい。散々からかわれた後で、私が都合よく茶を出すような人間だと思っているのだろうか。

残念だが、私がそこまで面倒見の良い人間なら、最初から無愛想で怖いなどと言われることもない。

……

まあ、一応出しておいてやろうか。ここで出さか出さないかで、私が無愛想か無愛想でないかが決定してしまう気がする。他意はない。

「……あれっ」

立ち上がりドア横に備え付けてある給湯器のもとへ向かうと、後ろの方から声が上がる。若干驚いたような声だったが、振り返りたくない。

無言のまま二人分の湯のみに茶を入れたあと、仕方なく振り返る。川内の表情が見えて、小さくため息が零れた。

「結局出してくれるところが提督っぽいよねえ」

穏やかな声色の言葉と共に、ニヤニヤとこちらを見つめてくる。ちくしよう。何故こ
うも攻めるときは強いのか。私が一方的に弱いだけかもしれないが。

とりあえず早く茶を渡すことにする。彼女の目の前に湯呑みを置こうと身を乗り出して——嗅いだことのない、いい匂いがした。

「ありがとう」

「……ん？ あ、ああ」

川内への反応が、一泊遅れる。この匂いに気を取られすぎていたらしい。匂いに意識を持っていかれる経験は初めてだ。酒に酔ったような浮遊感のある感覚だったが……まあい。

ひとまず私も自分の席に戻る。椅子に座り茶を呷った。美味しい。茶を嚙下すること
に喉が熱くなる感覚がする。好きだ。

湯呑みを机に置いた際、ふと気づいた。

先程までは気づいていなかったが、あのいい匂いをうつすらと感じる。とてもいい匂
いだった。包まれているだけで安心できるような、懐かしい匂いだ。

「……なあ、川内」

「ん、なに？」

「なんの匂いなのか分からないが、いい匂いがしないか」

「え？ ……いや、しないけど」

「……そうか」

川内には感じられない匂いらしい。とても心が温まるものなのだが、共有できないことが悔やまれた。

どうにかしてこの匂いを伝えられないだろうか。

「ああ、そうだ。クチナシの匂いに似ている。感じないか」

「んー……んー？ しない、かな……」

「……そう、か」

どうも、完全にダメなようだ。仕方がない。彼女に伝えるのは諦めることにする。

……それはそうと、靄がかかったように頭がぼうつとしている。それでいて感覚と思考だけが冴えていく。そのせいでより一層この匂いを感じてしまい、脳がだんだんと溶けていくような気がする。

「ね、提督。それよりさ。今日の演習、私わりと活躍したんだよねー！」

今まで感じたことのない匂いに困惑している私をよそに、川内は話題を変えてしまっ

ている。

正直今はそれどころではなかったが、彼女が楽しそうなら乗ってやることにした。嬉しそうな表情で、川内がこちらに身を乗り出して――

「……………」

いい匂いが、より一層増した。

「…………？ 提督、なんか変だよ？」

いきなり許容量を飛び越えてきた甘い匂いに驚いていると、川内に気取られたらしい。すこし心配そうな表情で、私にどうしたのかと尋ねてきている。

匂いに気分が高揚するのは裏腹に、だんだん思考が纏まっていく。

「…………川内」

「ん」

「こんなことを聞くのはあまり好ましくないだろうと承知しているが、いつも演習や訓練が終わったあと、何をしているんだ」

「え？ ここに来てるけど…………」

「それはいい。その前は」

「ん…………あ、シャワー浴びてきてるね」

「シャワー…………」

この匂いに関係があるように感じた。川内の首筋を見ると、先程まで乾ききっていなかった汗が、既に乾いてしまったのが分かった。

……汗？

「つてやば、今日シャワー浴びてくるの忘れてた……!」

自分でその単語を発したおかげで思い出したらしく、川内が慌てふためき始めた。彼女にとって恥ずかしいことのように、顔を赤くしている。

「ご、ごめん提督、すぐ戻るから、浴びてきていいかな……!?!」

「ああ。構わな——」

反射的に認可する言葉を言いかけたが、ふと脳裏に過ぎつた考えがそれを阻害した。

彼女がシャワーを浴びてこなかった今日に限って感じるこの匂いの正体を考えて、ひとつの結論に達してしまった。

「……いや。もう少しここにいてくれ」

もつとこの匂いを嗅いでいたいだとか感じていたいだとか、そのような理由ではないが、とにかく引き留めることにした。

まだ話したいことがあるだけだ。他意はないのだ。

「え、でも……」

「君の演習の話聞いていなかった。活躍できたんだったか。話の流れを断ち切ってし

まっつてすまない。聞かせてくれないか」

そうだ。彼女が話そうとしていた話題に興味があっただけだ。練度の高い彼女がどのように活躍できたのか興味があるだけであり、それ以外の他意はな

「……提督、なんか隠してる？」

「いや」

「ほんとに?」

「ああ」

「んー?」

「……その」

川内が詰め寄ってくる。迫ってくる怒ったような彼女の顔と良い匂いに、頭がおかしくなりそうになる。いや、おかしくなっているのだろう。

最後の声が上がってしまったため、隠し事は恐らく悟られてしまっている。

「……わ、分かった。分かったから」

「もう……で?」

「その……」

非常に言い難い。誰かに伝えることすらはばかられることだ。それを本人に伝えるなど、私には難易度の高すぎる行動だ。

言わざるを得ない流れを作られてしまった以上、事実を伝える他ないのだが。嘘で誤魔化そうとしても、恐らくすぐにバレてしまうだろう。攻めている川内は強いのだ。

諦めた。

「君の汗の匂いが、クチナシのようでいい香りだった。引き留めたのはそれが理由だ」
彼女に面と向かつて言う勇氣はない。目を逸らしながら事実を伝えた。

「……………」

「……………」

反応がない。目を逸らしているため彼女の様子が見えない。見ない方がいいのではないかと思う。この世には見えない方が幸せなことがいくらかでもあるのだ。

……が、つい気になってしまった。つつ、と彼女の方へと視線を寄せてゆく。

「~~~~~つ!!!」

真つ赤だった。あれだけ気持ちの悪いことを言われたのだ、ここまで怒りを露わにしてしまうのも仕方がないだろう。

なんとか怒りを堪えようとしているらしく、口元を強く結んでいる。若干潤んでいる目を見て、ここまで怒らせてしまったことを後悔した。嘘をついていた方が良かったかもしれない。

「やっばー一回帰るー！」

「いやその、すまない」

「……………もうっ！」

余裕がなさそうな言葉を発しつつ、川内は机に突っ伏した。

非常に申しわけない。冷静に考えてみると、自らの汗の匂いを嗅がれて、いい匂いだのもつといてくれたのと言われてみれば、気分が悪くなる一方に違いはない。まして上官に。私なら切腹している。

「はあ。恥ずかしいなあもう……」

「……………怒っていたわけではないのか」

「……………べつに怒らないよ。提督なら」

くぐもった声が聞こえる。川内が突っ伏しているせいで、聞き取りづらい。

怒っていないなかったのは幸いだったが、恥ずかしがっていたのは、それはそれで困る。どう対処すればいいのか分からない。私にとっては難しすぎる課題だ。

そもそもなぜ恥じるのか。私の感覚で言うなら嫌悪感しかないが、やはり私の感覚は世間一般とはかけ離れているようで。

「……………」

「……………」

しばらく無言が続く。その間彼女の様子をずっと観察していたが、真つ赤な耳がそれ

よりはマシな赤に戻るまで、5分ほどかかった。

5分以上続く沈黙と、こんな時にでも感じてしまう彼女の汗の匂いに、少しずつ気ま
ずさを膨らませていると、彼女がいきなり起き上がった。

そのままの勢いで、彼女は立ち上がる。目が合った。顔は赤いままだが、先ほどより
は若干落ち着いたようだ。

「……………」

「……………」

「はあ……………いったん部屋に戻って、シャワー浴びてくるね」

「ああ」

「……………残念そうな顔しないでよ」

匂いが遠ざかることを残念に思っていたが、思考だけにとどまらず、顔に出てしまっ
ていたようだ。感情が顔に出る人間ではないと思っていたのだが、私の表情筋は、この
匂いに関してはそこまで律儀に性格を守っていられないらしい。

川内はドアの方へと向かい、司令室を出ようとしている。残念だ。

そのまま彼女の姿は見えなくなるだろうと思っていたが、川内はドアノブに手をかけ
る寸前で、ピタリと動作を止めた。

そして、こちらを向かぬまま、言葉を落とし始める。

「提督」

「なんだ」

「今言うのもあれだけどき。私、提督の淹れてくれるお茶、好きなんだ」

「そうか。それはどうも」

「だから、毎日提督のお茶を飲んで、寝る前なんかはその日あったことを振り返って……しんどい思いをした日でも、良い日だったって思えるんだけど」

「さつきそんなことを言っていたな」

「うん。……でもね」

そこで一旦言葉を切って、こちらに振り向く。

「今日言ってくれた劳いの言葉だけで、もつと嬉しかった。今日だけの幸福じゃなくて、明日からも頑張ろうって思えた」

相変わらず、川内は羞恥心のネジが吹っ飛んでいるらしい。恥ずかしげもなくよくそんなセリフを言えたものだ。

「だから、提督のそういうところ、好きなんだ」

煽ってやろうと口を開き——思うように口が動かないことに気がつく。何かを発しようとして、何を発するのかを忘れてしまった。

「——それだけ。じゃ、提督。食堂でね」

私になにも言えないままでいると、川内はドアノブに手をかけ、こちらに笑顔を投げかけてきた。

そのままドアを開け、司令室を出ていく。

「……………ああ。また、夕飯の時に」

ドアが閉まつてから数秒経つて、ようやく言葉が落ちてきた。

そのときには既に、廊下の足音は遠ざかり聞こえなくなっていて、私の小さな言葉など、彼女には聞こえるはずもなかった。

ただ、なんとなく、彼女には届いているような気がした。

「……………」

自身の顔を触る。彼女の最後の言葉のあたりから、不思議な感覚がしてならなかった。幸いなことに頬は上がっていない。弛んだ表情を彼女に見られたわけではなかったようだ。

安堵して頬から手を離す。手に残る感覚が、いつもより温かいような気がした。いや、温かいというよりは、熱い。

「……………え？」

そこで初めて、自分がどのような状態にあるのかを理解した。

心臓が痛い。早すぎる鼓動のせいで、平時の何倍も強く全身に血が巡っている。

気を落ち着かせようと、勢いよく窓の方へと駆け寄る。太陽は沈みきったようで、外は既に一面黒く塗りつぶされている。

窓に反射した私の顔が見えた。ひどいものだった。困惑した表情で、どこに向かえばいいのか分からないような、不安そうな顔をしている。

「……………っ」

反射したものでもはつきりと分かるくらいに赤くなっている私の顔に、このまま見続けるべきか、目をそらすべきか分からなくなってくる。

窓にうつすらと映る私が、なぜ赤くなっているのか、わかっているはずだったけれど、これは分かかってしまっただけじゃないものなんだ。

目が潤むような感覚がしてきたところで——深く考えるのをやめた。

「……………」

すこしズレていた軍帽を被りなおす。

分かかってしまわないようにするためには、『提督』でいることが最も好ましいと判断した。

私が提督である以上は、今のところはとりあえずこれでいい。今は、これでいいのだ。今は、これでいい。

「……………はあ」

提督として振る舞い続けるためには、あまりにも精神を揺さぶられすぎていた。

彼女に次に会うとき、みっともない顔にならないよう、夕食の時間になるまで、誤魔化し続けることにする。

私1人がぼうつと佇んでいる司令室には、ふわりと香るクチナシのような匂いが残っていた。

勧誘

「てーとくー」

午前11時丁度をすこし後に控える時刻。この頃はこの時間帯に執務を終えていないことの方が珍しく、終えていなかったとしても、執務を片手間に会話をするだけのゆとりがある。

資源管理も報告書の作成も艦娘の業務担当のローテーションも、今となつては時間をかける方が馬鹿らしく思えるほどで、物足りなさすらも感じる。少し前の自分にはありえない感覚だった。

「……てーとくー?」

本日は既にほぼすべての仕事を終えてしまっている。いつも通り、きつと午後からの時間は暇に蝕ばまれることだろう。演習や遠征などの報告以外の用事で司令室にわざわざ来るような、そんな酔狂な艦娘は川内以外いなかった。

そのため、川内が演習等に向かったあとの時間は、最近になつてたまにふわふわと来てくれるようになった妖精を眺めるか、鈍りかけている体を動かして外へ行くか、ぼうつと何かを見つめるかしかしていない。

今はまだ午前だが、今日は最後者の気分らしい。ぼうつと置時計を眺める。

脳内は様々な考えで埋まっついて、そのどれに対しても深い思考を与えることができていなかった。途中で行き詰まった思考はふりだしに戻り、延々と同じ自問を繰り返す。

『——今日言ってくれた労いの言葉だけで、もつと嬉しかった。今日だけの幸福じゃなくて、明日からも頑張ろうって思えた』

………。

秒針の音が鮮明に聞こえる。昼前を示す短針に重なった秒針は、その奇跡じみた当たり前の現象の余韻に浸ることもなく、すぐに6度だけ傾いてしまった。

するりと動いていく棒を、焦点が合わない程度にうつすら眺めていると、頭の中を鳴らすセリフが再び繰り返される。

『——だから、提督のそういうところ、好きなんだ』

………。

……窓の外から騒がしい声が聞こえる。午前の訓練を終えた駆逐艦たちだろうか。おそらく神通を中心とした訓練だったはずだ。大変だっただろうに、まだ元気が有り余っているらしい。

………。

だめだ。

「……おーい提督」

頭の中をリフレインする言葉。脳内を埋め尽くしている、深くダイブしたいはずの様々な思考を妨げているのは、これに他ならなかった。

先日の彼女の言葉は、私自身が認識しているよりも、特別重い影響を与えたらしい。どう対処しているのか、とても自分では判断できない――

「提督ってば」

「……ん。あ、ああ。すまん。なんだ」

「……さつきからずつと話しかけてたんだけど」

「ああ……いや、すまない。考えごとをしていた」

声に振り返れば、不服そうな表情の者がひとり。

まさか「君の言葉を思い出して悩んでいた」などと言えるはずもなく、気がつけば無難な言い訳を探していた。

「それで、なんだ」

「……今日の夜、時間あるかなって思って」

「夜？」

わざわざ聞くようなことだろうか。午後の私が時間に追われるわけがないことくら

い、彼女には聞くまでもなく分かる事だと思うが。

「夜はいつも一緒にいるだろう。私に特に用がないのも知っているはずだ」

「まあそうなんだけどさ」

「……まあいい。それで、夜に何か用か」

「いや、特になにもないけど」

「……そうか」

少し納得がいかない。用がないのに時間があるかどうか聞くものだろうか。日常的な会話としては不自然すぎるし、全く意図がないというのも不自然だ。

なにかあるのだろう。その『なにか』を話すつもりはないらしいが。

「……………」

「……………」

会話が途絶える。

なにか話さなければならぬと思ひ、ひとまず適当な話を振ろうとしたが、会話の種にはあまりにも下らなさすぎると感じ、言葉を発するのをやめてしまった。

話題を振る段階で一度引っ込んでしまうと、取り返しがつかなくなった。会話の種を見つけてはつまらないからと取りやめ、別のものを探し始める。

十数回繰り返す頃には、既に言葉を出せる雰囲気でもなく、ずっと無言だった。

彼女に伝えておきたかったことを思い出したが、どうもこのような雰囲気では切り出すことができない。夕食後にでも話せたらいいが。

「……………」

お互いが無言の状態で気まずい空気なのは、あまりないことだった。

ちら、と川内の表情を伺う。同じタイミングで彼女からも視線が送られ、ぼつちりと目が合ってしまった。目を逸らす。時計。秒針。午前11時丁度を担う長針。

もう一度彼女の方に視線を寄越す。彼女はずっとこちらを見ていたようで、今度もしっかりと目が合った。少し下がった眉と、への字に曲がった口元が、彼女の心情を表しているように感じた。

「先程から不満そうな顔をしているが、なんだ」

「……………なんかさあ。なんかねえ……………」

ため息じみた吐息。と、私を責める意図を孕んだ言葉。

やはり何かしら私に不満があるらしく、彼女は睨め^ね付けるような目線を寄越すことをやめなかった。

「……………提督、今日なんかよそよそしくない?」

ジト目を向けつつ尋ねてくる。やけに低い声だったところを鑑みるに、本当に気にし

ていることのようにだ。

しかしそう言われたところで、彼女に対する接し方を意識的に変えたつもりはない。

「気のせいだろう。私は普段通り君と接しているつもりだ」

「……ほんとに?」

「ああ」

彼女に対していきなり他人行儀になる理由もない。彼女の思い過ごしでしかないだろう。そうでなかったとしても、ある程度は仕方ないことであると考える。

「バイオリズムが合わない日もあるだろう。このような日に共にいても、後に響くようないざこざしか起こらない」

友人との波長が合わず険悪な空気になる日など、付き合いを続けていく最中にいくらでもあるものだ。

それが今日であっただけであって、私がいきなりよそよそしくなったとか、そういうことじゃあ決してない。

そういう日への対処法があるとすれば、その日限りで合わない友人と、その日だけ会わないことだ。シンプルな方法だが、決定的な軋轢を生むようなことはない。

「……私としては、なるべく君との間に軋轢が生まれるのは避けたい。今日の執務は終わっている。君も私と同じ考え方をしてくれるのなら、今日のところは帰ってもらって

も構わない」

「うーん……」

「……夕飯のあとはここに来てくれ。君もそうらしいが、私もすこし君に用があるんだ」

「……………」

このような状況で伝えたいことを話したとしても、伝えられる自信がない。できたとしても、伝えきつた感覚にならない。

すこし時間を開けるのが最善の方法なのだ。

「……いや、ここにいようかな」

「そうか」

「……………」

「……やはり、今日はあまり合わないらしい」

普段の彼女なら、提案をそのまま呑んでいたように思う。そもそも普段の彼女にはこんな提案などしないが。

とにかくここに残るようだ。どうせ昼を過ぎれば訓練に向かつてしまうが、それまではこの微妙な空気を続けることになるのだろう。

その間ずっと共にいるにも関わらずお互い一言も発しないというのもおかしいか。せつなくなから話しておこう。

「なぜだ」

「え？」

「残る判断をしたのは何故なんだ」

「あ、そういうことか」

普段なら一発で理解してくれたであろう問いかけも、この日に限っては明確に言わなければ分からないようだった。

川内は考える素振りを見せている。いまいち言語化に困るような理由らしい。

「……提督とも、喧嘩とか仲違いとか微妙な空気とか、そういうのを経験してみたいんだ」

「……………」

「わかんないって顔してるね？」

「ああ。さっぱり分からない」

「合わないねえ」

川内とは平穩に過ごしたい。絶望的だ。私と川内の間にそこまで思考の差があるとは思っていないかった。今日はどことん合わない日のようだ。

とはいえ、少しくらいは、こんな日があってもいいのかもしれない。

私と合わない点を見つげられることが、彼女との距離が縮まっている証拠であるよう

にも感じられてきたため、そんな感情がふと湧き出した。

「うーん……その……」

唸り。への字に小さく曲げた口元に手を当て、何事か考え込んでいる。

彼女の考えをまったく理解できない私のために、なんとか言葉を噛み砕いて説明しようとしてくれているらしい。

距離を置くことで衝突を避けようとしていた私とは違い、どうも歩み寄ろうとしてくれているようだ。

しばらくして納得のいく言葉の羅列を見つけたようだが、躊躇うような挙動をしている。どうせ意を決して言うのだろう。

数秒もなかった。えと、と小さく洩らしてから、決心したように私の目を覗き込んでくる。ビンゴだ。

「て、提督とは、一緒に色んなことを経験して、一緒に色んなことを共有したい、つていうか……」

「……………」

「色んな感情を、一緒に感じてみたいなー、なんて。あ、あはは」

「……………そうか」

誤魔化すような笑いが響く。

普段はこちらが恥ずかしくなるようなセリフをぬけぬけとと言える川内だが、今の言葉は彼女にとつて恥ずかしいものだったようだ。

聞く方だつて恥ずかしいのだと分かっているのだろうか。

「あ、別に提督に押し付けるつもりはないからね！ 私がそうしたいつてだけで、その……！」

「ああ。分かっている」

「だよ、わかっているよね……」

言葉のトーンが落ちる。顔こそ笑っているが、声色は残念そうな雰囲気、目線も落ちたのを確認した。

なるほど。変な方向に勘違いをしているようだ。正しておいてやろう。

私だつて、川内と共になら、色々な感情を感じてみたい。そう思えてきた。

「……私も、そうしたいとは思っている」

「……え」

「君に押し付けられて実行するのではなく、私がそうしたい」

「……そっか」

笑顔が活き活きとした。求めていた類の答えだったようだ。やはり川内にはネガティブな雰囲気よりもこうしたものの方が似合っている。

ところで、お互いそう思っているのなら、もう伝えても……誘っても、いいだろうか。色々な感情を、共に感じるために。

「ところでもう夏だ」

「へ？ あ、うん。そうだね」

「ああ」

「……それだけ？」

「……………」

……なるほど。どう伝えたものか、分からない。

思えば、私からこうした類のものを伝えるのは、初めてだ。とにかく喋ることにした。

「ところで盆のあたりでは、10日ほど休暇を取れる期間がある」

「あれ？ 無視？」

2週間ほど後の話だが、働き詰めの艦娘たちに対する救済措置のようなものがある。さきほど説明した通りで、それ以上でもそれ以下でもない。

……とはいえ、強制的に休まされるわけではなく、あくまで休みたいなら休むことのできる期間だ。ここの鎮守府にいる者なら、私に説明されるまでもなく、前任から通達されて知っていただろうが。

私が川内に伝えたいことは、この休暇制度に関係することだ。この流れで言うことに

しよう。

「この者全員に無理やり休暇を押し付けるつもりだが、鎮守府として完全に休むわけもいかない。前半と後半に分け、半数ずつ5日休みを与えるつもりだ」

「……ん？ やっぱ無視だよねこれ。聞いてないフリしてるだけ？ おーいてーとくー？」

「私は2日休めるが、恐らく前半になる。その間は大淀あたりに執務を押し付け——任せるつもりだ」

「よし、もう諦めたよ……」

いい調子で話している。このままさっさと切り出そう。なるべくはやめに。

「ところで当鎮守府の近辺では、例年夏祭りが行われるらしい」

「まあそうだね」

「……日程的には、休暇前半と後半のどちらにも行われるようだ」

「うん。毎年行ってるけど、たのしいよ」

よし。次だ。次の発話のタイミングで、切り出すんだ。

「ところで、前半か後半のどちらに休暇を取りたいか聞いてもいいか」

「話題ころころ変わるね」

だめだ。どうしても切り出せない。頭の中に伝えるべき言葉があるはずなのに、それ

をまっすぐに出すことができない。

……どうすればいいのだろうか。

「……………」

「うーん……そうだね……」

川内は悩むような素振りを見せている。……が、素振りだけで、本当は悩んでいないように感じた。

彼女の頬が緩み始めている。嫌な予感がする。

「後半って言ったなら、どう思う?」

「……いいんじゃないか」

「困らない?」

「……………」

「『困る』って顔してるよ」

「……少し困るだけだ」

ああ、理解した。理解されていることを理解した。

彼女はもう、私の言いたかったことを察してしまっているらしい。一番避けたかった形だ。煽られる未来が目の前を覆って、他の可能性が見えない。

「提督、シャイだよねえ」

「……………」

「かわいいなあ」

「……………」

予想通りの未来だ。ニヤニヤと意地の悪い表情と、緩むのを堪えようとして上がりきらない頬が私に向けられる。

最近になって、川内のそうした表情を見ることが多くなったように思う。彼女の様々な表情を知ることができるのは嬉しいが、これに関しては悔しさのようなものがあつた。

「ま、今はそれでいいよ。今は、ね」

意地の悪い表情が消える。かわりに柔らかな表情を浮かべ、仕方ない、といったふうには、川内は優しく語りかけてくる。私が折れきってしまったまいよう、引つ張つてくれているようだ。

……一応、艦の時代を考えなければ、私の方が歳上になるはずなのだが。年下ながらも引つ張つてくれる彼女の姿を見ると、ありがたさや悔しさの他に、よく分からぬ苦しい感情が湧き上がってくる。

「……………ね、提督」

「なんだ」

「今年の夏祭り、一緒に行きたいなって思うんだけど、ダメかな？」
……………。

やはり、もう完全に悟られていたようだ。言葉に詰まる。

大人しく答えることにしよう。『構わない』と一言発するだけでいいのだ。せめてここくらいは、無愛想でもいいから、普通の受け答えをしよう。

「前半に休暇を取る……………ということでもいいか」

この男、普通の会話ができないのだろうか。

「まどろっこしいなあ、提督は」

「……………すまん」

「ううん、そこが提督らしいし」

笑顔。私のことを完全に理解してくれているような、それでいてそれを認めてくれるような、暖かい表情が私に向けられる。

川内はそうした表情を浮かべるのできる子だった。

「とうか、もともと私から誘うつもりだったんだけどね。だから今日の夜あいてるか聞いたんだけど……………お互い同じこと思ってたみたいで、嬉しいなあ」

「……………そうか」

「……………へへ」

……夜まで待っていていけばよかったかもしれない。気持ちが行先して今言ってしまったが、そもそも私も夜に誘うつもりだった。川内に先に用件を言わせていけば、恥のようなものがかかなくてもよかつたのかもしれない。

「……でや」

おそるおそる、といった声で、川内が言葉を落とす。なにか聞きづらいことを聞くときのような、微妙な表情だった。

「今日やけによそよそしかつたのって……もしかして提督」

「やめろ」

「どう誘えばいいか分から」

「やめてくれ」

薄々自分で気づいてはいた。彼女の感じていたよそよそしさの原因に、すこし勘づいてはいたのだ。

仕方ないのだ。『私』として友人を普通に誘うだけなら簡単な話だった。ただ、『提督』としては、まっすぐに誘いにくかつただけで。それがよそよそしく見えていたのなら、私にはどうしようもなかつた。

……バイオリズムが合わないのではなく、私が彼女に対して一方的に合っていないだけのようだった。恥ずかしい限りだ。

「……ふふ」

「……なんだ」

「んー？ なんでもないよ？」

「……」

「夏祭り、楽しみだね」

「……ああ」

再び優しい目を向けられる。一度意識してしまうと、そればかり気にかけてしまった。

もつとこの表情を向けられていたい。彼女の色々な感情を知りたい。

『——だから、提督のそういうところ、好きなんだ』

……なぜ今この言葉を思い出すのだろうか。そろそろこの言葉に振り回されるのは疲れた。今くらいは、落ち着いてくれないだろうか。

彼女は依然として優しい目を私に向けてくれている。

川内のそういうところが好きだ——なんて言えたなら、頭の中を繰り返す言葉は落ちていくのだろうか。

川内との恣意的な会話を楽しみながら、なんとなくそう思った。らしくないと思つて、すぐに振りほどいた。

夏祭

夏の夜。遠くから響く喧騒と、若干蒸し暑さを感じるくらい気温、湿度。足を踏み出すたび騒がしさが次第に大きくなり、蒸し暑さとは異なる熱量がその厚みを増していく。

軽く汗が滲む。中途半端な発汗にうつすらと苛立ちを覚えたが、それ以上の苛立ちに昇華しきることはなかった。この暑さの中に楽しさがあることを知っているからかもしれない。

夏祭りとはそういうものらしいから。

着任からすこしは時間が経ったが、鎮守府近辺の具体的な立地は未だに知らなかった。現に自身が向かっている場所もよく知らない。ただひたすらに、あたたかな光の集まる方へ、賑やかさの溢れる方へ……と、歩みを進める。

時間にはかなり余裕があった。それでも自然と歩く速度が速くなるのが分かる。

鎮守府から徒歩で20分もないころ。海へ続く緩やかな川が見える大通りに突き当たると、人の流れも騒がしさも肌で感じる事ができた。川沿いがこの近辺で最も賑わう場所らしい。邪魔にならない適当な場所を探し、そこで立ち止まる。

二人組が多い中一人で佇んでいる私を珍しく思うのか、通り過ぎる者達からやけに視線を感じる。とくに気にとめず私用のスマートフォンを取り出した。

最新の電子機器は兎角便利なもので。先人たちからの知識を受け継いできたあらゆる技術をありがたく享受することにし、待ち合わせに指定された場所の正確な位置へと歩き始める。

自身の知る限り最も「超」と「ド」がつく田舎出身の私が、現在位置と目的地を示してくれるサービスがこんなにも身近にあるのだと知ったのは数年前のことだった。あのときほどの強い驚きはないように思う。

やはり早歩き気味になりつつ目的地へ向かう。川沿いから外れ、すこし内地に入る。そのうち交差点の向こうに喫茶店が見えてきた。赤い看板がよく目を引く。なるほど待ち合わせに適していた。

大通りに近いだけあって人波は多く、派手な看板を待ち合わせに利用している者も少なくない印象だ。見たところ店内にも店外にも浴衣姿の者が多い。私もあの中に紛れて待っていることにしよう。

もうすぐに着いてしまうが、待ち合わせよりは少しばかり早い。当分は一人で待つことになるだろう……と、思っていた。

横断歩道の向こうに見慣れた顔が見えたような気がして、雑多の中を見渡す。

彩度の高い赤の看板の下で、悪目立ちしない程度に綺麗に彩られた浴衣を着て――

「あ、提督！ こつちこつち！」

天使はそこにいた。

*

「遅れるかもしれないって連絡きてたけど、そんなことなかったね」

喫茶店前の信号が赤から青に変わったようだ。途端に動き始めた人の流れを眺めつつの川内から、そんな言葉がかかった。人の流れになど視線を寄越している余裕のない私は、普段とは異なる装いの彼女をずっと見てしまっている。会話に集中して雑念を振り払うことにした。

「待ち合わせの時間過ぎたら店の中で待つてようと思つたけど、杞憂といふかなんといふか」

「……まあ、間に合つてよかつた」

「私にはもう遅刻の前科があるから、今度は提督が遅刻してくれたら平等になると思つただけだねー」

数時間前に遅刻の連絡はしたが、待ち合わせの時刻にはまだまだ余裕があつた。結局遅刻はせずに済んでいる。

私用での遅刻に関して、個人的には仕事での遅刻と同程度の重さで捉えてしまつた
め、なんとか遅刻を避けることができて内心ほつとしていた。

青から赤になつたらしい。人波がぱつたりと落ち着いたはずみで、彼女がこちらを向
いた。目が合う。逸らしかけた目をなんとか保つた。

「なにがあつたの？」

「この騒ぎだ。高揚する気分と流れに乗じて、鎮守府の前で妙なことを騒ぎ立てる輩が
出てもおかしくはなかつた。それだけだ」

「……提督が対処してたんだけ？」

「いや。恥ずかしいことに、私は騒ぎに気づかずずっと自室にいた。憲兵は別件に追わ
れていたらしい。たまたま居合わせた大淀とほか数名が対処していたようだ」

狂人の対応をさせられる大淀は見てみたかつた気もするが、事態の收拾がつくまでに
かなりの時間を費やしたと聞いてからは同情しか抱けなかつた。一人くらい私を呼び
に来てくれてよかつたものを。

ともかく都合悪く居合わせただけの彼女たちが不憫だ。

「あれ？ 今日の中の執務って、大淀さんに任せてなかつたっけ」

「ああ。問題はそこだ。大淀がその対処に時間を取られ、任せていた執務に手が回らな
かつた」

「あー……なるほどね」

得心のいったような頷き。おおまかな経緯いきざしは察したようだった。

「つまり、たまたま司令室に行ったら大慌てで書類を処理してる大淀さんを見つけたから、わざわざ軍服に着替えて手伝ってきただってこと？」

「そうなる。そのタイミングで遅刻の連絡をした」

「そっかそっか」

「提督らしいね」と、川内の頬が緩む。目をすこし細めているのは、それでもなんとなく笑みが浮かぶのを堪えているらしい。優しい目付き。やけに嬉しそうな表情。わけがわからない。

数秒笑顔を浮かべたあと、今度は疑問を抱いたような絶妙な表情に変わる。なにか引つかかることがあったようだ。表情の変化が激しく、様子を見ているだけでも楽しかった。

「執務を手伝ってきたにしては……けっこう早かったね？」

「それでもないだろう」

「まだ待ち合わせより1時間くらい早いよ？」

「……予想より早く終わった。それだけだ」

「……ふーん？」

万が一にも遅れるなどといったことがないようにしたただけだ。大淀が焦りつつも着実にタスクをこなしていく隣で、私も大慌てで黙々と執務を消化していると、予想していたより数倍早く終わった。それだけのことだった。

川内が既にいることを期待して早く来たかったからとか、そうすれば少しは二人でいられるかもしれないからだとか、そんな理由じゃない。本当に。違う。違うんじゃないだろうか。

川内の頬がまた緩む。

「予想より早く終わったんだったら、服を着替える暇くらいあったと思うんだけど」

彼女が私を指して言葉を落とす。彼女の指先へ視線を移すと、普段から着慣れているものがそこにあった。数秒思考が固まったあと、自身の身体を確認する。全体的に白を基調とした服装。軍帽。軍服。軍靴。

……なるほど。着替えるのを忘れていたらしい。変に周りからの視線を感じるのはこのせいかな。

「……単純に忘れていた。急いで鎮守府を出たからそれで——」

「急いでたの？ 予想より早く終わってたの？ なんなら待ち合わせより一時間以上前だったけど」

「……………」

川内がニヤニヤと私を見つめているのに気付いて、失言だったと後悔する。この流れは控えめに見てもまずいのではないだろうか。後悔は役に立たない。

「なんで急いでたの？」

「……………」

「早く来たかった、とか？」

「……………さあ」

せめて目は逸らさなかった。たった一つ折れないでいられるところがあると思えば、ここだと思った。

早めに流れを変えなければならぬ。逃げ場を模索することにした。

「君はどうなんだ。なぜこんな早くからここで待っていたんだ」

「早く来たかったからかな」

「……………なぜだ」

「提督なら早く来てくれる気がしててさ」

「……………」

私に逃げ場はないのか。

一度彼女に会話の主導権を握られるとしばらくそのまま責められ続けるのが最近の常だ。そろそろこの流れは断ち切らなければならない……とは思いますが、この状況は打破

できそうにない。明日からでいいか。

川内の表情は言うまでもなかった。

「……まあそれはそれとしてさ」

「なんだ」

私の反応は十分楽しめたようで、川内自ら話題を変えてくれた。

すこし神妙な——というよりは、すこし私の表情を窺う様子で、上目遣いにこちらを見てくる。浴衣姿でそれをされると何故か普段とは異なる気まずさが湧き上がってくるもので、耐えきれずにすこしだけ目を逸らした。

「今まだ待ち合わせの1時間前なんだよね」

「ああ」

夏祭りに行こうと誘われたのはいいが、彼女と二人で行くにはまだ私の精神が持ちそうになかった。それでも共に行くのは変わりないわけだ。助っ人を呼ぶのは当然の流れだった。

……はずが、何を血迷ったか、鎮守府を出る前の私は『二人になるため』に待ち合わせの1時間前にこの場へ向かってしまった。恣意的な生き方をする私が憎くもあつたが、同時にうつすらと感謝も感じていた。

「神通ちゃんたち、こんな早くからじゃまだまだ来なさそうっていうか」

「そうだな」

そこで会話は途切れた。お互い視線を交わしたまま固まる。

青から赤に変わったらしい歩行者用の信号。何度目か分からない人波の切り替わりに、なぜだか焦りを覚えた。ごちゃ混ぜになった周囲の人間の会話たちは、耳に届く頃には意味をなさない音になっていた。

「……………」

「……………」

期待の眼差しが向けられる。目はしっかりと合っていた。ここまで真正面から受け止めてしまったなら、もう逃れることはできない。もとより逃れるつもりはなかったが。

まったく汗をかかない程度まで涼しくなってきたこの場で、それでも頭の中は熱いままだった。赤から青へ。涼しさに乗じて熱気溢れる賑やかな方へ向かっていく人波。

彼女の芯の強い双眸に、今日くらいは飲み込まれてもいいような気がした。

「適当にどこか回っておかないか」

「…………へへ」

「ここで駄弁っているだけというのも暇だからな」

「暇になるかな」

「……暇にはならないとは思いますが、どうせなら。駄目だろうか」

「ううん、全然？」

言わされたのが悔しかった。提案したくなかったというわけではない。言わされなければ提案一つもできない私に、憤りを感じただけだった。

いつかは自発的に言えるようになればいいが。

横断歩道への一步を踏み出す前に確認したのは、ニヤニヤ、と意地の悪い笑み。

……歩きづらいただろうから、ゆっくり歩くか。

「ほら、早く行くぞ」

点滅し始めた信号を理由にして、彼女の反応は見ないようにした。

川に見える大通りにまで戻った。このあたりに詳しくない私は、川内が立ち並ぶ建物や花火が見えやすい場所などを紹介しながら少し前で先導してくれる後に着いていく他なかった。

賑わい溢れる屋台の連なり。彼女の説明が触れる前から、そこをぼうつと眺めていた。聞けば、屋台で提供される食品に関して品質はたいしてよくないようだ。それにも関わらず多くの屋台は繁盛している。縁日や夏祭りの屋台とはそんなものだ。

地元の夏祭りを思い出して、どこか懐かしい気分になった。

「……昔からだが」

「うん？」

「屋台は……特に食品を扱う店に関しては、見るだけ派だ」

「わかるよ」

「だから、散財するつもりでは来ていない」

「まあ私も毎年そんな感じかな」

「君とはよく生き方が合うな」

「だね。ちよつと嬉しいよ」

先行しつつの川内が、振り返りぎみに笑顔を零す。今日のそれは真正面から見れず、すぐに目線を外してしまった。逸らした視線は髪の間隙から少しだけ見えるうなじへ向かう。数瞬まじまじと見つめてしまつてから、また目を逸らした。

誘われた時点で予想していた通り、やはり二人でいるには精神が持たない。心の乱れを必死に抑えつつ、なにか話題を振つて気を紛らわせることにする。

「それにしても、さすがに人が多いな」

「この地域って人口多いからね。あと夏祭りだし」

「そうか。そんなものか」

「うん。そんなもんだよ」

気は紛れなかった。だいたい会話でどうこうなるなら最初から心は動揺などしないのだ。開き直った。諦めよう。観念してうなじは程々に見ることにした。

周囲には本格的に人が多くなってきた。屋台の賑わいも大きい。すれ違う者とは既に肩がぶつかりそうな距離になっている。熱気が渦巻いていた。

「これだけ人多いとさ」

川内の声色が変わる。芝居じみた抑揚。展開の予測ができた。それ相応に対応する。

「はぐれちやダメだって思わない？」

「はぐれたと感じたなら待ち合わせの場所に戻ればいい」

「いやまあそうだけど」

不満そうだ。その理由は臆気ながら分かるような気がした。

予想が正しいなら、また随分と私の精神に厳しい難題を押し付けてくるつもりらしい。

「はぐれる前の対策。なんかないかなって思うんだけど……」

ちらちらとこちらを窺ってくる。答えを探るような発言だったが、既に分かっている言っているのだろう。私も分からないわけではなかった。

……彼女がそのスタンスを貫くなら、私も分からないでいて振る舞ってもいいだろう。本当は勇気が出ないだけだが。

「……少しでいい。時間をくれ」

「……しようがないな。その時間で考えといてね」

優しい目付き。やはりというべきか、川内には私の性格が筒抜けになっているようだった。行動に移すだけの勇気が出ない私を氣遣ってくれている。

……情けない。

「あ、たこ焼き」

「繁盛してるな」

「だねー」

うつすらと感じる焼けた生地匂いと、濃いソースの匂い。少なくとも悪印象を抱くようなものではなく、むしろ食欲をそそられる憎らしいものだった。匂いに釣られた客が並んでいる。

きつとたいして美味いわけでもないのに、何故ここまで集客効果があるのか。何故わざわざ屋台のものを食べようと思えるのか。見れば、並んでいる客には二人組が多い。

立ち止まる。僅かに先行していた川内は気付かずに歩みを止めない。

「……食べてみないか」

辿っていた思考がそのまま口から零れ落ちた。後悔が先行したが、そのうち消えた。どうせこんな形でしか言えなかったのだ。

「え？」

先程『見るだけ派』などと言っておきながらの発言に驚いたようで、川内は素つ頓狂な声を返してくる。同時に私が立ち止まったことにも気づき、数歩前の位置で彼女も歩みを止めた。

「普段なら素通りしているところだ。屋台で提供されるものが嫌いなのは変わらない」
発話に勇気の必要が伴わないうちに、思考の流れのまま言葉とす。屋台の方を向いているため、川内の様子は確認できない。その方が気が楽でよかった。

「……私一人ではなく、君と一緒になら、なにかが違うかもしれない。そう思ったんだ」
「……………」

「嫌ならいい。気にしないでくれ」

「ううん。並ばっか」

言い切るより先に屋台の方へ向かっていく川内。慌てて着いていく。彼女の左隣に並ぶと、ソースの匂いをより一層強く感じた。

ふと前に並んでいる客に目を寄越す。目の前の二人組が手を繋いでいるのが確認できた。

普通ならきつと、今ではない。それでも、私に勇気が出せるのは今しかないように感じた。

『考えた末ようやく答えが見つかった』ていどいくなら、このタイミングしかなかったから。

「川内」

「なに？」

「今ははぐれようもないと思うが」

「うん」

「はぐれないために」

右手を差し出す。すぐに温かさを感じて、頬が緩んだ。

*

「さすがにすこし暑くなってきたな」

「だねー」

屋台の熱気から外れ、比較的人のいない場所で休憩する。頒布されていた団扇で自身に風を送るが、体温とそう変わらない外気温の環境ではほぼ涼めなかった。

川内も同様であるようだった。肌に汗が滲んでいるため、すこしは効果があるかもしれないが。

「浴衣の君は私などよりももっと辛いんじゃないだろうか」

「いや、そうでもないよ。かき氷も冷たいジュースも、提督が買ってきてくれたでしょ。あれけっこう助かったから」

「……そうか。まあなんでもいい。時間も待ち合わせの時刻に近くなってきた」

「そろそろ戻ろっか」

「ああ」

一息ついて、喧騒に背を向ける。

忘れてかけていたが、精神的緩衝材役を予定していた助っ人枠の神通たちも来るのだ。今から戻れば待ち合わせ時間には十分間に合うだろう。

……とはいえ、そもそも私が呼んだのに申し訳ないが、もう既に満足してしまっている自分がいた。

適当に会話をしつつ数分歩くと、いつの間にか待ち合わせ場所に着いていた。目を引く赤い看板。やはり待ち合わせに最適だと再確認する。

「……………」

「……………」

途切れ途切れの会話とともに、神通たちの到着を待つ。喫茶店の前には男女の組み合わせが多く、信号の変化に合わせて歩き始めたり立ち止まったりが繰り返されていた。赤。立ち止まる人々。興味本位で周囲の者を観察することにした。右隣の川内の向こうに騒がしい二人組を見つけたためぼうっと様子を見つめる。

楽しみだと零す男性。笑顔で同意する女性。火花が打ち上がる時間を尋ねる男性。答える女性。浴衣姿を褒める男性。軽く感謝を述べる女性。食い下がりむしろ感謝する男性。対抗してより感謝する女性。腰を折り礼儀正しく感謝の念を伝える男性。男性を褒めだした女性。

周囲からの視線をかなり買っているが、彼らには羞恥心がないのだろうか。

……川内だけは私に視線を寄越していた。途中まで私と同じように彼らを見ていたと記憶しているが、男性が浴衣姿を褒めだした時点でこちらを向いてきた。恐らく期待が寄せられているのは分かる。応えるにしても、その男女のレベルまでは求めないで欲しい。求めてはいないだろうが。

「……今さらだが」

目立っていた二人組から視線を外し、真正面を向く。ちようど信号が青に変わり、止まっていた者達の足音が聞こえだす。

今の私には川内の方を向く勇氣はなかった。

「浴衣、似合っているんじゃないか」

今日待ち合わせ場所で姿を見つけてから、ずっと思っていたことを伝える。

いや、正確には伝えられていない。私の頭を占めていた思いは、私の言葉通りではなく、もっと断定的だったはずだ。

「……よく似合っている」

これも少し違った。私が思っていた通りの言葉にしては軽すぎた。そもそも浴衣だけに抱いていた感想ではない。

普段とは異なる落ち着いた雰囲気や、青を基調とした涼し気な浴衣や、後ろ髪の間から少しだけ見えるうなじも、たまに零す笑顔も。私が持っていたのは、そうしたものを全て引つ括めて抱いた感情だった。

似合っているだとか、もはやそんなものじゃない。

「その……なんだ。かわ……綺麗だと思——」

「提督、こんばんは」

左からの唐突な声。振り向く。見慣れた顔。

「神通かどうしたこんなどころで奇遇だなどどうしたながあつた一体なんだ」

「待ち合わせをしていたと思うのですが」

「それもそうか」

もう待ち合わせ時刻に近かったようだ。話しかけてきた神通はニコニコと笑顔を振り撒いている。その背後には那珂。

……聞かれたか？

「いつからそこに」

「……？ ついさつきここに着いたばかりですが」

「そうか、それならいい」

聞かれてはいなさそうだ。

こうしたもの……というより、姉の川内に関することに目敏い神通にはほとんど聞かれていてもおかしくなかったが、今日は運が良かった。どうせ煽られるのだ。聞かれていなくて安心した。

『浴衣、似合ってるんじゃないか』からは聞いていましたが……」

「そうか、それは駄目だ」

小声で耳打ち。安心などなかった。この艦娘には勝てる気がしない。

那珂は状況が分かっているような表情だ。彼女こそ唯一の救いなのかもしれない。

……ところで、私が発した言葉は、最後まで聞かれてしまったのだろうか。

振り返り川内の表情を伺う。顔が赤い。よし。視線変更。神通へ。

当たり障りのない会話をしよう。逃げの一手も重要なのだ。

「神通はさすがに浴衣がよく似合うな」

「そうですか？　ありがとうございます」

「ああ。那珂は……」

那珂に目を移すと、期待の籠った目で私を見つめ返してきた。わかりやすい。

「私は……？」

「那珂は…………」

「うん………！」

期待の感情が声にまで現れている。そこまで期待されると応えなくなるものだ。

「行くか」

「ちよつと!!」

「なんだ騒々しい」

「みんなのアイドル那珂ちゃんの浴衣姿だよ？　もつとなんかさ、ないの?」

「ああ、それもそうか。君の浴衣姿は……」

「うんうん！」

「まあ、浴衣姿だ」

「なにそれ！」

寸劇。

これがアイドルらしきなのかは分からないが、適当にあしらうだけで大きな反応を返してくれる。どこか懐かしい反応だ。数ヶ月前の川内を想起した。最近はこちらが煽られることの方が多かったため、悔しいことに嬉しささえ感じてしまった。

「ちゃんとした感想ほしいなあー!」

「なるほど。浴衣姿の女性を見る度……いや、君を見て思ったことだが」

「なにになに?」

「蒸し暑いだろう。辛くないのか」

「……提督、那珂ちゃんは今とても悲しい」

「そうか。似合ってるぞ」

那珂で遊ぶのはほどほどにして、そろそろ現実と向き合うことにした。

川内の方へ振り向く。紅潮は収まっていた。その代わりになにか言いたげな表情を
していたが。

隣で騒いでいるアイドルはさておき、なにか問題があったようだ。

「どうした」

「……べつに、なんでもないよ」

「せめて表情と言葉を合わせてくれ」

不満そうな声。それとは別に、恥ずかしそうでもあった。

「提督、神通ちゃんにはすぐ浴衣の感想言えるんだ……っと思って」

「……まあ、そうだな」

言い逃れできない事実だった。そんな気まで回している余裕などなかったが、今思えば確かに怒られても仕方のないことだ。

どう釈明したものか。なにか都合のいい弁明でも思いつけばいいが、そんな機転が利く者はこんな状況に陥らない。

……今日はもう、いい日かもしれない。自分の中の感情や考えを、思う存分伝えてもいいような気がした。

「君には……すぐには言えなかった」

「……なんで？」

「……………」

追求の手を止めてくれない。どうしても答えを聞きたいようだ。最初から言うつもりではあったが、追求のおかげで踏ん切りがついたようにも思える。

目は逸らさなかった。

「君に伝えるのだけは気恥ずかしかった。その理由は汲み取ってくれ。……それだけだ。つまらない理由ですまない」

真正面から伝える。この言葉を吐く方がもつと恥ずかしい。こんなことなら最初から彼女に伝えておくべきだったかもしれない。

川内も少し恥ずかしそうな面持ちだ。気のせいかもしれないが、若干紅潮がぶり返してきたようにも思う。尚更先に言っておくべきだった。

ふと嫌な予感がしたので振り向いた。神通の笑顔。那珂の興味津々といった表情。

「……行くぞ」

なにか言われる前に、一步踏み出すことにした。幸いにも信号は青だ。

私が足を進めてから数瞬後、追いかけてくる彼女達の足音が聞こえた。歩調は合わせるが、顔は見ずに話も聞かないでおこう。

「て、提督！」

「ん」

「……えと」

川内の声。私が反応を返す頃には隣に追いついてきていた。

気のせいではなかったらしく、再び紅潮した顔で私を見つめる。今日だけで何度も受けてきた期待の眼差し。私の答えは既に固まっていた。

「今度は……手繋がないの……？」

「……今は、はぐれないだろう」

「……………」

「……とは言っても、これからもっと人が増えるだろうな」

無言で手を差し出す。

今日くらいはいいんだ。明日からは、明日からの私がつつとなんとかしてくれる。

「……………」

「……あ、ありがと。手」

「……………」

それにしても、私は『期待を孕んだ視線』に弱いらしい。

今日だけで何度もこれにやられてしまった。明日からの私には気をつけてもらわな

ければならない。

「いいな」

「那珂。那珂は私と手を繋ぎましょうね」

「うわあ子供扱い。やめてよねー。いいけど」

「提督たちの邪魔はできませんから。そうですね、提督？」

左側から聞こえる会話は、先程決めた通り無視することにした。

閑話：普通の艦隊旗艦と夫婦の漫才時間

私にはやってみたくことがあった。やろうと思えばきつとすぐに機会が与えられて、それでもたぶんやり始めはとてつらいような、そんなものが。

やりたいとは言っても、ちよつと興味があるだけで、今後司令官にダメだつて言われたらやるつもりはないし、川内さんが悲しむなら絶対にやらない。その程度の熱量だけれど、それでもやりたいものはやりたいものだった。

……………。

そういえば、私のような艦娘が『やってみたい』などと希望を持つことに嫌悪感を抱く人間もいるらしい。そうした方々も守るべき存在ではあるけれど、嫌な気分にならないわけではなかった。

そもそも艦娘の権利について、その細部まではまだまだ認められていない世の中だから、仕方ないのかもしれないけれど。もうちよつと認めてもらえたらいいな、なんて思わないこともな——

「てーとくー」

「ん」

「ひまー」

「そうだな」

「ねーなんかないのー？」

「何も無いのは君がよく知っているだろう」

「えー」

「……………」

「……………」

「……………」

「ふあああああ……………」

ええと、変な方向に進んでいた思考はそろそろやめておいて。

やってみたいこと。

それは、夢というほど重いものでもなくて、ただちよつとだけ、やってみたいなあって思うくらいのもので。

それでもまあ、盆に休みを与えられたとなると、せつかくならその体験くらいはしようなかと思うほどのものではあった。

「……………」

「……………」

簡単に言うとは秘書艦の仕事をしたいただけ。私がここに来てからだから、ほとんど4年くらいはそう思っている。前の司令官のときも含め、今まで機会に恵まれずに叶わなかった。

そんな状況だったけれど、つい先日ようやく機会が巡ってきた。

川内さんが再び演習や訓練に参加できるようになつてからある程度余裕があるというところで、私の願望をどこかで耳に入れていたらしい司令官から『話があるならいつでも来い』との言葉を受けたのだ。

ひとまず見学さえできればいいかなと思ひ、司令室のドアをノックしたのが20分前。前もってアポイントメントは取っていたし、覚悟もしていたはずだけれど、司令室に入る際の緊張は思っていたよりも大きかった。

.....

「川内」

「ん、なに？」

「暇だ」

「そうだね？」

「何かないのか」

「なにもないの、提督がよく知ってるでしょ」

「そうか」

「……………うん」

「……………」

「……………」

「……………暇だ」

……………ところで、目の前で繰り返り広げられている会話を、どう受け止めたらいいのだろうか。

秘書艦はこうしたふわふわした会話も仕事の内に入るらしい。4年間の願望がすこし薄れてしまった。

ここは割り込ませてもらおう。またあんな会話に戻られてしまつては敵わない。

「……………お二人共、さつきからなにやつてるんですか」

「会話だ」

「会話だねえ」

「そういうことではなく……………」

はあ、とため息がこぼれてしまった。こぼしてしまつてから、今は上官の目の前いるのだと気づいて、すこし焦る。

目の前の上官は冷たい表情をしていて、感情をまったく表に出さない……………というより

も感情をまったく有していないような、生気のない印象を受ける。初見時には怖く感じる雰囲気だ。

……でも、司令官は見た目には無表情で怖いけれど、本当は優しい方だ。私の無礼な行為でさえも、後で形式的にそれとなく注意するだけで済ましてしまう。優しい方というより、甘い方なのかもしれない。

司令官が着任した当初は、私以外の駆逐艦たちは司令官を怖がつて近づこうともしなかつたけれど、今ではだいたいの子達が彼を慕っている。

いざ目の前で会話するとなると、まだどうしても萎縮してしまうらしいけれど……とにかく、司令官の優しさは、ここにいる皆には伝わつたらしい。

「……そういえば」

司令官が言葉を落とす。私の方を向いての言葉だったので、私に対するものなのだと分かつた。

聞く姿勢を整える。先程のような無礼は働かないように注意しよう。

私の願望を汲み取つて機会を与えてくれた司令官には、できる限りそんな態度は見せたくなかつた。

「吹雪。なぜここに？」

「……あ、汲み取つていただけでいいませんかでしたか」

——どうも、私と司令官の間には認識に軋轢があつたみたい。

*

ヒトマルヨンマル。司令官との壁を感じてから5秒後。

室内のクーラーはちよつと古いみたいで効きが悪い。暑くも涼しくもない温い環境に響くセミの声は、場違いさを感じてただ煩いだけだった。

それはいいとして、どうも私は司令官に理解されていなかったようで悲しくなりました。

「……というか、ここに来た理由、さつき説明しませんでしたっけ」

「そうだったか」

「……15分前の事なんですけど」

「そうか」

「……………」

ああ、違う。これは私をからかっているだけだ。司令官の表情は依然として無だけけれど、川内さんは司令官を責めるような表情をしている。

川内さんを通して司令官の意図を読み取るというのも変だけど、司令官の真意を探るにはたぶんけっこう確実なやり方。

「はあ……………」

ため息。先程気をつけようと思ったばかりだったけれど、つい出てしまった。仕方ないと思う。この人、むしろため息まで含めて私の反応を楽しんでいるような気がするから。

「今日は秘書艦の仕事を見に来たんです」

「ああ。15分前に聞いた」

「……………」

泣きそうだ。

寸劇じみた会話。真顔でそのような会話を繰り広げられるとシニールさが増してすこし笑ってしまいそうになるのが悔しい。

ともかく私と司令官との間の認識にたいした差異はなかったようだ。よかった。

「提督ってわりといつもこんな感じだから……ごめんね？」

「ううん、いつもこんな感じだからかわれてるから、慣れてます」

川内さんは司令官の性格をとてよく理解しているようだ。司令官の方に咎めるような視線を送って、やめさせようとしてくれている。それを意に介さない……フリをして彼女の反応を楽しんでいるらしい司令官。

……うーん。こういうのはなんと……『お似合い』でいいのだろうか。

「……………タイミングが悪かったな。今日は執務がすぐに終わったんだ」

「そうなんです。道理で延々痴話ばなしを繰り広げていると思いました」

「ああ。せっかく休みの日に来てくれたところ、すまない」

お返しとばかりに少し攻撃すると、司令官は都合の悪い部分には耳を傾けず、言いたいことだけ言って済まされてしまった。

これが大人というものなのだろうか。悔しい。

見れば、川内さんは嬉しそうな表情をしている。わかりやすい。

「そもそも君たちが休暇を取れるこの時期、ほとんど艦隊は休みだ。明日明後日にまた来てくれてもいいが、通常通りの執務にはならないだろう」

「そうですか、少し残念です」

本当にタイミングが悪かったみたいだ。そういえば私たちに盆休みが与えられる期間は哨戒くらいしかしないんだっつけ。仕事量が減るのはそれが理由なんだろう。

もう少しタイミングを見計らった方がよかつたかもしれない。やりたいことができようになるって、ちよつと早計になりすぎた。

司令官の視線が下がる。考え事をしているらしい。状況的に私に関することだ。こうして私たちのことをいちいち真剣に考えてくれるから、司令官は皆から信頼されているんだと思う。

「まあ、今日のことはいつでも来ていいと言った私に非がある。わざわざアポイントメ

ントを取つてまで来てくれたのに申し訳ない。埋め合わせとまでは言わないが、また仕事量の多そうな時にでも呼ぶ」

「……すみません、ありがとうございます」

「気にするな」

事務的な報告のような、無機質な声。その抑揚のまま私を氣遣つてくれるのは、失礼だけれど笑いそうになった。

優しいなあ。それをもつと表面的に出せば、他の駆逐艦の子達も彼に話しかけやすくなる、と思うのだけど。妖精さんたちもそうだ。司令官、せっかく慕ってもらえているのに勿体ない。

まだ伝えるべきことがあるみたいで、彼は相変わらずの無表情のまま口を開く。

「ちようどいいから伝えておこう。今後秘書艦をしてくれるつもりなら、川内との交代制のようになる。君の出撃や演習の予定も見直さなければならぬ。戦力として君を失うのは痛い、その分川内が穴埋めするように予定を組むことになる。その意味では特に問題は無い。が」

言いつつあと、司令官は川内さんの様子を少し見て、再び私に目を向けた。

懸念していることを悟れ、と言われているように感じた。

ずっと目を背けてきた部分だけど、川内さんには秘書艦を続けるだけの理由がある。

それを知っていたから私は今まで秘書艦について遠慮していたのだ。司令官が知っているかどうかは分からないけれど。

とにかく避けては通れない道だ。

「いいんでしょうか……？」

「……私は構わない」

……そんな表情に見えない。仏頂面で声も平坦なはずなのに、どこか沈んだような霧囲気を感じる。川内さんに関することには敏感な人みたいだ。

というか、私にわかるくらいなんだから、川内さんはもつと司令官の気持ち理解できているんじゃないだろうか。明らかに落ち込んでいる彼に、どんな反応をするのだろうか。私知知っている限りの彼女なら、きっと恥ずかしがって――

「別に私もいいよ。……吹雪ちゃんが秘書艦をやったがってたのは、前から知ってたし」
落ち込んだ声。それにしてもあつさりを受け止めていて、声と内容のギャップが酷い。

……あれ。思っていた反応と違う。

「まあ詳しい話はまた吹雪が来た時にでもしよう」

早々に話題を片付けてしまう司令官。こつちも思っていた反応じゃない。気の所為かもしれないけれど、焦っているようにも思えた。

というか、川内さんが秘書艦を担う日が減る『かもしれない』の段階でどつちも落ち込むなんて、そんなのまるで――

「……あの」

「なんだ」

「どうかした?」

たまらず声を洩らしてしまうと、同時に聞かれる。息びつたりつていうのはこのことなんだろうな、とすこし感心した。

この質問で、すこしは元気を取り戻してくれると嬉しいけど。

「お二人共、前よりもずつと近い関係になりましたね……?」

「……」

「……そうなの?」

なにも反応を返さない司令官と、とぼける川内さん。

どちらも落ち込んだ雰囲気が出た飛んでいったように思う。それどころじゃない、と危険を悟ったような。

「それも、ここ最近でずつと発展した、というか……」

心から抱いていたシンプルな疑問。ちょうどいい機会だ。最後まできいてしまってもいいか。

二人は私の次の言葉を警戒するように、神妙な面持ちをしている。なんでだろう。

「お二人、なにかあったんですか？」

ついに聞いてしまった。

二人の距離が縮まった理由、とても気になっていたのだ。どんなことがあったんだろう。答えが楽しみだ。

「……………」

「……………」

……………あれ。この空気はいつたい。

「……………な、なにかあったんですか？」

「いや……………まあ……………何もなかった」

「う、うん。なんにもなかったよ」

確かになにかあったときの動揺のしかたをしている。二人とも目が泳ぎ、なんとなく声の迫力と芯がなくなつたような気がする。そんな様子を見ていて、何があったのか、だいたい察しがついたような気がして。

……………。

これはチャンスなのでは。

「……………夏祭り」

「……………っ」

「……な、なつまつり？」

ビンゴ。理由として浮かんだ言葉をとりあえず言ってみただけけど、いきなり正解してしまつたみたいだ。

おおかた一緒に過ごしたんだろうと思う。そういえば司令官と川内さんの休みはちよつど合つていたような。なるほど。そういうことか。

「夏祭りには一緒に行つたと聞いたのですが」

「誰からだ」

「それは言えません」

ブラフだとバレないよう、嘘を突き通す。

普段の司令官には躲かわされていただろうけど、今の彼には通じるような気がした。実際、通じてしまつている。司令官も人の子なんだなつて思った。

「もう一度聞きます。なにかあつたんですか？」

「……………なにも」

動揺しているにしても、司令官はしぶとい。追い込むように瞳を覗いても目を逸らすことさえなかつた。

責めどころを変えるべきだろうか。あるいは責める相手を変えるべきだろうか。ど

ちらにせよ司令官は硬そうだから……

「なにもなかったよね！ て、手なんて繋いでないから！」

「えっ」

「……川内」

「え？ ……あつ」

答えは自爆を待つことだったみたいだ。

しまった、と口に手を当てる川内さん。そんな行動で放ってしまった言葉が戻るわけでもなく、なんとも言えない微妙な空気が漂っている。

そっか。手を繋いだ、か。

……ん？ まだその段階？ 手を繋いただけでこんなに動揺してるの……？

もつと大人らしく、色々進んでいると思っていたんだけど。この二人、もしかしてかなり初心なんだろうか。

たぶん、それに関しては手を繋いただけでここまで恥ずかしがれる彼らが一番理解していて、だからこそもつと恥ずかしくなっているんだろう。

きつとそうだ。

「……お二人を見てみると、優しい気持ちになれます」

「……………」

「うっ」

目を逸らしつつも無言を貫く司令官と、机に突っ伏して呻き声を上げる川内さん。こうして見てみればどちらも可愛く……いや、司令官は可愛く、川内さんはもっとかわいく思えてきた。

自然と笑顔が零れてしまう。私の周りには、思っていたより愛おしい人達がいたみたいだ。

時速5キロくらいでゆっくり進む彼らを、今は大人しく見守ることにした。

素直

「あ……」

夕方未満、昼以上。すこし夕方寄り。

今日は早々に訓練を終えたらしく、その後やはりここに向かってくれた川内は疲れた様子で机に伏し、ため息まじりになんの意味も成さない声を上げている。司令室へ入ってきた時には汗をかいていなかったところを考えるに、惜しいことにシャワーは浴びてきたようだった。

そんな感情を表に出すわけにもいかない。悟られまいと表情筋を無表情で固定した私に手にした盆には、茶を淹れた湯呑みがふたつ。

「お疲れ」

「わ、ありがと」

そのうちのひとつを川内に渡し、自席につく。椅子が僅かに軋みを漏らした。そのままの流れで飲み慣れた味のものを一口含むと、食道を通る熱い感覚と共に安堵感が身を包むのが分かる。

なんとなくため息をついた。

この頃は茶を汲む機会が多い。川内が午後の訓練に参加するようになってからほぼ毎日だろうか。意外なことに毎日飲んでいても飽きがこないものだが、この調子なら金剛の感覚もそのうち分かるようになるのではないだろうか。茶の種類は違うが。

手に馴染みのある湯呑みをすこし傾けながら、なんとなくそう思う。

ちらと見ると、川内は湯呑みを両手で包み込むように持ち、猫舌らしく必要以上に息を吹きかけ冷まそうとしていた。毎日見る光景だ。おそろおそろといったふうに手中のものを傾けると、くぐもった呻き声とともに渋い表情に変わる。今日は冷ましきれなかったらしい。ゆっくりと湯呑みの傾きを戻していた。

上がりかけた口角を誤魔化すように、湯呑みで口元を覆う。口に含むと噴き出しそうでよくない予感がしたため、飲むふりだけはしておいた。数秒して、表情を御するのに労力を要さないようになったあと、湯呑みを机の上に置く。決意が固まってから川内の様子を見る。

涙目になっているのを確認して、今度はきちんと口角が上がった。固く保っておいたはずの表情と決意を貫通するのはやめてほしい。このままでは隠しきれないが、こちらを見ている余裕もなさそうなのでまあいいか。

しばらく無言が続く。司令室の近くで駆逐艦が騒いでいた。

廊下には近づいてくるパタパタとした足音。足音とともにポリウームの上がる『おつ

そーい!』の言葉。島風。通り過ぎていった。追いつけないらしい駆逐艦数名が苦言を呈しつつその後を追う。

——さて。

どちらが先に口を開くか、最近は予想できるようにさえなった。ようやく緩んだ表情が戻った私に関しては、あいにく今は会話の種子袋が空っぽだ。今回は川内の番のようだった。

「提督つて、平たく言うとな職場に住んでることになるんだよね」

「そうだな」

湯呑みを両手で包んだままの彼女の言葉に肯定で返す。

今までそのような感覚はなかったが、考えてみればそうなるのか。当鎮守府の施設内、そのうち使う予定のなかった一室に厚かましく居を構えて生きているとなると、職場に住んでいると言つて差支えはないだろう。

他所のそうした事情はあまり知らない。私のやり方が当たり前だと思っていた。そうでない方法を探すのが面倒だったこともあるが、前任はそうしていたと聞いていたし、それに做つたつもりだ。

一応この付近のアパートに入居してはいるため、そこに帰る選択肢はあったのかもしれない。

「でさ、その職場に住んでる……ってことなんだけど」

そこで言葉が途切れた。

尋ねていいものか迷っているらしい。目線で促す。

「……その、色々怖くない？ 強襲とか急襲とか、万が一があつたらさ」

心配そうな声色だった。

たしかに、哨戒を解くことにはないため急襲はある程度防げるにしても、強襲に関して
は難しいかもしれない。損壊を顧みずゴリ押しされてしまうと、恐らく敵勢力の殲滅、
あるいは撃退までに多少の損害は被ることになるだろう。その被害が近辺の市民にさ
え向かなければいいが、当然私が直接攻撃を受ける可能性もなくはないわけで。

可能性は低いにしても提督の立場にある者が殉職するケースはある。それに対する
恐怖心を押し殺して無理していないか、わざわざ尋ねてくれているらしい。

優しい奴だ。川内はこれができる艦娘だから、周囲の者達に信用されているのだら
う。

「恐怖心のようなものは確かにある。ただ、たかがそんな理由で怯える者には提督業な
ど務まらない。そもそも有事の際すぐにこの場に復帰できないようでは、私がいる意味
などないだろう。それに……」

「……それに？」

「君たちがいる」

「……へ？」

意外そうな声。同時に珍しいものを見るような目が向けられる。

確かに普段は表に出さないような発言だが、そこまで驚かれると悲しいような虚しいような。もつと常日頃から表現すべきだろうか。

それはそれで、驚かれそうではあるが。

しばらく表情をかためていた川内だったが、次第に心配するような表情に変貌する。そこまでか。ここまで大袈裟な反応をされると、むしろ意地のよなもの、張らなければならぬ気がした。

ちようどいい機会だ。伝えておくべきことは伝えよう。

「ちよつとなにそんなこと言つてさ……提督らしくないよ」

「特に君は最も練度が高い部類の者だ。君一人いるだけでも安心感が違ってくるものだ」

「い、いやー。重責がすごいなあ。あのさ提督。ちよつとその評価は高すぎるんじゃない」

「もつと高く見積もつてもいいが」

「すつごい妥当な評価！ これ以上ないと思う！」

日頃抱いていた感情を伝えたが、よほど私らしからぬ発言だったらしい。困惑しながら

ら反応を返した川内は、居心地が悪そうにしつつも湯呑みに手を伸ばした。

……弄っているだけだと捉えられていないだろうか。私は本当に彼女の存在に安心感を覚えているし、私のような凡夫が評価を下すこと自体烏滸がましい行為だと思いうくらしいには重要な人材だと認識しているのだが。

川内は褒め殺しに疲れたらしく、そこまで内容が減っていない湯呑みを当たらないよう置きなおしたあと、腕を枕に半身を机に伏した。顔はこちらへ向けている。

「……いやまあ、冗談は抜きにしてさ。私、ちよつと前までしばらく訓練もできてなかったし、ちゃんと提督を守りきれるか分かんないよ」

「……ぜひそこは私だけではなくむしろ近隣の住民を優先して護ってほしいところだ」
「あつ……いい、今の忘れて」

彼女が目を逸らす。うつすらと浮かべている苦笑い。どう反応してよいものか分からず、小さくため息を零してしまった。

最近の彼女の発言には時に危うさが伴う。主に私に対しての。

「そこまで数ヶ月のブランクが気になるなら、これから取り戻してくれ」

私が言葉を落とすと、途端に川内の表情が曇る。微細な変化だったが、なんとなく良い気分でないのは分かった。あまり喜ばしいことではないようだが、表情の機微に気づけるのは常に隣にいる者の特権……と考えると嬉しいような気もする。

とはいえ、今の発言のうち引つかかる部分がどこにあったのかは判断できなかつた。今の発言の中に私が意図しなかつた意味を汲み取つてのものとも考えられたが、どこもなくそこにはない部分に蟠りを抱えているように思えてならない。

そこを探る意味も兼ねつつ、続く言葉を紡ぐことにした。

「これから君が執務にかける時間は大幅に減るだろうから、その分納得いくまで訓練する時間はあるはずだ」

先日、吹雪が正式に秘書艦を志願しに私の元へと来た。川内も同じ場に居合わせたため、だいたいのは三者間で簡単に決めてしまつてゐる。一日おきの交代制。彼女たちの艦種に大した差は無いため、生まれる穴は互いに埋め合うように設定した。

その日から数週間は、調整のために今まで通りの運用をしてきたが、明日ようやく初めて吹雪に秘書艦を務めてもらうことになつてゐる。

つまり、明日からは川内が訓練や演習にかける時間が増えるのだ。

「……まあ、そうだよな。時間はあるし、ゆっくりやるかな」

秘書艦としての仕事が減ることだけではなく、やはりなにか他にも気になることがある様子だつた。後悔のようでもあり罪悪感のようでもあるもの。彼女の表情に落とし込まれた影には、そんな判別のつかない感情がなんとはなしに含まれてゐるような心地がした。

好ましくない方向で普段と様子が異なる彼女に、なんと声をかけてよいものか決めぬ。それを知っているほど私は強い人間ではなかったし、提督としての言葉となるとより一層分からなかった。

温い空気。効きの悪いエアコンの稼働音が鮮明に聞こえる。

その音をかき消していた風物詩たちが既に散っていったにも関わらず、夏は暑さだけを残してその面影を匂わせていた。

「……………」

「……………」

決している雰囲気ではない。たいして悪くもなかった。微妙な空気の中、体を起こした川内は浮かない表情の理由を話すつもりはないようで、すこしは温くなったらしい茶を嚙下していた。

互いに無言のまま微妙な空気が続いていたが、この場合はあまり辛くはない。そんな状況よりも、彼女の中に私の知らない部分があることの方が辛いものがあつた。気分を取り戻さなければ。何か話そう。

「…………吹雪が新しく秘書艦を担うとなると、新しく湯呑みを用意しなければならないな」
「…………ん、そうだね。別に私の使ってもらってもいいけど」

「ああ、そういえば君は気にしない奴だったか」

「まあ同性だし友達だし、余計にね」

秘書艦絡みの話題だったにも関わらず、再度川内の様子が落ち込む気配はない。先程の空気はやはりそれが理由ではなかったらしい。

いつも通りの波長。無理している様子もない。先程の微妙な空気と川内の表情は、思っていたよりもすぐに解消された。

そうなると表情が曇った理由が尚更気になる。秘書艦関連でないのなら何が理由として挙げられるだろうか。思考をぐるぐる回す。

「なあ川内」

「んー?」

よく分からなくなってきた。昔から人の心情を考えるのは苦手なのだ。そんな私があれこれ難しく考えていても仕方ないのだろう。

私がするべきはただの会話だ。単純に気になっていたことでも尋ねることにする。

「今更だが、君はいいのか」

「なにが」

「秘書艦」

私の言葉を聞き終え、川内はその真意を探ろうとしたらしい。しばらく思索をめぐらせるような素振りを見せたあと、結局分からなかったようで、私にどういふことか尋ね

た。

説明が面倒だったため、察してくれるのが都合がよかったが。まあいい。

「吹雪と一日ごとに交代とはいえ、君が秘書艦の仕事に触れる機会は明らかに減る。すすんで務めてくれる君にとつて、あまり好都合ではないんじゃないか」

吹雪が秘書艦を志願しに来たときにはさすがに聞けなかったが、その後もなにかと尋ねる機会を窺つてばかりで聞けずじまいでした。

好んで秘書艦を請け負つてくれる者など川内と吹雪以外にいないように思うし、その間にはできるだけだけ軋轢を生まないようにしたい。提督としてそこは若干介入すべきかと考えている。

……と言えはいよいよに聞こえるかもしれないが、実際のところそれくらいで壁が生まれるほど彼女たちは精神的に弱くはないだろう。ただの会話の種になればいいかと思つていた。

「……まあ、秘書艦についてなら、提督には今までで色んなものを与えてもらったし。べつに、そこはあんまり気にしてないんだ」

川内は相変わらず恥ずかしげもなくそんなことを言う。すこし前の私なら真正面から受け止めていられなかっただろうが、今の私には血を吐きながらならそれを可能にするだけの余裕があった。

私から川内に何かしてやれたつもりはなかったが、彼女にとつてはそう感じていたよ
うだ。

……むしろ私の方が与えられたものが多いように思う。きつと、これからも与えられ
るのだろうかとも思っている。だから私は彼女の存在にありがたさを感じているし、それ
に何か返してやりたい。

この思いもいつかは伝えられたらいいものだが。

「こうした堅い仕事とか、ブツキー……吹雪ちゃんには合つてると思うよ」

私の予想通りというべきか当たり前というべきか、秘書艦関連で吹雪との間に蟠りが
生じるようなことはなかったようだ。川内の性格はだいたい理解できていた。まあこ
んな奴だ。

「それはそれとしてさ……えつと、できればいいんだけど」

彼女の双眸が私の目を見据える。すこし自信がなさそうな、それでもある程度は確信
を持つているような目。それぞれ半々といったところだろう。

そんな彼女の表情に、この後に続く言葉はイメージできていた。答えの方向性を固
め、覚悟を決めつつ、呑み込まれないように気をつける。私が素直に答えるにはそれし
か――

「わ、わたしのことも忘れないでね……？」

「一日で忘れたら、その時はすまない」

「えっ」

失敗した。

予想より強い砲撃。思わず用意していた答えが吹き飛んでしまった。

弾みでなにかとんでもない事を口走ってしまったような気がする。まずい。

「……ま、いいや。こんだけ一緒に過ごした提督が今さら私のこと疎かになんてしないと思うし……?」

「……………」

「……えっと、しないよね?」

「……………」

「あれ……? 私、傲慢が過ぎたかな……」

自身の失態に何も言えないしていると、勘違いしたらしい川内がなんとも言えない微妙な笑みを浮かべる。すぐに落ち込み気味だと分かった。今度はきちんと理由が分かる表情の変化だ。

何かフオローしなければならぬと思っただが、こうした瞬間になにも言葉が浮かばないからこそ、妖精にも避けられ駆逐艦にも威圧感を与えてしまうのだ。自身の性格を呪いたい。

「提督」

脳内で藁人形に釘を打ち込んでいると、川内から声がかかる。普段より小さく、儂げな声。思考が止まるには十分すぎる刺激だった。

思考の時間が止まった私を差し置いて、川内は困ったように眉毛を八の字に曲げ、それでも無理やり柔和な表情だけは浮かべ、自信なさげに言葉を紡ぐ。

「提督には迷惑かもしれないけど、私のこともかまってくれと嬉しいかな……なんて」「あんまりそういうセリフを連発しないでくれ」

再び予想より強い砲撃。

想定外の連撃に思考は轟沈したが、本音だけは言葉となつて出てくれた。

「心臓が持たない。そういうのは心拍数に響くんだけ」

息苦しい。すこし前の私なら多少苦しくなるだけでサラツと流せていたはずだったが、今は自身の鼓動の音がはつきり聞こえるほど動揺してしまっている。

なぜここまで動悸に支障をきたすのか、私には分からなかった。いや、本来理由は分かっているはずで、今の私は目を逸らしているだけなのだ。向き合う勇氣と精神力がないだけ。

私に足りない勇氣も精神力も持ち合わせている彼女には、恐らくその理由が既に理解できているのだろう。

「……それって」

彼女からの声。未だ自信が大幅に損失しているようで、やはり普段よりは静かな声だった。

きつと彼女には、私の発言の意味と理由が分かかってしまっている。私自身が気づかないふりをしている感情に、彼女の方が気づいてしまっているのだ。

少しばかりの怖さと期待が渦巻きつつ、彼女の次の言葉を待つ。

考える様子を見せた彼女は、次の言葉を発しようと口を開き、そのまま首をかしげる。
……かしげる？

「……どういふこと？」

「そうか、分からないか」

……どうも、私の予想は外れたようだ。それを認識した瞬間、ホツとしたのか残念なのか判断できない感情が沸く。

何かが進展してしまいそうなところを押しとどめることができて安心すると同時に、何かが進展しそうなところを押しとどめてしまったことに後悔のようなものを感じた。

ともかく、分からないと尋ねてきたのなら答えなければならぬ。

「……まあつまり」

思考が戻り始める。どう取り繕うべきか、落ち着いてきた頭ではすこし方向性を決め

ることくらいはできた。

今の私にできる限りの表現で、彼女に抱く感情を伝える。鼓動は早いままだったが、頭は十分に落ち着いていた。

「……私が君を切り捨てるなどありえない」

「……そっか」

「むしろその逆が怖いくらいだ」

「逆なんてありえないって、分かかってて言ってるよね？」

「さあ」

逆など有り得ないのだろう。私が川内から離れるつもりはないように、きっと彼女もそう思ってくれているはずだった。ずっと隣にいた私には分かる。

それを認識するのも、それはそれで恥ずかしいことのように思ったが、そこには目を向けないようにした。

ふと窓の外を確認する。

「あのね、提督」

気がつくと、窓から見える景色は赤みがかっていた。水平線の近くを低く浮かぶ太陽と、日没までの間隙を彩ってくれるカラスの声。夕方のこうした穏やかな空気は好きだった。

金属製の窓枠は夕日の光に色付けられ、その輪郭を明るく輝かせている。川内の顔が赤く見えるのも、きつとそうした現象なのだろう。

「私は提督とずっといたい……です」

相変わらず、川内は私の心臓には配慮してくれないらしい。確実に鼓動を抉った彼女の言葉は、今後ずっと引きずっていくだけの重さがあった。

暑い。エアコンの効きが悪すぎる。もう夏の末端の夕方だというのに、夏の真つ最中の昼頃よりも暑いような気がする。この国の四季もだいぶ狂い始めてきたようだ。

「……………」

今度は思考が纏まっていた。だからといって上手い返答を思いつくわけでもなく、口を噤んだまま彼女の言葉を咀嚼し続ける。

ずっとといたいなんで言葉、どう受け止めるのが正解なのか。思い浮かんだ言葉を都合のいいように繋げていくが、答えにたどり着く気配はなかった。

口を開く。

「そうだな……できることなら、ずっと、誰一人欠けることなく、一緒に……」

完成しかけた台詞を止めた。思考が止まったわけではない。ただ、このまま正解を探さないままにいることに、違和感を抱いただけだった。

彼女が言いたいことと、私が言うべきことは、恐らく今の台詞のようなことではない。

きつと。確信は持てないが、私の予感はあるのだと思う。

「……………」

しばらく無言を貫いた。川内は答えを待つてくれているようで、私が思考の流れを辿るのを許してくれた。その間に正解までの道のりを考えて、なんとか納得のいく答えを引きずり出す。

たどり着いた答えは、まあ及第点というか。

それでも、私が考える通りの答えを示すなら、やはりこちらの方がいいだろう。

「私も、君とはずっと共に日々を過すごしていたい」

ただの同意。誰にでもできる行為だが、川内になら伝わるだろうと確信できた。これが私にできる精一杯の返答なのだ。伝わらないならその時は仕方ない。

「……………同じだね」

「ああ。同じだな」

思った通り川内にとっても悪くない答えだったようだ。彼女の笑顔を確認して、すこし頬が緩むのが分かる。自制しようと表情筋に働きかけたが、感情が表情へ与える強制力は強い。すぐに諦めた。

「こ、こういうのなんて言うんだっけ。以心伝心……………？ 相思相愛だっけ……………？」

「……………さあ。私には分からない」

わりと危うい方向で四字熟語を間違えていく川内に、曖昧に反応を返す。この状況で二つ目の四字熟語に触れる勇氣のある人間などいないだろう。私は悪くない。

話を逸らすことにする。ちょうど都合がいいことに、ひとつだけ伝えておきたいことがあった。

「……秘書艦についてだが」

「うん」

「確実に無いとは思っていたが、仮に君が吹雪の願望を拒絶していたとしても、そこを考慮するつもりはなかった。吹雪に秘書艦の仕事を担わせるのは間違いなかったんだ。君に嫌な思いはさせるだろうが、その上で何かしら対処するつもりだった」

「うん」

「……私は良くも悪くも『提督』でなければならぬから」

川内には今までかなり助かってきたが、川内と吹雪を見比べて、川内の意見のみを優先させるわけにもいかない。それは仕方ないことで、むしろそれが妥当であるとも考えている。

ただそれでも、助けてもらってきた立場の者としては、どこか納得のいかない部分があるもので。

「……そこに負い目なんて感じなくていいよ。提督って、そういう立場だもんね」

慰めるような声に、優しい目。こちらの苦悩や葛藤をすべて理解してくれていような——実際理解してくれているであろうその目は、悔しいが好きだった。この目は今までに何度か向けられたことがあるが、いつまで経っても耐性ができそうにない。

「……どれだけ提督として振る舞おうとしても、結局そこに葛藤しちゃうようなところがあるから、私は提督が——」

息が持たなかったらしく、川内は慌てたように一度言葉を区切った。ひと呼吸置いてから、慎重に言葉を選ぶようにゆつくりと口を開く。

「ええと、だから、提督はかわいいなつて思うんだよね」

笑顔を浮かべながら、彼女が続きの言葉を落とす。窓越しの夕日に照らされた彼女の笑みは、いつもより嬉しそうに見えた。

……しかしまあ、この評価を下される都度思うが、川内の感覚は世間一般よりかけ離れすぎていないだろうか。

「提督はかわいいなあ」

センスの崩壊。普段何を食べていればこんな思考に辿り着くことができるのか……ああいや、私と同じものを食べているのか。劇的センスに食事は関係なかったようだ。

せつかく笑顔は綺麗に保っているのに、残念な感覚を有していることが全くもって残念でならない。

「……ねえ」

本人に失礼なことを考えていると、そうとは知らない川内から声がかかる。

何か尋ねたいことがあるらしい。少しばかりの自信のなさ、それでもある程度は確信を携えた表情。期待通りの答えが得られることは薄々分かっているのかもしれない。

「明日からも、秘書艦じゃない日でも、やることが終わったらここに来てもいいかな……？」

気恥ずかしそうに笑いながら言葉を落とす。

今日はやけにこうした発言が多いように思う。私の心臓だつて、定められた回数分拍動を終えればいつかは止まるのだ。それを理解した上で発言してほしいものだ。答えはするが。

「……構わない。来てくれたら嬉しい」

素直に答える。こんな感情を表に出すことには戸惑いがあったが、今日くらいはいいような気が……この言葉、いつも免罪符的に使ってしまったている気がするが、まあいい。今日くらいはいいのだ。明日からなんとかする。

「嬉しいの？ 私と一緒にいられるから？」

「ああ。一緒にいられるからだ」

「……へへ。提督、最近素直だね？」

だらしない笑みを浮かべつつ、川内がそう尋ねてくる。

痛いところを突いてくる奴だ。元凶のくせして自覚はないらしい。

「さあ。そうかな」

私にできることといえば、素直に答えることはせず、有耶無耶にして逃げることくらいだ。これで素直になる癖が消えてくれればいいが、まあそこは明日からの私がかんとかする。

拍動が収まる気配はなかった。

本音

夕方。にも関わらずそろそろ窓の外の暗がりが目立つ時期。数週間前までは明らかったはずだが、どうも時間の流れは早いようで。蟬の声やエアコンの稼働音などは、本当に実在したのか不安に思うくらいぱったりとなくなってしまうた。

昔は季節の変わり目を喜んで迎え入れていたのだったか。そうした変化をあまり嬉しく思わないようになってしまったと自覚して、なんとなく焦りを覚える。

「これ、お願いします」

なんてどうでもいい思考を巡りながら、両手で丁寧に渡された数枚の紙を確認する。一通り目を通したあと、視線を右隣の者へ移した。

一所懸命の響きが似合う様相で紙面を睨む姿が見える。今さつき書類を手渡してきた者だ。そのわきには、時代遅れにも程がある手書き書類の小山が整然と置かれている。

もうすぐのところまで減ってきたが、あと一時間ほどは費いつかそうな気配があるだろうか。

私は既に仕事を終えてしまっていた。手伝おうか悩んだが、それでは彼女のためにな

らないような気がして、結局その姿を眺めるまでに留めておく。

かける言葉を探しているうちに、いつしか書類を持つ手に力がかかっていた。

快適な気温になった空気に、ペンが紙面を滑る音。この時間帯に聞くことはしばらくなかったそれに、暖かい懐かしさを感じつつも、この状況では躊躇いのようなものも感じてしまっている。

間違いを指摘することにはなんの誤りもないはずだ。そう分かっただけはいても、ひたむきに努力している姿を見てるとどうしようもなく躊躇ってしまう。

「……吹雪」

意を決して声をかけると、相手は作業を中断してこちらを振り向く。何を言われるかはだいたい察してしまっているようで、申し訳なさそうな雰囲気だ。

次の言葉が辛い。明日明後日あたりで久しぶりに胃が痛み出すかな、などと思った。

「この表記に漏れがある。訂正頼む」

「は、はい。すみません……」

紙面の一点を示しつつ、吹雪に書類を返す。

吹雪からの謝罪を受けて、胃が痛み出した。今だったようだ。

最初の方は誰だってこんなものなのだから、謝罪なんてしなくてもいいのだが。申し訳なさのためなのか、必要以上に萎縮してしまっている。

こんな時にかける言葉を知っていたなら、人生楽に過ごせるのだろうか。なんとか捻り出せないものだろうか。

「気にするな。誰だって最初はそんなものだ。私だって最初は彼女と——」

言葉を紡ぐより先に、司令室のドアが激しく開かれる。ノックはなかった。それだけで誰が来たのか想像がつくというか。

視線を超越す。予想通りの人物。私と目が合うと、彼女は言葉を発しようとして口を開いた。

最近の夕方は夜を思わせるほどに暗い。そのためなのか、彼女からはやたらと大きな声が響く。

「やあやあ提督！」

「……最初は、こいつと右往左往したものだ」

強めに開け放たれたドアを心配しつつ、そう零した。

「お疲れ」

「ん、ありがと」

いつも通り川内に湯呑みを差し出したあと、自席につく。そのあと、いつもとは違って吹雪にも同じものを渡す。新しく用意した湯呑みだ。

秘書艦用の席につくわけにもいかない川内は、わざわざ椅子を持ってきてまで私の左隣に座っていた。吹雪とは反対の位置。対面にくれた方が楽に話せていい気はしたが、隣にいてくれること自体に不都合はない。むしろありがたかった。

「吹雪も休め。休憩を挟んだ方が効率がいい」

「……ありがとうございます、司令官」

笑顔。それでもすこし自信がなさそうな表情で、吹雪が礼を述べる。なんと声をかけようか、と考えたが、そつとしておいた方がいいような気もしてきた。

しばらく考えてはみたが、結局私がいくら考えたところで正解を出せるわけがない。とにかく声をかけることくらいはするか。

「……本当に助かっているから、あまり気を落とさないでくれ」

言葉を選んでいるのかは分からないが、これくらいしか思い浮かばなかった。もう少し語彙力と対人能力を養った方がいい。

吹雪は変わらなず笑顔で応えた。他人の機微にそこまで敏感なわけではないので気のせいかもしれないが、少し明るくなったように思う。そのまま湯呑みを傾けてくれたのを確認して、安堵が身を包む。

私も自分の分の茶を飲むことにした。喉を通る熱さは考えを放棄するのに都合がよく、もつと相応しい言葉があったのではないかと巡る思考を、そのまま流し込めるような気がした。

……左隣からの視線。嫌な予感。に似た感覚がしたため、湯呑みを机上に置いてからゆつくりと振り向く。

「……なんだ」

「んー?」

思った通りの表情だった。煽るようなニヤつきを貼り付けて、それを堪えるように目をすこし細めている。

気まずさに視線を外したりもう一度合わせたりしていると、より一層笑顔が濃くなつた。この反応も何となく察してしまっていたが、納得がいかないのでなんとか目を合わせるようにする。

「いやあ、提督がちゃんと提督してるなあって思つて」

「私はいつも提督だ」

「そうだけどき」

いまいち釈然としない言葉だったが、言いたいことは分かつてしまう。

「なんというか……普段の提督、あんまり上官っぽさがないっていうか」

「……そんなつもりはなかったが」

「こんなこと言える時点でそうなんだよね」

「……………」

正論の殴打。何も言えない。

思えば、今まで多方面に威圧感だけは与えてしまっておきながら、たいして上官らしい振る舞いはできていなかったような。

「まあ……ガチガチの上下関係というのものな」

「一応戦時中だし、大事だと思うけど」

「私が苦手なだけだ」

「そんなことだろうと思った」

そう言葉を落として、川内は笑みを浮かべた。何気ないそれに、いつしか私は弱くなってしまったようで、正対して見るには数瞬が限界だった。

彼女は私のことをよく理解してくれている者だ。嬉しいことではある。同時に悔しさのようなものが沸いてもくるが。

それはいいとして、私は威厳と呼ぶべき風格にいまいち欠ける部類の人間なのかもしれない。面倒なのでそんなもの要らないとさえ考えていたが、少しは携えておくべきなのだろうか。

「提督、上官つてよりはさ」

「……友人？」

「ん、そう。友達かなつてくらい距離感になつちやつてるし、本当だつたら遠慮した方がいいところも遠慮できないよねえ」

「少しは遠慮を覚えてほしいところだ」

「ちゃんとした方がいい？ こういうの」

「……まあ、友人ではありたいからそれはそれでいい」

「……へへ。そつか。それならいいけど」

気兼ねなく接することができるのは川内の良い面であると考えている。

今さら変に敬語を使われたり巫山戯ないでいられると、魅力が若干薄れる……というより、つらい。私の心が持たない。それはそれでいい刺激になるかもしれないが、好んでそうされたいとは思えなかった。

私の言葉を聞き終えると、やはり満足げに笑顔を零す。もう一度目を逸らした。

既に答えを知っているはずの問いかけ。川内によく見られる言動だ。その都度私も期待通りの答えを渡してしまうわけだが、まあそこは本音だから仕方ない。

ともかく、やはり上官として振る舞えるに越したことはない。

特に最近自身の感情の表現に歯止めが効かなくなつてしまつている。今はまだ『提

『督』であろうとしているはずだったが、こと川内に関してはどうもタガが外れるようで。「……提督らしくあるためにはどうすればいい。自分で考えるべきだろうが、君の意見も聞いておきたい」

「ん？ いやまあ、普段の提督はちゃんと『提督』ではあると思うよ。上官ばさはないけど、そこは間違いなくて」

ありがたいことに、彼女の目にはまだ『提督』として写っているようだ。私の認識とは違って、彼女にとつての提督と上官はすこし意味が異なるものらしい。

そこをいまいち掴みきれていない私の様子に気付いたのか、彼女は考える素振りを見せる。

「んと、なんというか……上官として相手を気遣つて言葉を選ぼうとしてるところとか、あんまり見ない気がしたつてだけ」

「……ああ、なるほど」

そういうことなら、彼女が私に上官らしきを見い出せない理由は明らかだった。

「それは普段君が相手だからだ。ほとんど気を遣う必要もない」

「……えつ、なんかそこはかとなく悲しいんだけど」

川内の声はどことなく沈みかけていて、落ち込もうにも落ち込みきれないようだ。言葉通りの様子だった。

そのような様子を見てみると申し訳なきが沸くような感覚がしたが、恐らく気のせいだ。

「ま、まあいいや。それだけ距離が近いってことだし……うん」

自分に言い聞かせるように言葉を落とす。言い聞かせるまでもなく事実……だと私は思っているから、そこは安心してほしいところだ。

反応が面白いのでこれに関しては何も伝えない。

やがて自分を納得させたらしく、ため息をひとつ吐いてから、不満そうに私を見据えてくる。

「……まあ、私以外には不器用に気を遣おうとするところとか、提督らしくていいんじゃない？ 知らないけど」

やたら棘のある発言だった。強調された部分は、言うまでもなく私を咎めるための言葉。への字型に曲げた口と合わせて、不満を呈しているようだ。

川内には悪いが、そうした言動は私の心拍数を跳ね上げることにしか役立たない。頬が緩みきらないよう御するのにも、多大な労力を要してしまう。

「提督が慰めようとしているのも本人には届いてるんじゃないかな。ね？」

私の方へ向いてくれない川内は、その代わりに私の右隣の方へ——吹雪の方へと視線を飛ばす。しばらくは川内の気分が戻りそうもないので、私もその視線を追った。

湯呑みを手に、にこやかにこちらを見ていた吹雪は、自分に会話が向けられていると気がついていないようだ。

「……………え？ あ、わ……………私ですか！」

やがて視線と質問が向けられていることに気づいたらしく、慌てた様子で破顔を崩す。

……………言ってしまうと本人に怒られるかもしれないが、吹雪の存在を忘れていた。司令室に川内以外の艦娘が居ることにまだ慣れきっていない。しばらく吹雪そつちのけで二人で話し込んでしまっていたが、それにしても不潔そうな気配はなかった。むしろ楽しそうな雰囲気を感じている。

「えっと、司令官が気遣ってくれてるのは分かります。その……………私が困っていると心配そうに見てくださるので……………」

「わかりやすいよねー、提督の感情」

「……………表情には出ない部分、ちよつとは分かった気がします」

「よかった。毎度思うけど、こういうところ積極的に出していけばいいのに。提督のダメなところだよ、ほんと」

吹雪との会話の合間にちらりとこちらを見て、川内はそう言葉を落としてくる。表情筋で口角を押さえつけた。自身の魅力、そろそろ自覚してほしいのだが。

しかしそこは正論なので何も言えないでいると、吹雪から不思議そうな声が上がった。

「……………？ 川内さん、いつも『そこ含めてかわいい』って言ってますよね……………」
「ちよつ!? い、いや…………それは別というか!」

まったく話に入れない。川内に目を合わせてもらえないのもあるが、そもそもこんな会話に割り込める人間がいるのだろうか。いるというなら、世界は間違っている。

ここは大人しく、ダメーヂを負っててんやわんやしている川内を眺めることにした。

「……………ふふ」

吹雪はこれ以上ないくらいの笑顔で川内を見守っている。少なからず私にもダメーヂが入っているわけだが、そこは考慮してくれないらしい。

駆逐艦とはここまで恐ろしい艦種だったか、と未恐ろしい気分になった。

「……………ふう。あの。私のことはお構いなく。お二人とも話したいことが溜まっていそうです」

川内の反応を一頻り楽しんだらしく、吹雪からそんな言葉がかけられた。

その川内は未だに騒いでいるようだが。混乱して一人で唸っている様子を確認しつつも、吹雪の発言の意図を噛み砕いて分かりやすくすることにした。

どう考えてもそのままの意味でしか受け止められない。

「……君の存在を忘れていた奴が言うのもアレだろうが、それでいいのか」

「お二人の会話で元気になりますから！」

「そうか。まあ……何も言わない」

屈託のない笑顔でそう言われてしまうと受け入れざるを得なかった。元気になれる要素がどこにあるのか甚だ疑問ではあるが、本人がそう感じるのであればいいのかもしれない。

吹雪は仕事に戻るようで、私に笑顔をくれてから手書き書類の小山に向き直った。

執務処理に追われている者の真横でどうでもいいような会話を展開することに、多分の違和感と嫌悪感と罪悪感を覚えてしまうが、恐らく吹雪はその会話を求めているのだろう。

仕方ないと割り切って、なんだかんだで燃え尽きて机に突っ伏している川内に視線を移す。

「……川内？ そろそろ目くらい合わせてくれないか」

できる限り刺激しないよう、控え目に話しかける。

先程は目を合わせてくれなかったが、恐らくたいして怒っているわけではない。ただ、普段より赤くなってしまうている耳を見る限り、今度は別の意味で目を合わせづらそうだった。

「……ん」

数秒経って体を起こした川内は十分落ち着いたようで、顔の赤みさえなければ普段通りの様相をしている。

この様子なら大丈夫だと踏み、目を合わせにいく。と、視線が交錯する前に逸らされてしまった。つい苦笑いを零してしまいつつ、私からは目を逸らさないようにする。

川内は逸らした視線の先で吹雪の姿を見つけたらしい。川内を見続けているため確認はできないが、恐らく書類と睨み合いをしているであろう吹雪に、若干首を傾げた。

「……仕事させていいの？」

「ああ。彼女がそう望んだんだ」

「そっか。ならまあいいのかな」

彼女にも吹雪の行動が理解できないらしく、そのあとに「よくわからないけど」と付け加えた。

私たちの会話を聞く傍らで仕事をしたいななどという願望は理解できないが、まあ受け止めてしまっても問題ないことなので好きにやらせていいと判断した。川内もそのような考えだろう。

——せっかく聞いてくれるなら、自信がつきそうな話題でも出してやるか。

「……しかしまあ、吹雪はよくやってきている。今はまだミスもあるが、すぐに慣れて

くれるだろう」

「へえ。最初のころの私たちよりはよっぽど良さそう?」

「ああ。間違いない」

表記漏れの指摘に落ち込んでしまうような吹雪に少しでも自信をつけてもらおうと意図した話題選びだ。ありがたいことに、その意図に川内は気付いてくれたらしい。視線は未だ吹雪に釘付けだが。

とはいえ、当然ここは嘘を言うべきではない。正当な評価を下すことにする。

「吹雪はすごい。あの頃の私たちには捌ききれなかったであろう仕事を、もう少しで終えてしまえそうなんだ」

「まあ、流石って感じだね。絶対向いてるって思ってた」

「ああ。まだ日が浅い段階でこれだ。私たちなどすぐに追い越されるかもしれない」

「……それはちよつと焦るなあ」

迫り来る才能に危機感を感じたらしく、今まさに書類処理に追われている吹雪の姿をまじまじと見て、そう零した。

吹雪に秘書艦は向いているだろうとずっと思っていたが、既に期待以上の仕事ぶりを見せてくれている。本人は自分のミスに負い目を感じているようだが、正直それらが気にならないくらいの実力だ。

今後彼女の自信がなくなりそうなら、間接的にはなく、直接本人に伝えてみていいかもしれない。

「……………」

川内が唐突に黙り込む。ここでようやく私と目が合った。ぼうつと私の方を見るだけで、特に何を発するわけでもない。

「……………どうした」

「ん、いや。なんでも。私も頑張らないとなつてだけ」

「そうか」

尋ねてみるが、特に何も分からなかった。ただ、何か決意したような強い意志だけは感じる。

どういう心境なのか、その答えを見つけることはできなかったが、言つてしまいたい言葉は見つかった。間違っているかもしれないし、求められてもいないかもしれない。

ただなんとなく伝えてみたほうがいいような気がして、ひとまず言葉にしてみる。

「……………普段の君にも、私はよく助かっている」

「え？　そ、そう？　それなら嬉しいけど」

困惑したような、嬉しいような、がそれぞれ混線した声。

嬉しいのは間違いないようで、突然の褒め言葉に戸惑いつつも、笑顔を浮かべてし

まっっている。

「秘書艦としての働きも助かるが、それとは別に色々ある」

彼女への言葉として間違いではなかったようなので、そのまま突っ切ることにした。

『提督』であるために、自制しなければならぬと分かっている。それでもどうしようもないくらいに情動が沸いてしまう。軽い自己嫌悪に浸りつつも、まあいいかと適当に流す。

「君がいるだけでやる気が沸いてくるんだ」

「……最近の提督、やっぱり変に素直だよね」

「さあ。拗らせるよりはマシだろう。この際全部言ってもいいか」

「……えっ。いや、別にいいけど……熱でもある？」

「ない」

よほど私らしからぬ発言だったようで、病人の謔言ではないかと心配されてしまった。

即座に否定で返したが、不安げな表情は晴れない。割と本心から心配してくれているようだ。

「そういうところもいい点だ」

「……ど、どハハ」

「きちんと寝てくれるのも助かる」

「えつと、そこもなんだ？」

「くだらない話に付き合ってくれられるのも嬉しい」

「……まあ、話すの楽しいし？」

「明日を生きるための糧になっっているのも事実だ」

「……あの、ちよつと褒めすぎじゃないかな」

「そんなことはない。君は生きてくれていてるだけでありがたい」

「や、やめてよ……恥ずかしいって……」

私の言葉につれ、川内は次第に紅潮していく。

川内に褒め殺しが効くのは分かっている。本音を言っていればいいだけであるため、楽な事この上ない。

一気に吐き出してしまったかった。これで川内が自身の魅力を自覚してくれればいいか、などといった思考が巡る。幼少に学んだ歯止めの効かせかたを、この時に限って忘れてしまったようだ。

「それになにより、君はかわ——」

言葉を止める。流れのまま自分が何を口走ろうとしているのか理解して、そのまま固まった。

落としかけた言葉と、紡いでしまった言葉を認識して、後悔と焦りが身を蝕み始める。さすがに自制をしなすぎたかもしれない。思いの丈を曝け出すにしたって、限度はあるもので。

唐突に止んだ言葉の流れに、川内が首を傾げる。最後に落としかけた言葉は、都合の悪いことに聞き逃してくれなかったらしく、紅潮したままの顔を近づけてきた。

詰問する体勢。やけに必死なその形相に、つい身を引いてしまう。

「……かわ？」

「噛んだ。からかい甲斐がある」

「……納得がいかないんだけど。ほんとに噛んだだけ？」

「……ああ」

「目くらい合わせてほしいな」

ジト目。耐えきれずに目を逸らすと、彼女はすぐに追求の手をかけてくる。こうなつてしまえば逃げ場はどこにもないようで、都合のいい方便も持ち合わせていない私は、ただ黙り込むしかない。

ふと、彼女の上がり気味の口もとを確認する。私が言いかけてしまった言葉は、きつと分かっている。追求しているのだと確信した。

「司令官。本日の分、すべて片付きました！」

沈黙が続いてからすこし。もう直接言ってしまうか、などと考え出した頃、吹雪から声がかかる。

振り向くと、嵩張った書類を抱えた吹雪がこちらに笑顔を向けていた。発言内容から察するに、抱えているそれらをすべて終えたらしいが。見ると、机上にあつた書類の小山は綺麗になくなっている。

「……吹雪。もう終わったのか」

「はい！ 司令官のおかげです！」

「私は何も……それより、仕事が早いな」

「頑張りました！ 確認お願いします！」

自信に満ち溢れた声。書類の束を丁寧に渡してくる吹雪の表情には、一切のミスもありえないと確信めいたものが含まれているように思えた。

——蜘蛛の糸とはこのことか。川内の追求を逃れるためにはちようどいい退路だった。

変わらずジト目を向けられていることが視線から分かるが、訂正すべき箇所がないか確認しなければならぬのだ。それに構っている暇などない。

「……問題ない。お疲れ様」

「……よし。よかったあ……」

痛い視線に耐えつつも、数分で確認を終える。彼女の確信は結果に強く結びついていて、たやうで、渡された書類には全く不備がなかった。

……今の彼女なら小一時間程度必要だろうと踏んでいたが。全く問題がなかったのはいいとして、さすがに早すぎないだろうか。

「川内さんのかわいさのおかげです」

「……どういう反応したらいいのか分かんないけど、まあ、ありがと？」

疑問を感じていた私の心情を察したらしく、答えを添えてくれる。

なるほど納得のいく答えだった。川内は困惑しているようだが、私にはよく分かる。

「私、これからもかわいい川内さんとかかわいい司令官のために頑張りますね！」

「……ああ、そうだな。是非川内のために頑張ってくれ」

何故私を並列に扱うのか問い詰めた気持ちはあるが、川内が気力のもとになるというなら、それはいい事だ。所謂『推し』というものの存在は、それだけでひとつの原動力になり得る。

明日の活力になるような存在。私にとってのそれは……まあ、吹雪と同じく川内か。その存在のありがたみは実感している。

吹雪が川内を『かわいい』と評す通り、彼女の言動は私にとつても癒しになる。それを毎日見ることが叶うからこそ、日々を無駄に過ごさずにいられるように思う。

「川内は本当にかわいいから、私も毎日執務に尽くすことができるのかもしれない」
「えっ」

上擦った声。声の出元に振り向くと、驚いているのか嬉しいのか絶妙な表情をした川内が、私の顔をまじまじと見ていた。信じられないものを見たような顔だ。

数秒間そのままの表情で固まったあと、やがて期待を孕んだ目を寄越してくるようになった。静かな双眸には引き込まれるものがある。

「どうした」

「えっいや……って、提督？ いまなんて？」

「聞き取れなかったか。再度言うようなことでもないが、私が毎日執務に尽くせるのは、君がかわいい……から……」

言葉が詰まる。先のセリフを繰り返し言い切るよりも先に、自身の喉を鳴らした響きの重大さに気づき、ようやく失態を認識した。

——どうも、自制して言い逃れたはずの言葉を、流れで言ってしまったようだ。

目の前の川内は何も言ってくれない。ただずっと私を見つめるだけで、目を逸らすこともない。顔の赤みを増していく様子だけが、彼女の心情を知る唯一の手がかりだった。

同時にどうしても受け入れざるを得ない現実を叩きつけられる。覆水は盆に返らな

いらしい。

「……今のは忘れてくれ」

鼓動、身体の熱。それぞれが段階的に大きくなるのを感じ取りつつ、なんとか言葉を捻り出す。

私からの縋る言葉に、双眸の奥が揺らぐのが見えた。私の意志を最大限尊重しようとしてくれているらしいが、彼女自身の意思には反するのだろう。しばらく目を伏せたあと、申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「……ごめん、無理。……たぶん、ずっと忘れないと思う」

「……………」

結局、彼女の思いが打ち勝ったようだ。私にとってその決断は都合の悪いものだったが、困ったように眉尻を下げているのを確認してしまえば、仕方ないと割り切る他なかった。

紅潮したままのそのような表情には、どうしようもなく抗えない。

「……えっと、あの……お願い、なんだけど」

黙するままでいる私を、恐らく肯定の意を示していると受け取ってくれたのだろう。弱った様子でその言葉を落とす。伝えづらい思いを伝えてくれるようだ。

「さっきの言葉……も、もういつか言ってくれないかな、って……」

単語をひとつひとつ拾ってきて繋げたような、弱く訥々とした言葉が紡がれる。

私がお好んで口にする言葉でないと分かっているはずだろうに、それでもここに關しては意思を押し通したいらしい。

「……今度でいいか」

「うん。今はまだ、ゆっくりでいいから……」

無難な返答だけが浮かんだ。私と彼女の考えを見比べて、ここが妥協できる着地点だと考えた。今はここまでだ。

きつかけを明確に与えておきながら曖昧に返すしかない自分に腹立たしさを感じるが、彼女はそんな私にも優しく語りかけてくれる。そんな姿にも、私は拍動を早くしてしまっていた。

「ほんとに、いつでもいいから。その……いつかはちゃんと、流れに任せてとかじゃなくて、提督自身の意思で言ってくれろと嬉しいかなって」

「……ああ。すまない」

「ううん。いつかの約束をしてくれるだけで、ほんとに嬉しいから……ありがと」

震え気味の声と嬉しそうな声色。赤い頬に少し潤んだ瞳。直視できなくなるには十分すぎる刺激に、私は呑み込まれてしまった。

いつしか熱くなっていた自分の頬に手を添え、ゆっくりと吹雪の方へと向き直る。手

を離すと、自身の生きている証がじんわりとした熱で感じられた。

「……………」

「これからも頑張れます！　ありがとうございます、司令官！　かわいいです！」

私と川内との会話がひと段落ついた頃合を見計らったようで、吹雪はちょうどいいタイミングで言葉を挟んでくる。

……………どうも、吹雪は私と川内の会話を糧に生きようとしているらしい。その言葉の節々から滲み出る『ありがとう』の意思に、ため息が零れるのを抑えきれない。

「……………執務も終わったことだ。夕飯、食へに行くか」

川内と吹雪に告げて、真っ先にドアの方へと向かう。赤くなつた顔をこれ以上見られないよう、後を追う二人分の足音には数歩分先に行くことにする。

夕刻は既に暗い。食堂までの冷えた空気に包まれて、この煮えたぎつた顔をどうにかできればいいが。

結んでしまつたいつかの約束を置いて、ひとまず腹を満たすことにした。

補強

「〔補強増設〕 枠の運用つて、受け入れる装備は限られてるわその割に整備に時間がかか
るわで、まあ難しいんですよ……で、むしろ装備を小型化すればいいなんて思っ
ちやつて」

「そうか」

「個々人に装備枠ちよろーつと追加するだけじゃ圧迫するばかりで……最近じゃアクセ
サリー型なんてどうかかって思つて。結局一部装備だけになりそうですけど。さすが
に機銃なんかをアクセサリーつてワケわかんないですし」

「11時を半分ほど過ぎた頃。工場。秘書艦が増えたとはいえ執務に余裕はあるため、
普段あまり話すことのない者と長々と世間話をするくらい暇は持て余していた。世
間話といつても、自身から話題を振るようなことは苦手であるため、聞き手に回るだけ
の楽な作業になるのだが。」

「その中でも彼女の世間話はすこし特殊だった。オイルと金属の臭いで満たされたこ
の空間で、嬉しそうに艦装関連のことを話す少女に、私としては適当に相槌を打つほか
ない。昼前で空腹だろうに高めのテンションで話す彼女についていけず、話の内容は半

分程度忘れてる。

さっさと帰ってしまいたかった。もとより帰るつもりだった。

開発の依頼を手短に済ませ、そのまま司令室へ戻ろうと踵を返したところに『渡した
いものがある』と呼ばび止められてしまったのがまず良くない。

すぐ終わる用事だと伝えられていたはずだったが、待ち受けていたのは10分ほどの
マシンガントークと嬉しそうな表情。

普段こうした話をする相手がいらないのかもしれない。それなら仕方ない……と許容
するつもりでいたが、そのうち夕張の名前に思い当たったため話半分未満で聞く。

「それでですね……」

既に私の関心が薄れ始めているのを察したのか、ようやく本題に移ることにしたよう
だった。

10分の言説の最中ずっと後ろ手に隠し持っていたそれを、私の目の前に掲げる。

……小さい紙袋。見ろ、らしい。受け取って中を覗くと、小型のケースが入っていた。

「件のアクセサリー枠！ 明石特製、応急修理女神力ツコイヤリングです！ まあノン
ホールピアスなんですけど……失いたくないあの娘が危なくなったら妖精さんの力で
完治、装備も補給状況も完璧な状態で戦線に復帰させる便利アイテムですよ！」

「なるほど」

「1粒タイプで運動の邪魔にならない程度の大きさです！ デザインには暇そうだった神通さんの協力もいただきました！」

「そうか、神通が」

暇ではないと思うが。日々の演習や訓練の指導役に加えてたまの出撃と、多忙を極めてもらっている。たいてい昼前後に数時間程度の休憩を与えてはいるため、おそらくそこを捕まえて協力させたのだろう。

ともあれ神通がデザインしたのなら間違いはないような気がする。1粒タイプというのも激しく動く艦娘向けでいい。

ふと気になり尋ねてみたところ、どうも補強増設枠というわけではないようだった。装備枠を圧迫しないのなら付けておいて損はない。

「君の開発もたまには役に立つんだな」

「む、なんですかその言い方！ まるで普段の私が変な開発ばかりして……役に立つてない……みたいない……はは……」

「尻すばみになるな」

目を合わすまいとあらぬ方向を向いて自嘲気味な乾いた笑い声を零すあたり、少しは自覚があつたらしい。

役に立っていないとまでは思っていないが、すこしばかり無駄な開発をしているのは

事実だ。自覚があるならもう少ししっかりしてほしいものだが。

「ま、まあそれはともかく。それは差し上げますが、まだ試製段階なので、性能はともかく着け心地とかは十分なデータが取れてないというか」

明石は露骨に話題を逸らし、追加に情報を落としていく。今度はまともに聞き入れていると、明石の望みはおおかた分かったような気がした。

内容を聞き限り、おそらくこれは私の独断で他の者に渡してしまっていていいものだ。どうも、妥当な評価と改善点を見つけて報告してもらいたいらしい。フィードバックを任されたのだろう。

それにしても、応急修理女神だったか。所謂ダメコン。

「是非、特別な娘に贈ってあげてくださいねー」

彼女が説明しきるより先に、既に渡す相手は決まっていた。

工廠を出てすぐ。入口あたりで立ち止まってひと息つき、なんとなく空を仰ぐ。

乾いた晴天。風が強い。最近では外気が冷たく、すこし外に出ただけでも暖かい室内を恋しく思ってしまう。

これが冬なら分かりやすく助かるものだが、今はまだ秋だ。そこまで寒くはないはずの時期。もう夏の最期は見届けたつもりではあったが、暑さの感覚だけは消えていなかったのかもしれない……にしても寒すぎる。

この立場にあるくせして気候に弱音を吐くなど、年中暑さや寒さに耐えて責務に向き合っている艦娘たちには申し訳ないことだ。情けない。

……とはいえ冷えるのは間違いないもので。

ということ、右手に小ぶりな紙袋を引つ提げ、さつさと暖かい司令室に戻ろうと大きめの一步を踏み出したところだった。

「どうも、提督」

真横からの唐突な声のおかげで、ぬくぬくで素晴らしい司令室への足取りは二歩目で止まることになる。

私の希望への行脚を妨げる者は誰なのか、凜と透き通る声になんとなく予想はつきつつ、一応確認しようと振り返る。

予想通りの人物。良い友人ではあるが、工廠からの帰りには会いたくない者だ。

「また君か」

彼女の微笑を確認すると、自然とこの言葉を放ってしまった。その言葉が似合うくらいの遭遇率だったため、改める気も起きない。

そこはいい。彼女——神通との遭遇で最も厄介なのが、毎度『唐突』が過ぎる点だ。今まで幾度となく話しかけられてきたが、彼女からは毎回一切の気配を感じない。

正直驚く。過剰な反応は見せまいと振る舞ってはいるものの、それも見透かされていそうで怖く感じる。

獲物でも狩っているつもりなのでは。神通なら有り得る。

「……また、とは失礼ではないですか？」

「失礼だったとは認めるが事実だ」

「確かにそうですけど」

特に気にした様子もなく、彼女は微笑を携えたまま淡々と述べる。

工廠帰りに遭遇する艦娘は、今のところそのほとんどが神通だ。どうも行動パターンとスケジュールが都合よく噛み合っているようだ。その都度根気よく驚かせてくれるわけだが。

そう考えると、ある意味無礼講を最も体现してくれている者かもしれない。

一旦切れた会話のタイミングで、彼女の視線が私の右手に移る。提げている紙袋を認識したらしく、すこし双眸を開いてから、彼女は息をするような自然な始動で歩き始めた。

私の横を通り過ぎたあとも、そのまま歩みを止めない。有無を言わず着いてこさせ

るつもりのようだ。数瞬その姿を眺めるだけでいたが、向かっている方向は同じらしいので私も足を動かすことにした。

すぐに追いついた。

「今日は吹雪さんの日でしたね」

「ああ。川内には哨戒に当たつてもらつていた。この時間帯なら既に交代はしているから、もうすぐ帰投するはずだ」

「もうすぐ。そうですか」

私が横に並んだのを認識したらしい彼女の言葉に応えようと、神通は意味ありげな言葉で頷く。目をしっかりと覗かれているのがそれとなく怖く、嫌な予感を感じた。

彼女の意図は知らないが、このタイミングで吹雪のことを尋ねるあたり目的地の察しだけはつく。

「……ちなみに聞いておくが、司令室に向かつていないか」

「吹雪さんの様子を見てみたいと思うのですが、大丈夫でしょうか」

「私は構わない」

「姉さんが帰ってくるまでにしますので」

「……そうか。なんでもいいが」

神通からは穏やかな声色が続く。普段通りの優しい声だったが、今日ばかりはなぜか

余計なことを勘ぐってしまった。

吹雪の様子を見たい、と言っていたか。なにか他に目的を持っているような気がしてならないが。しかし私にそれを確かめる術はない。

仕方ない。無理に考えるのはやめて、この瞬間だけは素直に受け止めることにする。

「……吹雪はよくやってくれている」

「そうですか。それならよかったです」

「ずっと前の私や川内よりもよほどいい。もともと向いていたんだろう。秘書艦を続けるモチベーションも……まあ、あるようだ」

秘書艦として隣にいる時間は半減したわけだが、どの道川内は司令室に向かってくれる。その都度川内と私の会話が発生するのは必然的で、それを吹雪は目敏く糧にしていた。

仕事終わりの吹雪は、どことなく周囲が輝いているような気がしてならない。その状態のときは作業が捗っているあたり、恐らく気のせいではないようだ。何の現象かは全く分からないが、どういう部類の会話でそうなるのかはだいたい把握できてしまった。

……そう考えると吹雪関連のことは思い出したくない。話題を変える。

丁度都合のいいことに、私の右手には提げてあるモノがあった。単純に聞いておきた

かったことでもあるため、喜んで神通に向かつて揭示する。

「話は変わるが、これは君がデザインしたと聞いた」

「ああ、はい。暇でしたから」

「……暇か。君も変わった奴だな」

「暇ですから」

「そうか。それなら納得できる」

決して暇ではないだろうが、彼女の言い分通りに受け取ることにした。どうせ追及したところで『暇だから』で押し通されるに違いない。

そうでなくても、つま先から頭まで冷えるこんな日には追及する気にもなれなかった。司令室への恋慕が強まるばかりだ。

そこからは特に話すこともなく、たまに話しかけられることがあればそれに応えるくらいのこととはしつつ、彼女の隣を並んで歩く。

時間的に昼食を川内ととれるかどうかは微妙かもしれない。せめて夕飯は誘うか。いや向こうから来るか、などと考えている間に司令室の前まで辿り着いていた。

ノブに手をかけ、ドアを開ける。外よりは明らかに暖かい空気がなだれ込んできて、ようやく安心感が身を包んでくれた。およそ人間が存在するに最適な室温。

ドアを開け放ったところに見えたのは、ドアの音に気付きこちらに顔を向けている吹

雪。……と、川内。

「あ、おかえり」

私の椅子に座って机に上半身を預けている川内と目が合い、ドアを開けた体勢のまま
でフリーズしてしまう。神通が室内に入るのを確認したあともしばらくそのまま
いた。

……早い。帰ってくるまでもう少し時間がかかるかと考えていたが、それでもなかつ
たようだ。私が工場で時間を費いすぎただけなのか、時間を見誤っていただけなのかは
分からない。

ともあれ帰ってきてくれていたのなら、昼食を共にすることができるとは。それならま
あ、深いことは考えなくていい気がした。

いつまでも固まったままにいるとさすがに寒いので、そそくさと室内に入りドアを閉
める。

改めて川内に向き直すと、彼女が半身を起こしているところだった。彼女がここに
いるのは予想外だったため、いまいちかける言葉を探せない。

「……帰ってたか。お疲れ」

「ん。提督もおつかれ」

ドアを背に突っ立ったまま、ひとまず伝えておきたかったことを伝える。彼女からは

笑顔を返された。

いつか聞いたところによると、川内にとつては私の労いも無駄ではないようで。口から吐き出すのに簡単な言葉ではあるが、それでも彼女の気力の糧になっているのなら幸いだった。

真正面から見続けるには堪え難く、川内の笑顔から視線を切る。そのまま視線を吹雪の方へ滑らせると、こちらにも笑顔だった。その笑顔の理由を理解してしまつて気恥しいので、これも逸らす他ない。目の行き場がない。

「……提督の笑顔は初めて見ました」

「は？」

私にしか聞こえないような音量に、行き場のなかつた視線はそちらを振り向く。視線の着地点を求めていたのと、彼女の発言に動揺したのにも後押しされ、わりと勢いが乗ってしまった。

動揺の最中にも情景知覚だけは案外冷静なもので、確認できたのは珍しく驚いたような表情の神通だ。

笑顔になどなっているつもりはない。むしろ笑顔なのは川内と吹雪だろう、と喉を飛ばかけた反論を嚙下しつつ、一応手を使って軽く確かめてみる。

……若干口角が上がっている、ような。

.....

無に戻す。

「顔を合わせたただけでこれですか。なるほど」

「.....触れないでくれ」

「.....ふふ」

やはり視線を安心して置ける場所はなかったようだ。神通の表情が笑顔に変わっていくのが分かって、彼女からも目を背けてしまう。

目の置きどころがなく肩身が狭い。ひとまず神通からは逃れたいため、執務机の方へ向かった。川内の前へ。

「.....川内」

机を挟んだ対面で、川内が椅子にふんぞり返って座っている。私が座るべき場所なわけだが、彼女は明け渡してくれないようだ。

「.....」

「.....なに？」

椅子を返せと視線で訴えかけたが、ニコニコと笑みを返すだけで川内は退きそうにな
い。

それならそれでいい。どうせすぐに食堂に向かうことになるのだ。すこし休憩をと

ることにするか。

部屋の端の方に何脚か重ねてあるうちから2人分のパイプ椅子を用意して、机の前に適当に置く。

吹雪の対面か川内の対面かの2択……のつもりが、前者は「ありがとうございます」の言葉とともに既に選ばれてしまっていた。神通は行動が早くて困る。

迷う暇さえ与えられず、川内の対面に座る。もとよりそのつもりだったので不都合はなかったが、煮え切らない感覚を抱いて仕方がなかった。

硬い座面の上に腰を預け、右手に提げていた紙袋は机上に置いておく。川内は不思議そうにそれを見つめ、やがてこちらに目を寄せてきた。

私の心持ち的に、訊かれるにはまだ早い。いつからこうなのか分からないが、川内絡みのこととなると気持ちの準備が必要になってくる。どうにか矯正したい性格だ。

とにかく、今の段階で紙袋について触れられると面倒なので、先手を打って誤魔化すことにした。

「……その、早かったな」

「ん？ なにが？」

「君がもう帰ってきているとは思っていなかった。私としては好都合だから別に構わないが……何か急いでいたのか」

「……あつ、そういうこと」

得心のいったような領き。訊ねていることは理解してくれたようだが、同時に焦ったような声が落とされた。

「えつと……提督、時間帯的に工廠でなんか話し込んでたんでしょ？ 私が早いんじゃないかと提督が遅かったんじゃないかな」

そういうものだろうか。確かに明石に拘束されていた時間は長かったが、それを含めでも早いと感じた。彼女だって、そのことは分かっているはずだ。

思えば、答えるまでの間が妙に長かった。別段気にしてはいなかったが、言い訳を考えていた、と考えると納得はできるかもしれない。

……なるほど。だいたい分かった。気恥しさが沸いて出てくるようなものだったが、それよりもこの後の展開が楽しみでどうでもよくなってくる。

期待値の高い吹雪の様子を確認した。先の川内の発言を受けて、どこか引つかかる部分を見つけたようだ。フィニッシュャーは吹雪らしい。

「……………？ 川内さん、司令官と一緒に昼を食べたいから急いできたって……」

「あーあー！ 言ってない！ 言ってないから！」

「えつ………で、でも、司令官がいないと分かっているから残念そうに机に突っ伏して……」

「ないから！」

吹雪の言葉をかき消すような声量で、川内が声を上げる。必死に否定された吹雪は若干引いていた。

……耐えられない。笑みが零れそうなのを誤魔化すために咳き込むと、川内からは弱々しく睨まれる。

「……な、ないから！」

「分かった。そういうことにしておこう」

表情筋に負荷がかかる。完全に抑え込むのは厳しいため、頬が若干痙攣気味になってしまった。

そんな私の様子を見て、笑みを堪えているのを理解したらしい。悔しそうな呻きを漏らすのが分かった。

「……じ、神通ちゃんは、さつきぶりだね」

「ええ」

誤魔化すように、彼女は神通に視線を移した。唐突に振られた話題にも関わらず、神通は絶えない笑顔で応える。

姉の可哀想な姿を見て喜んでいるらしい。姉妹艦としてそれはどうかと思つたが、よく考えてみれば私が言えたことではなかったので黙認する。

さて。本当ならこのまま川内への追及を緩めないでおきたいところではある。が、ど

うしても気になってしまふ発言があつた。

「……さつきごぶり?」

川内に言葉を投げる。この発言を見過ごすわけにはいかなかった。

「そ、そう! えつと、さつき工廠前で会つたんだよね。ね!」

「……そうだったかしら?」

「えつ……あ、会つたよね?」

神通の裏切りに本気で焦っているらしい川内の様子を見る限り、工廠前で会つたというのは嘘ではなさそうだ。

神通が私に話しかけてきたのは工廠前。その前にはもう川内の帰投を確認していたよう。……そういえば、デザインは神通、だったか。

吹雪の様子を見たいと聞いたときに他に意図があるのではないかと勘繰っていたが、やはりただの口実だったようだ。今になって初めて彼女の明確な目的を悟ってしまった。急激に悪寒が走る。

神通に裏切られて目を泳がせている川内をよそに、神通の様子を確認する。ちやうどこちらを見たところだったようで、はつきりと目が合ってしまった。

「神通」

「はい」

「君は怖いな」

「……さあ？ なんのことでしょう……？」

悟られていると分かつているだろうに、シラを切るつもりでいるらしい。余裕そうな微笑みは、こんなときに私が何も言えないような性格であることを理解しているようだった。

今日の彼女にはいつにも増して勝てる気がしない。素直に彼女の望み通り動くことにする。

「……まあ、聞かれたら渡すことにするから」

「ふふ、そうですか」

川内のことだ。渡せばきつと喜んでくれる。神通はその様子を見ていただけ……なのかは定かではないが、少なくとも良い予感がすることは決してないわけで。

吹雪は仕方ないにしろ、神通には見られたくない。煽られる未来は目に見えている。

それだけは避けたい。なんとか回避できるよう尽力しなければならない。

「川内」

焦りを落ち着けたようで大人しくなった川内に声をかける。会話の傍らで縮こまっていたかっつらしい川内は、恐る恐るといったふうに目を合わせてきた。

落ち着いているところ悪いが、彼女には焦りをぶり返してもらおうことにする。

「……な、なに」

「私と共に昼食をとりたいたんだったか」

「う、っ」

絶命の音。命を刈り取るには十分すぎる言葉だったようで、川内の表情は苦い顔のまま固まってしまった。

「待つていてくれたようですまない」

「……こういうのバレたくないんだって。あー……恥ずかしいなあもう……」

両手で顔を隠した川内がため息を零す。

落ち込んでいる彼女の姿を見ていると心が痛むような踊るような心地がするが、どの道好都合だった。しばらく彼女がこの調子でいてくれるなら、神通の目の前で聞かれることもないかもしれない。

彼女の性格からして、1度轟沈してしまえばヤケクソにならない限りは触れてこないだろうから。

「……そういえば、それ。工廠で渡されたんだらうけど……なに？」

ヤケクソらしかった。

投げやりな表情を晒して訊かれてしまい、手段を誤ったかと後悔する。『聞かれたら渡す』と言ってしまった手前、この流れで話さないわけにもいかなかった。

隣から視線を感じたためチラと見る。予想通りの微笑が見えて、つい嘆息してしまつた。

——神通。恐ろしい艦娘だ。

「……昼食後なら話しやすかつたが」

意味をなさないぼやきを吐きながら、紙袋から小型のケースを取り出し、彼女の前に置く。開けていいのか目で尋ねてきたので、首肯を以て返した。

川内がケースを開くと、中には1粒タイプのノンホールピアスがひとつ。小さな青色のそれに比べるとケースがすこし大きすぎるように見える。

一目見て、川内に似合うだろうと確信した。

「明石から新しいタイプの装備を提案された。これはその前駆体とでも思ってくれ。直接見るのは初めてだが……まあ、悪くはないんじゃないだろうか」

「……デザインけっこういいね」

「……まあ、そうだな」

落ち着いた深い青と、あまり目立たないくらいのサイズ感。

どこかのデザイン担当艦は、最初から川内を想定して設計したようだった。

そう考えると余計にやるせなさが高ぶる。

「そこはべつにいい。これは君に譲ろうと思う」

「へ？ 私？」

「君だ」

自身に与えられるとは思っていなかったようで、川内は驚いた声を上げる。ここまで見せておいて川内以外に譲るわけがないのだが、いまいち理解できていないようだ。

……頼むから理由だけは聞かないでほしい。

「普段から付ける必要はないが、出撃の際は必ず身に付けてくれ。これはそうすることで真価を発揮できるものだ」

「……………うん。分かったけど……………」

いまいち腑に落ちないような表情。次に理由を訊かれることは予測できた。

「なんで私に？」

単純な疑問を投げかけられる。なるべく避けておきたかったのだが、何故こんなときに限って察しが悪いのか。

とにかく言い逃れはできない。どうせならありのまま伝えることにする。

「特別な者に贈ればいいと言われた。だから、君に。貰い物の流用で悪いが、受け取ってくれ」

「……………」

目を逸らしつつ言葉を落とした。言葉にする過程でふるいにかけてなかった原液の言

葉。そろそろ歯止めの効かせ方を学び直さなければならぬ。

心中が穏やかさを保つてくれないまま、反応を待つ。痛いばかりの無言が続くのみで、彼女は何も反応を返してくれなかった。

——すこし視線を戻した。赤くなつた耳が見えて、もう一度目を逸らした。

「そ、その。提督」

「なんだ」

「これを私にくれるってことはさ」

不安そうな声。なにか尋ねるつもりらしい。

彼女の問いは分かっている。こうした、吹雪や神通が喜びそうな状況においては、自身で答えを出してしまっている問いを再確認のために私に尋ねてくる。

川内はそういう奴だと知っている。

「いや、ちよつともう分かつてるんだけどさ。確認したくて。その……私のこと、特別だつて思つてくれてる……つてことでいいんだよね？」

「……ああ。そうだ。真つ先に思い浮かんだのが君だつた」

「そ、そつか。そつかそつか」

私の答えを確認すると不安そうな声色は一転し、途端に声のトーンが上がつた。見ると、嬉しいのであろう感情が、表情にまで滲み出ている。川内は本当に分かりやすい。

——求められるがままの答えを与えてしまうあたり、私も相当分かりやすい人間なのかもしれないが。

「へへ……」

やがて彼女が浮かべたのは、だらしない破顔。息が詰まる。まともに見ていられないほど苦しいものだったが、視線を切ることはできなかつた。大切にしたいとさえ思えた。

よく分からないが、私は彼女のこの笑みが嫌いではないのだろう。口角の上がる感覚がするあたり、おそらくそれは間違いない。

一通り喜びを噛み締めたらしく、川内はそれなりの破顔を維持したまま口を開く。

「これ、大事にするね」

「……ああ」

「できる限り壊さないようにするよ」

「そうしてくれ。壊れる時が来ないことを祈る」

渡した物をケースごと両手で包み込んだ川内は、嬉しそうにこちらに話しかけてくれる。その様子を見ているだけで生きるための活力が湧いてくるような心地がして、表情の制限がより一層難しくなった。

……廃棄以外で応急修理女神を紛失するときがあるとするれば、それは装備している艦

が轟沈するときのみだ。ダメコンの消費で完全に復活するとはいえ、艦娘には沈みかける体験などしてほしくはない。

なんとなく目をやると、暖かい目でこちらを見る者が二人。

『これが見たかった』などと言わんばかりの表情に、どうしようもないやるせなさが募っていく。

「……なんだ、その目は」

「いえ、別に。ねえ？ 吹雪さん」

「はい。別になんでも」

二人が顔を見合わせて微笑み合う。

……そんなに仲が良かっただろうか。通じ合う部分を見つけたのかもしれない。是非やめてほしい。

無意識にため息が零れる。

最近はため息が多い。意地でも嘆息はしないでおこうと決めていたが、この状況に限っては仕方のないことだった。

……ため息ついだ。

「……もう昼だ。先に食堂に行ってくれ。私は少し遅れて行く」

ヤケクソ気味に言葉を落とす。腕時計を見ると12時を数分後に控える頃だった。

このままこの4人で昼食をとることになりそうだが、私にはすこしやるべきことがある。今すぐに終えなければならぬことでもなかったが、忘れないうちに終えておきたかった。

都合のいい逃げ場として使ったとか、そういうわけではない。

まだ楽しんでいたかつたらしい彼女たちからは恨みがましい目を向けられたが、一応私の言葉に従ってくれるらしく、吹雪と神通が席を立った。そのまま有無を言わさないよう視線で刺して、二人分の姿が司令室を出ていくのを見届ける。

……………。

「……………それで？」

「んー？」

「君は行かないのか」

「まあまあ、いいじゃん」

未だに嬉しさが残るらしく、川内は笑顔のまま言葉を落とす。澁々食堂に向かつてくれた彼女たちとは違って席すら立たず、私の椅子に座ったまま。

……………まあ川内なら残るのは別に構わないわけだが、せめてその場所は明け渡してほしいところだった。

「どいてくれないか」

「えー」

「……退いてくれるまでずっとこのままだぞ」

「べつにいいよ。提督がいれば暇ではないだろうし」

「そうか。私は困る」

「じゃあ退くけど」

「……そこはそうなのか」

「さすがにね」

よく分からない基準だ。巫山戯てくれるならもつと巫山戯てくれていいのだが、妙なところで線引きをしてくる。

ともかく、ピアスのケースを紙袋に入れ直した川内は、そのまま私の椅子から秘書艦用の椅子に移動してくれたので、私もありがたく移動させてもらう。

慣れ親しんだ椅子に座り直し、机に向かう。机の上に置かれた書類の山のうちからいくつかを引っ張り出して、ファイルにまとめていく。

数分ほどで粗方の作業を終えると、今まで静かにしてくれていた川内がこちらに声を寄越した。

「……何してたの？」

「明日と明後日は本部に向かわなければならぬから、忘れないうちにその準備を」

「えっ」

驚いたような声。何かあったのかと振り向くと、目を丸くしてこちらを見ていた。どうも私の言動に引つかかる部分があったらしい。

少し考えたが、そのような顔をされる理由が見当たらない。考えても仕方ないので直接聞くことにする。

「どうした」

「……あの、聞いてないんだけど」

「……………そんなはずは」

聞いていない、というのは私の明日明後日の予定のことだろう。川内に対してそんな重要なことを伝えていないわけがないが、何かの間違いではないだろうか。とにかく一応考えてみることにした。

記憶を辿る。数日前にまで遡ったところで、鎮守府全体に対して放送を入れていたことを思い出した。

「全体放送で伝えていたつもりだったが」

「あー……………たぶんたまたま哨戒が被ってたかな」

「それにしても秘書艦には直接伝えて——」

そこまで言葉を落としたところで、違和感を覚えた。

その原因を探るため、更に記憶を辿る。こちらも数日前まで遡ったところで、吹雪に對して直接連絡していたことを思い出した。

……吹雪。なるほど。

どうやら、『秘書艦には伝えた』という事実には安心してしまっていたよう。

「すまない。吹雪にだけ伝えて、君に伝えるのは忘れていた」

「……まあ、いいけど」

眩くような小さな声量で、川内が言葉を紡ぐ。その内容とは裏腹に、明らかに良くない声色だった。

申し訳ない。ただ、私としても、さすがに彼女に情報が入っていないとは思わなかったわけ。

「……で、なんの用なの？」

「上官に呼ばれた。私も丁度……まあ、色々と用があつたから喜んで向かうことにした」
「……ふーん」

不満そうな声。用事を具体的に打ち明けないことに蟠りを感じているらしい。

特に隠す必要はないのだが、あまり言いたくない部類の用事だった。そこに關しては、なんとか察して追及を諦めて欲しいが。

……とはいえ、それでは納得しなさそうなので、一つだけ情報を落とすことにする。

「上官からの呼び出しは大規模作戦関連だ」

私の言葉に、明らかに目の色が変わるのが分かった。不満そうな表情から、いつもとは違う真剣な顔に変わっていく。

「……難しそう？」

「さあ。私は初心者だから、任されるにしてもそこまで厳しい作戦には駆り出されなさそうだ」

「そっか」

川内を含め、この鎮守府には練度の高い者が多い。私の着任前までは、前任の指揮の元高難度な作戦に参加していたようだ。

そんな彼女達だが、私の能力を鑑みる限り、今度の大規模作戦ではあまり大きな活躍ができないのかもしれない。

私の能力のレベルに合わせてしまっせいで、本来彼女たちが得ることができた戦果が損なわれることに申し訳なさを感じる。

「……今回、君たちにとってはやりがいがないかもしれないが、仕方ないと割り切つてくれ」

「……別にいいんじゃないかな。まだ練度の低い艦でも活躍できるってことでしょ」

「まあ、それはそうだが」

確かに、高練度艦が参加するような作戦には赴けない者に新しく活躍の場を与えることが出来るなら、それはそれでいいことなのかもしれない。それは分かる。

ただ、どうしても納得はいかないもので。

「提督」

自身の意見を言い淀んでいると、そんな様子に何か察したらしかった。私を呼ぶ声とともに、優しい笑みを浮かべられる。何度か向けられたことのある目だった。

……喉につつかえている言葉があるのだと悟られているようだ。自然とそれが言葉になるように、穏やかに促してくれる。

ため息。神通といいこの表情といい、私には勝てないものが多すぎる。

「……その」

「うん」

「今から拙い言葉を使うが、なんとなくで聞き流してくれ」

「わかった」

逆らえないなら逆らえないで割り切つて、彼女の促すまま吐き出すことにした。

言葉をまとめる余裕もないが、そのまま吐露するだけでも彼女は拾ってくれるはずだ。

「……君に追いつきたい」

「……………私に？」

私の言葉は意外だったようで、川内はすこし眉を寄せる。言葉の意味を考えているらしく、徐々に難しい顔に変化していくのが分かる。

……………考えるもなにも、そのままの意味なのだが。

「追いつきたいのはべつに君だけというわけでもないが、一番理想的なのが、川内の隣なんだ」

いつからからは分からないが、私の中で彼女の存在はかなり大きいものになっていたようだった。それはもうずっと前から自覚できていたが、できる限り彼女の隣にいられたらそれでいい、などと思うようになるとは今まで考えてもいなかった。

当の彼女は、そうした私の想いごと無言で聞き入れている。考えるようなものではないと理解したらしい。

「私はまだ、君と同じレベルで歩けているとは思えない」

「……………」

「だから、できるだけ早く君の隣に並びたい。そのためにできることを最大限尽くすつもりだ」

一息で言い切って、中途半端に締める。言いたいことはそれだけだった。いぎ言葉にしてみると思っているよりは軽く、言い淀むようなことでもなかったように思う。

私の言葉が止んだのを確認したらしい。すべて聞き入れてくれた彼女は困ったように苦笑いをし、言葉を選び始めた。

「べつに追いつかれる側だなんて思ってたんだけどね。そこまで言うなら、まあ……そうだね」

なにか考える素振りを見せていた彼女は、そこで一旦言葉を切り、私の目を覗くようにして見据えてくる。

彼女の瞳の中に意志を感じるだとか、そんなことは決してなかったが、なんとなく彼女が言わんとすることが理解できた。そうしなくても性格から分かっていたものだったが、より強い確信めいたものになる。

「……言いたいこと、分かる？」

「ああ。君の答えなら、聞くまでもない」

「……へへ。そうだよ。聞くまでもなかったよ」

正解の言葉を出すことはなかったが、きつと互いに理解できているのだろう。それを確信しているらしい彼女は頬を緩め、私に笑顔を投げかけてくる。

毎度のことながら、川内のそれは真正面から受け止めることができない。視線を彼女の姿に留めることはできなかつたが、視界の端の方にだけはおさめておいた。

——正気の沙汰ではないが、川内は私が追いつくまでずっと待ってくれるようだ。

彼女らしい答えではある。というより正直なところ、それ以外の答えを用意してくるとは思えなかった。

「君はいちいち待ってってくれるような奴だからな。今だって、僚艦や姉と食堂に向かわずに一緒にいてくれている」

言葉を重ねる度に、だんだんと言葉の枷が消えていく感覚がする。

後で後悔するのもかもしれないが、しばらくは無責任な言葉に任せることにした。続く言葉も躊躇わない。目を合わせる。

「だから特別なんだ。……贈る相手は君しかないと思った」

「……そ。まあそれも、言われなくても知ってたけど」

「そうか。それならいいが……顔が赤いぞ」

「……う、うるさい」

私の気恥ずかしい台詞に、彼女の方が耐えられなかったようだった。紅潮を指摘すると、赤くなった顔を見られないよう顔を背けられてしまう。

ちやうど頬が緩み始めた頃だったため、こちらを見てくれないのならむしろ都合だった。

「……ありがとう。ひとまず準備は終わっている。そろそろ行こう」

「ん、おっけ」

緩んだ表情を制限できるようになってから、彼女に声をかけた。その頃には彼女の紅潮もおさまっており、きちんとこちらに顔を向けてくれた。

時刻は12時を10分弱過ぎた頃。神通たちが待つてくれているかは分からないが、とにかくなるべく早く向かわなければならぬ。

席を立ち、食堂に向かうべくドアへと歩く。

「あ、そうそう」

先行していた川内がドアノブに手をかけたところで振り返り、笑みを落とす。だらしのないものでも苦笑いでもなく、自信に溢れた彼女らしい笑み。

「私も提督のこと、そっちが想像してる以上に特別だと思ってるから。そこんどこ、けっこう大事だから」

自信満々な笑みのまま、彼女は恥ずかしげもなく言つてのけた。自身が言われるのは苦手なくせして、人に言うのは大丈夫らしい。

毎度、よく分からない部分で羞恥心を発揮してくれない。ここに来てからずっと隣にいるが、未だにいまいち掴めない感性だ。

私は伝えるのも伝えられるのも苦手な人間だった。体温が上昇するのを鼓動の速さで感じ取りつつ、彼女の雰囲気が一変するのを確認した。

川内はいつになく真剣な顔になって、私の目を見据えてくる。

「……だから、ちゃんと覚えててね」

向けられた真剣な表情には、私からも正しく向き合うべきだ。

この状況で彼女に返す言葉があるとすれば、これ以上のものはない。

「言われなくても、知ってる」

彼女の落とした照れくさそうな微笑みを忘れないよう、切り取った記憶を脳裏に焼き付けて、司令室を後にした。

綻び

夕刻。寒い。

二日ぶりに拝むことになった庁舎の入口前で固まりつつ、それだけを偏に感じた。風を止ますことなく私の身を包む素っ気ない気温は、息が凍るほどではないにしろ体を冷やすには十分すぎる。

どうやら私は世間に疎いようで一切気が付いていなかったが、今年の四季はそれらしい秋の兆しを見せないまま冬に迫っているらしい。くそつたれな晴曇半ばの寒空を睨むも、その気力すらすぐに萎えた。

上官のもとに赴いてから二日後。昨日の時点でひとまず先方とこちらの用事は片付いていたため、今朝は誰にも急かさされることもなく穏やかに過ごすだけの時間が用意されていた。

そんな時間に浸る気分でもなかったため急いだが、わざわざ送ってくれるらしい車に乗り込み、車窓の景色を眺めるだけの幾時間かを過ごしていると、夕刻頃には鎮守府に着いていた。演習を終えた駆逐艦の声が聞こえる頃合い。

当然、車内には暖房が付いていた。最適な環境では思考が捗るもので、帰ってからの自身の立ち回りや暫くの運用方針など、十分な潜考を求めることができる。これが外に出てみるとどうだ。

寒い。

以上。

今の私は庁舎の前でぼけつと佇んでいるだけで、深く考えることもできていない。

寒さは悪しき環境である。最近の季節はどうしてこうも丁度いい気温というものを残していかないのか。気候の齎す理不尽さへの怒りよりも先に「寒い」が脳内を占めてくれるのは、深く考えてストレスを溜めないようにできる唯一の救いなのかもしれない。

とにかく、一刻も早くこの地獄から逃れなければならなかった。私の脳が勅令を以て訴えかけることには、少なくとも外よりは暖かい室内へ向かうべきだ。

眉間に力がかかっているのを自覚しつつも、司令室を目指しゆっくりと歩く。

つもりで足を動かしかけたところ、後ろから肩を叩かれる感覚に引き止められた。人の接近に気がつかなかったのもきつと寒さのせいだ。

なんとなく、背後の人物には心当たりがあった。ただの勘や予見……にしては期待に近すぎる感覚を抱きつつ振り向くと、見慣れた顔が出迎えてくれる。

期待通りか、と聞かれると、そこは頷くほかない。
「やあやあ」

振り返った先の川内は、こちらと目が合ったのを確認してから言葉を落とした。その表情は柔らかい。信頼と友好の気色が強い目が印象に深く、ある程度心を許してくれているのがひと目に分かった。

思っていたより顔が近かったため、後ずさり少しだけ身を引く。相変わらず上官との適切な距離感を知らないようで、彼女らしい。

「今帰ったの？」

私が身を引いた分の距離を詰めながら彼女が訊ねる。機嫌が良さそうな声色。

距離感の相違は諦めた方がいいと悟り、なけなしの思考を、彼女へ返す言葉探しに切り替えた。須臾の浅慮を経て、寒さのおかげでまともな考えを手繰れないことを思い出したため、適当に返すことにする。

もとより普段から言葉を選ぶ相手でもない。そういえば、適当に言葉を投げて適当に言葉を返されるような気楽な関係だった。

「帰ってきたところだ。……奇遇だな」

「うん。たまたま見かけて。ぼーっと立ってたけど、何してたの？」

「特に何も」

それとなく嘘を吐いて誤魔化する。

最近は感情に衣着せぬ刹那的な生き方をしていたが、提督としての体裁のようなものは保ちたいもので。

寒さに弱い人間などと軟弱な印象を持たれるのは避けたいため、『寒くて固まる』をしていたとは言えない。だからと言って適当な弁明が思い浮かぶわけでもない。寒いから。

故の『何もしていない』との返答だったが、特に何もせず庁舎の前で突っ立っている上官というのもそれはそれで気味が悪いのかもしれない。誤魔化せているようだからそれは別にいい。

彼女の両手には大きめのレジ袋がいくつも提げられていた。不透明な袋だったため中はあまり見えなかったが、見たところ艦娘故に持てるほどの重量のように思う。

察するに、ちようど買い物から帰ってきたところらしい。わざわざ出迎えてくれたわけではないだろう。

「……それで、その。提督」

特に話すこともないまま暫く無言で見つめあっていると、微妙な間をもって言葉を投げかけられる。

顔だけをすこし前傾させ俯き、川内は自信なさげにこちらの様子を探っていた。彼女

はその行為に特別意味を与えていなかったのだろうが、こちらとしては上目遣い気味のそれに晒されるせいでもかなり気を張る。

「……言いたいこと分かる？　べつに大したことじゃないんだけどさ」

分かれば苦労しない。目で促す。

私から応えが得られるとは元より思っていなかったらしく諦めが早かった川内は、照れくさそうに一度目を伏せたあと、すぐに視線を戻して口を開いた。

——そこまで勿体ぶっておいて、得られたものはこれといった特別なものではない。

彼女の口から飛び出たのは、言うに難しいことでもなんでもなく、ただの挨拶だった。

「えっと、おかえり。提督」

「……………」

「……提督？」

「いや。なんでもない。ただいま」

ただの挨拶に、ただの挨拶を素っ気なく返す。

……だけのはずだったが、内心まったく穏やかでいられない。どこか気恥しさのようなものを感じ、つい言葉に詰まってしまった。

なるほど彼女が躊躇うのも分かる。

彼女に向けた『ただいま』の言葉。

日常的な言葉の範疇に納まっているはずが、それにしては重かった。川内に向けての言葉だと考えると心に残るものがないわけでもないような、むしろ余すところなく残ってきた気さえする。

そんな遺物が霞むほどに、彼女からの『おかえり』の方が衝撃が強かったが。

一過した余韻に酔いながら推察する限り、彼女としても言葉にしづらいものだったらしい。今更になって気恥ずかしげに薄らにはかむ川内の様子は、過ぎ去った衝撃を増幅した上で旧に復してしまった。

見ていられない。クラクラと脳が揺れる音がする。

大したことではない。ただ、寒さのせいで働かないこの頭では、今の情感を自分で認めるのに些か向いていなかっただけで。

大人しく彼女の瞳から逃れ、その右手に提げられたレジ袋を注視する。

「……それは？」

「これ？ えと、間宮さんに買い出し頼まれてさ。ありがたく頼まれたよ」

「なるほど」

今日は川内が秘書艦の日だ。午後からの訓練は入れていない。机の前での仕事は午前のうちに終えただろうから、午後は暇だったはずだ。

大方、鳳翔あたりに料理を学びにいったところに買い出しを頼まれたとか、そんな

ところだろう。

「しばらく補充の必要はないと間宮から聞いていたが」

「二日前でしょ？」

「ああ」

「まあそういうことだよねえ」

「そうか、そういうことか」

私の不在中に漏れなく減つたらしい。最近では食費が嵩まず助かる……と、二日前までは思っていたはずだったが。

彼女の手につげられた袋たちには、この鎮守府の規模ならば保ちそうな重量感。……早めに手配しておいた方がいいだろう。

まあ、燃費は悪いがその分の仕事をしてくれるから責めるつもりはない。注意はするが。

などと、誰が何をしたのかはなんとなく分かりつつ、せめて半分くらいは持つことにした。

いつまでもこうして建物前で駄弁っているわけにもいくまい。それに寒い。彼女の手からいくつかレジ袋を奪い取って、庁舎の玄関へと向かう。両の手が重い。

少し遅れて着いてきた川内からは「べつにいいのに」などと聞こえてきた。左隣から

のそれは軽く無視する。

彼女としても無視されることは分かりきっていたようで、すぐに話題を変えてくれた。

「そういえば、あとで司令室行つて提督が帰つてくるの待とうと思つてただけど」

「そうか」

「その前に会えてよかつたよ。早く提督と話したくてさー」

「……………」

相も変わらず、この艦娘はそんなことを恥ずかしげもなくサラツと言つてのける。ただの挨拶は恥じらうくせして、どうしてもここで恥じらいを持つてくれないのか、未だ理解に苦しむ部分だった。

彼女のこれには流石に慣れたが、慣れたからといって破壊力がないわけではない。ジャブ程度の微々たるダメージを確実に食らわされる。

「……司令室戻らないの?」

何も返すことができないまま無言で歩みを進め、建物に入つてすぐの廊下で食堂の方面へと向かい始めると、彼女から声がかかった。

どうもこのまま食堂に向かうつもりはなかったらしく、若干白けたような声色だ。萎んだ語勢を振る舞うわりに、左隣に着いてきてはくれている。

司令室は真逆の方向だった。

「先に食堂に行った方がいいんじゃないのか」

「……まあ、そうだけど」

正論の殴打では納得してくれないらしい。白けた声のトーンはそのまま、つまらなさそうに言葉を吐き捨てる。

理由が全く分からない妙な態度に疑義の念を抱き、目だけで彼女の様子を窺うと、しつかり目が合った。ずっとこちらに視線を投げていたようだ。ジト目気味のそれが突き刺さる。

そのまま視線を送り続けていると、私を見据えるだけで続かせる言葉は見据えていなかったらしい川内は「あー」だの「えっと」だのと声を漏らす。

意味をなさない発話に、都合のいい後付けの理由を探しているのが目に見えて分かった。

もつとさり気なさを装うだとかがあってもいい気はするが、とにかくなんとなくでも司令室に向かいたいようで。

「その、ほら。寒いから、ちよつとだけ。ね」

「寒いなら尚更さつさと食堂に向かった方がいいだろう」

「いやー、司令室あったかいしさ」

「食堂の方が暖かいが」

「あーもう、いいじゃん別に。ちよつと立ち話しよう？」

下手に理由を考えるだけ無駄だと察したのだろう。

川内はこちらの袖を引つ掴み、無理やり私の歩みを止めさせた。

両手のレジ袋が重い。早く食堂に辿り着きたかったが、仕方ないか。

「司令室ですらないがいいのか」

「いいのいいの。ちよつと話すだけだから」

「……まあなんでもいい」

「それにほら、建物内なら別に寒くないしさ」

寒いが。

まあとにかく、こう直接求められてしまえば応える他ない。話には付き合うことにする。

桑実胚程度の取るに足らない話題がどちらからともなく浮かび、何度か言葉の応報を繰り返し、そのうちふわつと消えてなくなるような会話。

特に何も考えず退廃的な瞬間だけを享受する、彼女とのそうした宙ぶらりんな楽しみを、私だって求めていないわけではなかった。

「川内」

「ん、なに?」

彼女との対話に応じる素振りを見せると、声の調子が急転した。不満げな目も和らいだのが分かる。明らかに機嫌はよさそうだ。

……対応に困る。

彼女の一連の言動を見る限り、少なくとも私のことを悪くは思っていないのだろう。今まで十二分に知らされてきた情報だったが、改めて明確な態度として示されるとなるとも言えないものがある。

辛いような、そうでないような。形容せしめ難いこの感情とは、今後も付き添っていくことになるのだろうか。

苦笑が込み上げかけたのをなんとか抑え、適当に話題を振ることにした。

「この頃は冷えるな」

「だね。今日は特に寒くて困るというか」

「……寒くないのか、その制服」

「そりやどちらかと言えば寒いけどさ。秋服みたいなもんだし、まだいけるかなって」

「秋服感覚なのか、それ」

「まあ、うん」

にしては薄着すぎる。

ノースリーブの時点で秋服とはかけ離れた要素になつてゐる気がするが、マフラーで相殺されるとでも思つてゐるのだろうか。見るからに耐寒にそぐわない風体だ。

まあ、本人が秋服だと主張するのならそれでいいか。

このまま会話を続けるのは構わないが、それにしても突つ立つたままなのは億劫だ。

廊下の壁に寄りかかり、背中を預ける。両手に持つていたレジ袋もゆつくりと壁にもたれかからせ手を離し、その重みから開放された。

右隣で川内も同じようにするのを見届けてから、頭に浮かんだ言葉の羅列をそのまま言い放つ。

「今年、秋つてあつたか」

「今が秋だけど」

「……そうか、これが秋か」

この世界は死んでゐるらしい。この先には今以上に冷酷な季節が待ち受けてゐるようにならぬ。絶望まみれの未来を今から確信せねばならない辛さたるや。他の誰にも理解できないだろうし、させるつもりもない。

川内で暖でもとれないだろうか。機関部の熱を分けてほしい。マフラーを貸してほしい。

余計な思索に耽つてゐる私には全く気がついていないようで、川内は穏やかな表情を

こちらへ向けている。

完全に心が弛たゆんでいるのが理解できて申しわけなきが沸き出す。にしても暖をとらせてほしい。

「なんかさ」

「ん」

「提督と二人で話すの久しぶりな気がしてきた」

「それでもないだろう」

「いやまあそうなんだけど」

私が此処を空けていたのは二日だけの話だ。その期間ぶんの会話がなかっただけで『久しぶり』といえるのかは分からない。おそらく世間一般にはいえないのだろう。

とはいえ、私としても川内との会話が久方ぶりのものに思えてならなかったが。

「気持ちには分かる」とだけ返して、彼女に寄せていた視線を正面に移す。目の前には対面の壁が見えるだけで、特にこれといって面白くない視界が広がっている。

これから先の言葉は、淡白で無愛想な視界でないと外に出せないようなものだった。

「……確か、私と早く話がしたかった、だったか」

「私のこと？ そうだね。話がしたかったっていうより、早く会いたかったっていうか」

「そうか」

なるほど。『会いたかった』らしい。

気がつけばさりげないダメージが入っていた。彼女が気兼ねなくジヤブを奮つてくれるのは予測して分かつていたことではある。防げなかったが。

とにかく、実際よりも余計に感覚が空いたように感じるのは、彼女の発言するところの『会いたかった』という部分が理由なのではないかと思う。

私もそう感じていたということは、まあ、そういうことで。

「私も君と話がしたくて仕方がなかった」

「……おー、素直」

「君がいないと落ち着かなくてな」

「へえ？」

若干高くなった声。煽り立てるような気色のものではなかったが、私を責めるときのものではあった。

よくない予感ほしつっそれで振り向くと、ニヤニヤとした笑みが出迎えてくれる。今にも意地悪く「どういう意味なの？」などと訊ねてきそうな笑みだ。

当然そのような問いをさせるつもりなどない。彼女が疑問を切り出す前に言葉を置いておく。正解を与えてたまるか。

「私もある程度煩くないと気が滅入るようで。君が隣にいないと落ち着かなかった」

「……あれ、煽られてる?」

「気のせいだ」

「無理があると思わない?」

「気のせいだ」

「あれ……こんな流れになるはずじゃなかったんだけどな……?」

予想通り責め立てる気でいたらしい川内は、立場と展開の急転向に、悲愴的な雰囲気
に一変した。コロコロと変わる表情はいつも通り眺めているだけで楽しい。

「……そういえば」

川内は諦めたように話題を変え始める。私の様子をすこし窺っているあたり、若干躊躇うようなものではあるようだった。

情報の秘匿が云々の問題ではなく、あくまで個人的には、鎮守府を留守にしていた二日間のことは聞いてほしくない。

それ以外のことなら気にせずズケズケと踏み込んでもらいたいものだ。

本当に、それ以外のものならなんでも——

「上官の人に呼ばれたってやつ。聞いてもいい?」

「……ああ。構わない」

——なんとなく予想はしていた。

できれば触れてほしくなかった話題ではあるが、決して話せないわけではない。

訊かれた以上は話しきることにする。誤魔化したところでどうせ彼女は察してしま
うだろうから。

「軽いものから話す」

まあ、話したくない部分は先送りするが。

私は怠惰な人間だから、苦手なものはつい後回しにしてしまう。足元に転がる楽な生
き方を愛してやまない駄目な人間なのだ。

「上官には様々な方面で指導を頂いた。今までの戦果の再評価も頼んだ」

「ダメ出しみたいな感じ?」

「そんなところだ。あとは飲みにも誘われた。むしろそれが本題とばかりの勢いだっただ」

「行つたんだ?」

「ああ。拒否すると財布が軽くなるのは数年前に学んでいる」

「……その上官さん、飲み会に遅刻した人がいると喜んでそうだね」

「とても喜ぶ」

もう過去の話だが、上官には処世術を悉く丁寧に教育してもらった。主に実技的な側
面で。毎度数枚の紙幣を犠牲に。

ああ。思い出したくない記憶をむざむざと掘り起こしてしまった。私の装甲を抜く

には十分すぎる火力のものだ。辛い。

夜の灯火に飛んでいった紙幣たちを悼みつつ、これ以上余計な過去トラウマを思い出さぬよう次の話題に移る。

「大規模作戦が近々あるようだ」

「あ、やっぱり？」

「予想していた通り、私の経験の浅さから後方支援や前哨戦などに回される」

「そっか。まあ、色んな娘が活躍できそうだね」

「ああ。……とりあえず、これに関して今伝えられるのはそのくらいだ。大規模作戦の告知の告知だった」

「あ、作戦の通達は別にくるんだ」

「らしい。初心者らしくその間に準備しておけ、という配慮じゃないか」

設備や艦隊の練度は前任のものを引き継いでいるため、準備もなにもないような気がするが。

せっかく用意してもらったものには違いない。およそ初心者にあるまじき備蓄と財力と艦隊に慢心することがないように使わせてもらおうことにする。

——と、ここで会話が止んだ。

本来はもっと重く話すべきな、この状況に限っては時間稼ぎに過ぎない話題が軒並み

没したため、残る話題はあと1つのみだった。

今はまだ最も触れたくない部分。いつか直面するであろうもの。

一応暫く黙り込んでみるが、川内は私の次の言葉を待ち続けていた。しつかりと目を覗き込まれ、次の言葉を促される。

どうやら私の話題が尽きたわけではないことは理解しているらしく、またそれを都合よく見逃してくれるほど今の川内は優しくないうえだった。

もとより話すつもりだったため、べつに構わないことではあるが。

「……君にはあまり関係ないかもしれないが」

「うん」

「大規模改装ではない別の方法で、君たちの能力の限界を底上げできるらしい。燃費もよくなる」

「おー、いいじゃん」

「着任前に既に知ってはいた制度だったが、私には関係ないと思っていた」

「……なんで？」

「制度の名称がすこしな」

「そんな理由で避けるのは勿体なくないかな」

「……それはそうかもしれない」

彼女の言い分は間違いなく正しいもので、制度の名称に違和感を抱いているというだけの歪な理由で忌避するのは、私の立場にあるものとしてはあつてはならないことだ。

最近では敵方とこちらの双方の攻防も緩やかになってきているとはいえ、今は戦時中である。私の身勝手な判断で、本来得られるはずの戦力を享受しないわけにもいくまい。

いつまでも逃避している場合ではなかった。かといって今すぐに向き合えるわけもなく。

いつかは前向きに考えなければならぬとは思いますが、それはそれとして問題となるのが相手だった。

……7年前、その前後に着任した精鋭達には燃費面以外の効果がない、とは聞いている。

「この制度は君にはたいして意味がないものだ。君はもうそれに関係なく強い」

「ふーん。ま、じゃあ私には関係ないかな。燃費良くなるんだったら大型艦に回した方がいいだろうしね」

「……………」

川内は自身にあまり関係のないことだと認識したようだ。おそらく興味を無くしてしまつたわけではないだろうが、こちらから視線を外して床を眺め始めた。

性能や燃費、練度的な問題で、大型艦の長門や赤城あたりに回した方がいいのは分か

る。駆逐艦や軽巡洋艦に回そうと思えるだけの並々ならぬ理由がないのならそうするべきだ。

それは理解できているが、そう簡単に決めていいものではないような気がしてならない。

たとえば長門に適用するとして、それが本当に腑に落ちる回答なのかと訊かれると、きつと動揺して目が泳ぎ回るはずだ。

「……………」

「……提督？」

答えを出せず何も発しない私に痺れを切らしたのか、彼女はやがてこちらに目を寄越してきた。

なんとなく。

ただなんとなく、川内に適用してみれば納得できるかどうか考えだして——結果の予想がつく前にやめた。

別に、今考えなければならぬ問題でもないのだ。

答えならいつかの自分がそのうち出さだろうから、今は逃げてしまいたい。私は楽な生き方を好む人間だった。

「その制度については話を聞いたただけだから、今すぐに何があるというわけではない」

「そっか。……いつぐらいいなりそうなの？」

「分からない。そのうちだ」

制度内容の再確認こそ行つたが、具体的にどのタイミングで私の元に話が回ってくるのかは伝えられていない。

とはいえ、わざわざ再確認を行わせるあたり、そう遠くないことはだいたい分かる。

「いつかは分からないが、その時にはおそらく君にも面倒なことを頼むだろうから」

「うん」

「まあなに、それなりに覚悟しておいてくれ」

「ん、了解」

さっさとこの話題を終わらせたいため、適当な言葉で締める。

結果を先延ばしにするしかない私の体たらくにも関わらず、彼女は真剣に聞いてくれた。私が優柔不断に迷っていることには気づいているだろうに、それでも信頼はあ
るようだ。

まともに目を合わせてくれる川内に申しわけなさこそ感じるものの、それでも先延ばしをやめようとは思えなかった。

まあ、仕方ない。私はそういう奴だから。

……さて。

いつか向き合うつもり課題はとりあえず置いておく。

そろそろただの会話に戻したい。何か話すことがあるか頭の中を探ってみたところ、最近では心臓の拍動が強くなりすぎることが多々あるな、とぼんやり思い出した。その原因の内訳はすべて川内だ。

ちようどいい。ここしばらくの心労でも訴えることにした。

「川内」

「んー?」

「最近では心臓が過剰に働いてくれることが多い。原因はほとんどが君関連のことだ」

「え? あ、うん……?」

「頼むから、しばらくは大人しくしてほしい」

「……私、いつも大人しいと思うんだけどな」

「……………」

「黙らないでよ」

どうも、私の心労に一役買っている自覚はないようだった。自覚があつたらあつたで確信犯もいいところだが。

川内から突き刺さる責め立てるような声と目に、少しずつ視線を逸らしてしまう。

「君はいつも大人しくてたすかる」

「目を合わせてほしいんだけどなあ」

不満げにジト目を寄越した川内は、そのままこちらに顔を近づけてくる。近い。

距離感が狂っているのもどうにかしてほしい、と切に感じながら、近づかれたぶん身を引いた。

「それだ」

「……なにが」

「心中穏やかにさせてくれ。大人しくしていてくれ」

「……? よく分かんないけど、まあ極力頑張るね」

自身の言動が私にどう作用するのか理解が及んでいないのだろう。私の言葉を心に留めてはくれるらしいが、その意味を理解していないのならあまり意味がないような。とにかく確信を持って言えることは、おそらくこの先心労が絶えることはない。

極力頑張つてくれるようだから、期待だけはしておくが。

「ところで」

「なに」

「そろそろ間宮に怒られそうじゃないか」

「え? ……あ」

隣から焦ったような感嘆が漏れる。

用事を放り出して駄弁っているこの状況を、頭の片隅程度には追いやっていたように。

「やつば……ごめん、行ってくるね。先に戻つて」と

背を預けていた壁から離れ、川内は廊下に置いたレジ袋を軽々と持ち上げる。そのままの流れで私の分の袋も奪い取られてしまった。

抗議しようとして口を開きかけたところに、彼女の声が被さる。

「あ、そうだ」

重量感の甚だしい袋を引つ提げたまま、「無理やり引き止めちゃったけどさ」と前置きしてから、川内は一呼吸おいた。

やがてこちらの注意が彼女に集まっているのを確認すると、満足げに微笑んだあと口を開く。

「食堂に行ったら他の娘達もけっこういるから。……もつとふたりだけで話したかっただけ。付き合わせてごめんね」

などと言う。

その内容とは裏腹に、照れくさそうな素振りすらない。いつものことだった。

「じゃ、またあとでね」

彼女は言いたいことだけを一方的に言い放ち、私が何か言葉を口にする前に去って

いってしまった。

先に司令室に戻っている、らしい。きっと彼女は用を終えたあとすぐに私のもとへ向かってきてくれるのだろう。去り際に落とした表情は、多少の物足りなさを含んでいたように感じる。

背を壁に預けたままの状態では、自身の鼓動の様子がよく分かった。ひどく荒れ狂うことはないが、胸の中のものに着実にその速度を上げていく。

……極力頑張る、と聞いたばかりだったが。

「……大人しくしてくれ」

遠ざかっていく背中と足音を見届けて、そう独り言ちた。

けぶるつき

「アイスが食べたいんだけど」

冬も近い夜だった。

日中の騒がしさとは程遠い司令室で、しかし日中と同じく執務机の前にへばりつき、右手の窓外の景色を川内越しにゆっくりと眺めているだけの中身の無い時間を過ごしている、隣からそんな声がかかる。話すことが尽きてから数分と経たない内の言葉。
「唐突にどうした」

窓の向こうに追いやっていた視線をそちらに移すと、頬杖をつきながら曇った夜空を眺めている川内の姿が出迎えてくれた。顔は完全に向こうをむいていて、当然表情はまったく見えない。

その姿勢を崩すつもりはないようで、そのまま言葉を落とし始める。

「季節外れのアイスほど美味しいものないよね」

「そうなのか」

「盛ったかも」

「だろうな」

会話が形骸化している。反射的に飛び出た言葉を堰き止めることもせず脳死で送り出すだけの空間。

実際のところ、冬も秒読み段階のアイスを彼女がどれほど好んでいるのかはともかく、ところで好みを語るに際しての誇張は大変便利だ。もつと強く形容していけ。

「……でまあ、たまには間宮さんの質がいいのじゃなくて、安いものも食べたいなって」
聞いた感じだと、外出許可でも取るつもりなのだろう。若干の間をもつて落とした遠慮がちな言葉は、こちらの様子を窺っているように感じた。

安いものというコンビニの商品かなにかだろうか。この時間帯なら甘味処も開いているはず、などと曖昧に記憶を辿っていたところだったが、どうもそこにはないチープさを求めているようだった。

完成された味の合間に、まつり縫いくらいの頻度で質素なものを欲してしまうのは、なんとなく分かる気がする。

「でことで、外出したいな」

「許可」

「はやっ」

威勢のいい振り向き。見ていて清々しい。

なんとなく感じていたが、許可はどうせ出すのだからわざわざ聞きに来なくてもいい

ように思う。許可しない理由を探す方が面倒だし、私の弱い頭ではそんなものは考えつかない。

特に非番の日や終業後なら一言報告してくれるだけでいい。言伝でも事後報告でもいい。なんでもいいから気軽に息抜きをしてほしい。

そのつもりで軽率に構えていたが、彼女曰く「こういうの少しは厳しくした方がいいんじゃないかな」らしい。なるほど。参考にはしない。

「まあいいや。どうせ聞いてくれないだろうし」

せつかくの忠言を話半分に聞き流されていることは理解したらしく、川内はため息混じりに次の言葉を急ぐ。

「じゃあちよつと買いに行つてくるから」

「ああ。暖かくして行け」

「はいはい」

「車には気をつけろ」

「……お母さん？」

「せめて父がいい」

20時を目前に控える頃。

午後からの用事がなかった川内はこの時間にも制服姿のままだ。今日は演習も訓練

もなく汗をかいていないからいい、とかなんとか。

母親呼ばわりされるのは意に沿わないが、それにしてもこの時期にノースリーブで外出は心配になる。申し訳程度のマフラーでは隠しきれない薄着感が滲み出ている。

艦娘もウイルスや細菌に耐性があるわけではないのだから、せめて体温調節はしっかりと、体調を崩すことは避けてほしい。そもそも終業後くらい暖かい私服に着替えてくればいいものを。『面倒だから』の一言でその選択肢を潰してしまうのは如何なものか。

軍服のままの私が言えたことではないが。

「お父さんはアイスいらぬいよね。じゃ、大人しく待つてて」

「……いや。待て」

緩慢な動きで席を立った彼女を呼び止める。

お父さん——に關しては私が悪いか。どうも私を親に見立てて話さないと息がでないらしいが、ぜひともそのノリは捨てきってほしい。

呼び止める声に彼女は反応し、机に置いた手で上半身を支えて立つ中途半端なままの体勢で流し目を寄越す。

「どしたの」

外の環境は厳しい。目前に降り立った冬の面影を直接肌に伝う、冷酷な外気温が待ち

受けている。それはもう、寒い以外の感想はない。得意か苦手かなら迷わず後者を主張して声高に叫んでやる。

できることなら、自ずから身を晒すのは避けておきたい環境だ。

——ただ、なんとなく。

「私も少しは外に出ようかと思う」

苦手な環境に身を置くためには、それだけでも十分な理由だった。

気が向いたから体を動かす。至極尤もな動機。

ついて行きたかっただとか、そんな不純なものじゃあ——

「一緒に行きたいならそう言つてよ」

……………。

とにかく、今日は外を出歩きたい気分だった。

*

「やっぱり品揃えすごいなあ」

鎮守府からそれほど近くも遠くもない、徒歩で十分足らずのコンビニ。

その十分足らずの隙間だけで丁重に体を冷やしてくれた外気温を呪いつつ、店内の暖

房にだけは謝辞代わりにの信仰心を捧げるなどしている隣で、商品棚を眺めていた川内が興奮気味の声をあげた。

確かにこと供給に関しては何の追随を許さないようなイメージはある。実際のところどうなのかは詳しく知らないが。商品の種類の多さは感心すべきところなのだろう。

「最近のコンビニは素晴らしいな」

「ね。品揃えもいいしサービスも充実してるし」

「サービス。そうなのか。コンビニに関してはまったく知らないんだ」

「……知ってる風な口ぶりだったけど」

「風だからな」

およそ「コンビニ」という略称の由来に関して、ロゴに牛乳缶があしらわれた店舗は間違いないらしい。横長になった冷凍ショーケースを覗き込みながら、全国に展開できるほどの便利さを再確認した。

ある程度の集客効果を維持するに事足りるだけの種類と物量。それを年中無休で備えているというのだから、破格の便利さを有しているのは当然のように思えた。

普段から利用することもない者にとってはそうした利便性などあってないようなものだが。むしろ超弩田舎出身には刺激が強すぎる。初見時はほとほと困惑するに違いない。

多分に漏れずその便の良さを確かめる術と機会を微塵ほどしか持ち合わせていない私を差し置いて、隣の川内は嬉々とした表情で商品と睨み合っている。

どうにも理解に苦しむことに、この時期にアイスを求める者は私が思っているより多いらしかった。寒さに怯えないでいられる彼らが羨ましいのか、そこは自分でもよくわからないが、それでも店舗側の需要の把握がすばらしいことだけは分かった。

「……えつと、提督は買うもの決まった？」

「特には」

「アイスは買わないの？」

「買うつもりではいた。十分前までは」

アイスだか氷菓だか。こんな季節に滅多に欲することはないもの。たまには変化を求めてもいいだろうと意気込んで外に出たわけだが、一念発起に満たない程度の気力はコンビニまでの道程ですぐに萎えた。

となると、せっかく入店したはいいものの川内の様子を見るくらいしかやることがない。特に購入しておきたいものもない。

そんな私の様子を察してなのか、川内はどうでもいいようなことで頻りに話しかけてくれた。買いたいものの選定に専念してくれればいいものを、わざわざ暇でないかと氣遣ってくれているのだろう。

好きで付き合っているのだからどうにでもしてほしいものだ。多様な表情を隠すことがない様子は、ただ見ているだけで楽しい。

「あ、そういうえば。ほんとにどうでもいいことなんだけど」

「なんだ」

「このコンビニ、うちの鎮守府から何人が助っ人に出たりするんだよね。期間限定だけ」

「あー……話に聞いてはいる」

よくわからない職分。優先すべき用でもない判断して手が回っていなかったが、前任は積極的に行っていたと聞いている。バイト……もとい特別任務としてのものらしい。

助っ人に出させる理由はよく分からない。地域との交流がどうこう、もつともらしい理由さえつけておけばいい。らしい。

その点、どうも前任のフットワークは軽かったようで、鎮守府近辺では軍服姿で出歩いていてもたいして奇異の視線を集めることはない。そう考えると交流云々は存外上手くいつていたのかもしれない。

もとより寒い夜にアイスなどそれほど求めていなかった私は、一言ことわって彼女の

もとを離れ、他の商品棚から適当に軽めのものを選んでさっさと会計を済ませてしま
う。

ただのガム。特に必要としているわけではないもの。冷やかして帰るのも悪いので
購入しておいたというだけ。自分ではどうすることもない気がするが、そのうち駆逐艦
にでもやるか、と乱雑にポケットに突っ込んでおく。

川内のもとへと戻ると、商品との睨み合いはまだ続いているようで、それなりに悩ん
でいるらしかった。客足もそこそこ多く、邪魔をするのも悪いので外にいますだけ伝え
て店外で待つ。

自動ドアの横にはけて突っ立っているだけで嫌になるほど寒い。上着が欲しい、と切
に感じた。

*

「ごめん、おまたせ」

それほど経たず、なんととはなしに曇った寒天を見上げているうちに、川内は店内から
出てきた。声に振り返り、距離の詰め方が狂っている彼女から一步身を引くなどしつつ
味気なく言葉を返す。

商品の厳選は納得のいく方向で終わったようだ。右手に提げている小さめのレジ袋には、箱のような形がくつきり浮かんでいる。半透明の袋だったためそのまま中身を確認した。

私を買ったものと同じガムと、箱入りのアイス。パッケージを見る限り、バニラ味の棒付きアイスらしかった。右下には『10本入り』と小さく表記されている。袋詰めになって小分けされているタイプのものだ。てつきり一人分のものを買うのだと想定していたが。

聞けば、いつも頑張っている姉妹の分も買うつもりだった、と。

つい頬が緩んだ。すぐに戻す。

今の返答には彼女たちの家族愛のようなものが垣間見えるだけで、私にはまったく介入する余地のないことのはず。それでも、それを聞いただけで嬉しくなった。理由は知らない。

わざわざ姉妹の分も考えて行動する彼女の性格は、どちらかといえば嫌いではないため、それを再確認できるのが嬉しいのかもしれない。

それで、ガムのほうはわざわざ買う必要があったのだろうか。

「いや、提督が買ってたし。好きなのかなって」

好きでも何でもない。せんべいのほうが好ましい。そもそも仮に好きだったとして、

わざわざ彼女も購入する必要がないような。

私にくれてやるつもりだったとか、そんなところか。

「あ、べつにあげないから」

求めてすらいないうちにやんわりと断られた。悲しいのか虚しいのかよくわからない気分になる。

しかしこうなると本格的に意図が分からない。私がガムを好むと勘違いしてくれているようではあるが。そんなことはなくそのうち駆逐艦に献上する予定だがいいのだろうか。いいか。

「……まあいい。早いうちに帰るぞ」

「あ、ちよつと待って」

「どうした」

「アイス。近くに公園あるからさ、そこで一本食べていいかな？」

さっさと帰ってしまうつもりでいたところ、そんな提案を寄越される。

……外で食べるのか。アイスを。冬間近に。正気か。

「寒くないか」

「寒いからいいの。わかるかな」

それとなく拒否してはみたが、どうも本気らしい。

彼女がそうしたいと言うのなら仕方がない。川内の求めるがまま応えてしまおうがいいだろう。断る理由は腐るほどあるが、断らない理由もひとつくらいは持ち合わせていた。

コンビ二前の若干の暖かさを恋しく思いつつも、川内が先行し始めた後をついていく。彼女の足取りは軽いように思えるが、こちらのそれは重めだった。

彼女の隣に並んで、街灯の誘導を頼りに幅員の狭い生活道路を歩く。次第に住宅の密度が高くなる、鎮守府からは離れる方向。周りの家屋から漏れ出ている明かりは疎らだった。

このあたりは雑務関連で何度か通ったことがあるくらいで、ほぼ馴染みのない道だ。地域との交流がどうこうの話も含め、そろそろ慣れていくべき時期なのかもしれない。「このへんもちよつとずつ変わってきてるなあ」

「そうなのか」

「うん。私が着任した頃なんかはあんまり余裕なかったから」
たいして感傷に浸るような様子もないまま、川内がそう零す。

鎮守府に近いここらは、本土付近での戦いが稀になった今となつては住宅に供せられた土地になっているが、そう遠くない以前は少なくとも今より廃れた街並みが広がっていたのだろう。

私の立場にあるのなら真摯に受け止めるべき事実なのだろうが、なぜかそうはいかなかった。よくもまあここまで復興したものだ、どこか他人事のように感じる。

私の出身地は昔も今もたいして変わっていない。何をするにも車が不可欠なあの地域、山奥故に生活レベルはもとより一段階落ちていた。

そんな田舎で過ごした幼少期には、人類が壊滅寸前まで追い込まれていたという実感はなかった。他人事のように思うのも、そのためなのかもしれない。

「……これからもつと変わるんじゃないか」

「だろうね。それはそれで悲しい気はするけど」

まあいいことだけだね、と付け加えて言葉を閉じられる。何でもないような口調だったが、困ったような薄笑いを見る限り、感じるものがないわけではないらしいかった。

自分の中に思い出として残されるばかりで、街並みはとどまってくれない。そう思うと無性に寂寥感が溢れてくる理由もなんとなく分かる気がする。

続ける言葉も見つかからないのでそのまま黙り込んでおく。

手持無沙汰になった視線を街並みや街灯に移しているうちに、低めの空に月が浮かんでいることに気が付いた。先ほどまでは曇っていて見えなかったが、いつの間にか中途半端に晴れてきていたらしい。

満ちるより少し前の、落とし込まれた影が目立つ月。そのまわりを細かく切れた薄氷

が包む。

いかにもな天気。凍えるような気温にはよく映える。

寒月から目を離し、隣に並んで歩く川内に移す。寒そうな素振りはなかった。袖を通さずに羽織っているコートは彼女の体軀にしてはすこしだけ大きい。

視線に気づきこちらに目を寄越した彼女は、揶揄うような笑みを浮かべた。

「……寒そうだね？」

「理由を考えたことはないのか」

「さあ？」

ふるえかけた身をなんとか抑え込む。同時にこみあげてきた季節への怨嗟もなるべく外に出さないように努めていたが、川内は見透かしてくれるようだった。

結局、外出前に自分から制服を着替えも上着を着てもくれなかった川内には、私の上着を無理やり羽織らせている。

必然、私は耐寒にたいした効果のない格好を強いられてしまうわけで。大変すばらしく体が冷える。

私が寒さに打ち震えている理由に思い当たる節がないらしい彼女は、それにしては私の苦悩など分かり切った笑みでこちらを見つめている。楽しそうだ。

「ねえ」

「ん」

「手、冷たくない？」

「特には」

「そっか。残念」

残念がれるだけの不都合があるようには思えない。言葉通り、すこしやさぐれたような素振りりで、川内が大げさにレジ袋を揺らす。

返答は先回りして予測できていたらしかったが、期待していたものではないらしい。本来得たかった展開への名残を惜むように「知ってた」と言葉を投げられる。よくわからない。

なんにしても、指先が冷えていないわけがなかった。

「いやあ、最近、冷え性って羨ましいなって思うんだよね。私にはそういうのないから」

「そうか。いつ得をする機会があるのかぜひご教授いただきたいところだ」

「今のこんな状況とか？」

「わからん」

路地を並んで歩くだけのこの状況、寒さにメリットなど微塵も感じない。川内と話すのは楽しいのでそこは利点だが、寒さはまったく関係ない。彼女はそこに利点を見出し

ているらしいが。

ただ思い当たる節がなんとなくあるというか、解答が出てきそうで出てこないというか。うっすら思い浮かんだ想像通りだとするなら、このまま思いつかない方がいいような気がする。

つまり、これは私には荷が重いものだ。

「絶好のチャンスだと思うけどな」

「……そうなのか」

「ま、いいよ。公園ももうちよつと先の角曲がったとこだし、今からやってもね。……その、帰りとかでいいからさ」

ちらちらとこちらの様子を窺うような目。なんとなく予測がついていたが、やはり私に何か求めているらしい。

彼女の言葉を振り返る限り、手を繋げと遠回しに言われていなかったか。本人から聞いてみない分には自信が持てないが。

「……………」

「……………」

そんなことが聞けるはずもなく、黙々と歩く他ない。カーブミラーのあるT字路に打ち当たったので、彼女の誘導に従い言葉を放つことのないまま右折する。

小さな公園が見えてきた。樹脂製のフェンスに囲まれた、緑が多めの敷地。遊具は疎らに設置されている。

だいたいの外観を眺めつつ、入り口に向かう。

それからの川内の行動は早かった。

入るや否や入り口から近いブランコへと一直線に向かつていく。どこの公園にもよく設置されてあるような、50センチ間隔でふたつ座面が用意されているもの。2人での利用が想定されているだけで、どうにかすれば4人までは楽しんで利用できる。危険極まりないが。

そのうちの一方に勢いよく乗り込んだ川内を、公園の入り口で佇んで眺める。さすがに身のこなしが軽く、無駄にスムーズな動きだった。盛大に慣性においていかれていたレジ袋の中身が心配だ。器用なことにコートは脱げ落ちていない。羽織っているだけじゃなかったか。

さすがにその勢いそのまま漕ぐまではいかなかったようで、彼女は勢いが衰えるまでじっとしていた。足を宙ぶらりんになり出して揺られる彼女の後姿は、ひと目に機嫌の良さが分かる。

夜の公園でテンション高めに遊具に飛び込む軽巡洋艦というのなかなか字面がとんでもないことになっているが、川内ならまあいいかとなる。元気で大変よろしい。

「てーとくー！ はーやーくー！」

やがて静止した彼女はこちらを向くように座り直し、大きめの身振りで私を呼ぶ。

声量もそこそこ大きかったが、夜だと分かつているのだろうか。ああいや、夜だからか。

苦笑を抑えきれないまま近づくと、彼女は座面のもう片方を指さした。

……座れ、と。

目での誘導に従い、彼女の右隣へと腰掛ける。木製の座面からはじんわりと冷たさが滲み、腰掛けた際の細かな振動は身体を忙しなく揺らした。

懐かしさに突き動かされるがままチェーンに触れると、ひんやりとした感触が返ってくる。握り込んだ。

臍気な幼少期が出し抜けにこちらを振り返り、自然とすこしだけ口元が緩む。

「この歳になって遊具に腰を下ろすことになるとは」

「昔は無邪気に遊んでたんだけだ？」

「それはもう」

「……かわいかったんだろうなあ」

「さあ。どうだか」

「あ、今もかわいいか。ごめんね」

—— 幼少期のその評価だけは認めてやる。今は違う。

「……なんか反応してよ。もう」

彼女に視線を据えたまま無視すると、不満げな声とともにいじけたようにレジ袋を漁り出した。よし。

ガサガサ、とレジ袋からアイスの箱が取り出される。その側面にあるリボン状のミシン目を開ける音。その中の袋詰めになったアイスを取り出す音。

箱のほうと同じデザインにプリントされた外袋を見て、彼女は嬉しそうにやけている。本気で食べるつもりらしい。

だめだ。見ているだけで寒くなってくる。土でも見ておきたい。

ふるえかけた体を抑える。

どうしてこうも耐寒に衰えた身体を持つてしまったのか。もつと脂肪がほしい。脂肪と筋肉は両立するくらいがいい。big up 褐色脂肪細胞および脱共役タンパク質。非ふるえ熱産生を舐めてはいけない。

「うわ」

身を包む過激な冷涼感に耐えていると、隣から素つ頓狂な声が上がった。

億劫な首と目を動かしそちらを振り向くと、外袋を開けたところで固まっている様子が確認できる。

なるほど。棒の方ではなく実の方から開けてしまったらしい。稀に、たまに、よくあることだ。川内が一瞬渋い顔をしてから、すぐになんでもないような表情に戻る。

なんとかかして棒の方にたどり着くのだろうかと彼女の様子を見続ける。少しの考える素振りのあと、彼女がとつた打開策に特別なことはなかった。袋さえ取らないまま、アイスにそのままかぶりついた。

半ば袋に入ったままの棒アイスを口に啞えた状態で支え、彼女は離れた両の手でまた箱の中を漁る。外袋が滑り落ちないかと不安感のようなものを感じた。

杞憂に済む。川内はアイスに齧り付いたままで、取り出したものを私に差し出した。

「ん、あい」

「……ああ、ありがとう」

行儀の悪い行為ではあるが、川内なら悪目立ちするようなものに思えなかった。

仲のいい友人のような感覚。特に違和感も不快感もない、彼女にはちよいどいい動作だ。

差し出されたものを素直に受け取る。

……アイス。

別にいらぬ、と目で訴えかける。

「いやほら、十本入りだから、私たちで分けると一本余るんだよね」

視線の意図を察した、というより渡す前から想定していたようで、自由になった右手にアイスを持ち直してそう答えてのける。すらすらと綴られたその答えは、早い段階から準備していたように思えた。

そういえば彼女たち姉妹で分けるとか言っていたか。なるほど確かに三人で分けるには一本余る。川内も神通も、積極的に那珂に譲りそうなものだが、争いの火種を起さないために他の誰かに譲ってしまうのがやりやすいというのも納得はできる。

とはいえ、納得のいく理由を与えられたところで食べる気は起きない。この環境でこれを食べるのは自殺行為ではないか。体内外から体が凍りつく感覚は、きつと十回死んだほうがマシな辛さを孕んでいるはずだ。

それはそれで体験してみたい気もするが。好奇心は猫を殺すらしい。

まあとにかく、受け取ってしまった手前開封はすることにした。彼女と同じ轍を踏まないよう、一応持ち手の方から開けてみる。

乳白色の棒アイス。そういえばバナナ味だったか。袋から完全に取り出して右手に持つ。

そのまま固まった。

「食べないの?」

「いや……」

開封した以上無駄にはしない。ただ乗り気ではないだけで。

「……………えい」

用済みになった袋を左手に握りしめつつ、右手の指先にうつすらと覚える重みをぼけつと眺めていると、唐突に視界を遮るものがあつた。

アイスに据えていた焦点を無理やり断ち切つたもの。茫漠な視界の上にぼんやりと浮かんでいた意識をなんとか凝らして、その正体を確認する。

乗り出すような姿勢に、大げさに揺れる、ツーサイドアップに結われた髪の毛のテール。ははあ、これは川内。間違いなく。

「なにを——」

何をしているのか理解できない。それを確かめるために口を開くより先に、彼女は退いてしまった。

もとの体勢にもどつた川内は、特に意味を持たないような様子で薄く笑っている。

「……………う？」

脳裏にはてながこびりついてなおらないまま、右手の重みに視線を移す。

先がすこし欠けたバナラアイス。気のせいかな。ちよつと食べられているような。

……??

???????

「お、おい」

「うん？」

動揺を隠しきれずに声が漏れてしまった私に、川内がいつもの調子で反応する。

軽く首を傾げた彼女の姿は、なんの違和感も羞恥心も持ち合わせていないような様子だった。

うん？　じやないが。

「なにをしてっ」

「なにつて、そつちの味も知りたかったから、ちよつと貰っただけだけ」

「……同じ商品だった気がするが」

「そうだけど。えと、ダメだった？」

「いや、その……」

卑怯な問いだった。

何でもないような素振りでこう不自由な二択を迫られてしまつては、本音を隠す間隙なんてありやしない。

「……私は構わない」

「へへ、そう言ってくれると思つてた」

「……………」

「提督は優しいからなあ」

そんなことはない。二択で答えなければならぬのなら、そう答えざるを得ないというか。

そもそも私が優しいのではなくて、彼女だからいいという話なだけであつて。ああいや、きつと誰にされても別に構わないのだ。そうに違いない。きつと。

「焦つてるの珍しいね」

穏やかな笑みをこちらに向けて、彼女が言葉を投げる。

目を逸らさず真正面から聞いてしまったが、受け取ってしまったわけではなかった。真偽のほどはどうあれ、私の葛藤じみた焦燥を悟られているような心地がする。

なんなんだこの状況は。

川内はなんともないような様相で視線をまつすぐに刺してきている。このまま目など合わせていられるはずもなく、彼女にひとくち貫われてしまったアイスに視線を移す。

少しだけ欠けたアイスも、それはそれで対処に困るものがあつた。この後きつと食べることになるだろうから。

おかしい。心臓が痛いのは私だけか。距離の詰め方がおかしいとか、そんな程度で済ませられない。少なくとも私にとっては。

ちくしょう。話題を振って落ち着きたい。

そういえば先ほど珍しく焦っているとかなんとか言っていたな。珍しいついでに軽い相談でもしてやる。珍しさに驚け。

「……先日の話だが」

「ん」

「強化のための制度がどうこうと伝えたな」

「……あー、うん。燃費もよくなるとか聞いたね」

考えるだけ辛くなるため後回しにすることにした課題。

唐突な話題の切り替えにもかかわらず、彼女はそのまま乗ってきてくれた。

先日彼女に伝えたことも、記憶に留めていたらしい。

なら話は早い。すぐに本題を振ることにする。

「誰を選ぶべきかずっと迷っている」

「……前も言ったけど、大型艦とか」

「それがいいんだろうな。それは理解しているつもりだ」

この日まで何度も考える機会があったが、何度思考を辿ろうが行きつく答えはそれに近かった。目に見えて強化の効果が現れてくれる。

大型艦を優先させて強化していくのは、これから艦隊を運用していくなかでの最適解

に違いない。

とはいえ、そう簡単に納得がいくものでもなく。

自分から切り出した方がいいものの、ここは自分でも踏ん切りがついていない部分だ。

自身の思いを引き出すのが億劫になる。次に出すべき言葉に詰まった。どうしようもなく、つい目で助けを求めてしまう。

「提督は誰がいいの？ ……って、聞けばいいかな」

「……君にはいつも助かる」

ありがたいことに隣にいるのは川内だった。私からの視線の意図を察して、言葉を出しやすいように促してくれた。

なぜここまで理解が及ぶのか。こうなると怖いほどだ。

とにかく感謝だけしておく。

彼女のおかげで引き出すべき言葉の敷居が低くなってきたため、浮かぶ言葉に枷がなくなつたように思う。いくつか拾ってみる。

「その。一応、だが」

訥々とした言葉の区切り。

ゆつくりと使った時間の合間で、脳裏に浮かぶ言葉をひとつひとつ纏めているうちに、なんとか考えは定まってきた。

「ケツコ……その、例の制度の名称を真に受けるとして、君ならいいのかもしれないと考えたことはある」

「そうなんだ？」

川内相手なら上手くいくかもしれないと思ひ当たることは多かつた。その都度中途半端に考えて、いつもそこで思考を放棄して逃げてしまう。

それがいつもの調子だが、今日だけは違つていそうだった。彼女が「で、どうなの」と言葉を急いでくるおかげで、思考停止するための退路を断たれてしまう。

手厳しい。もう少しゆとりを持ったほうがいい。

「……その、君が相手なら」

「うん」

「深く考えるのは避けていたが、悪くは、ない。おそらく。きつと。ただの勘だが」

曖昧に浮かんだ想像を伝える。

その選択が提督として相応しいものかどうかはともかく、きつと後悔することだけはなさそうだ。ただの勘でしかないとため浮ついた言葉になつてしまうが。

自身の勘をいまいち信じきれない私の様子を察してしまったようで、彼女は諭すような言葉を落とし始める。

「自分の勘くらい、自分で信じてあげたほうがいいんじゃない？」

「……………」

「私も極力信じるしき。ほんとに大事なことならみんな指摘するだろうし」

「そうか」

割と能天気な雰囲気だった。どこまでもいつも通りの様子なので安心はできるが、自身に関わってくることなのだからもうすこし慎重に考えたほうがいいように思う。

そういえば、制度の名称は彼女に伝えていない。だからこんな気楽な面持ちで言葉を落とせるのだろうか。

せめて制度の名称くらいは知って、私の苦悩を共有してほしい。本当に知ってもらっても困るが。とはいえ、いつかは同意を得るために伝えなければならぬ。

まあそのときはそのときだ。そのあたりうまくやっていくには少なすぎる今の勇気を、未来の自分に託しておく。

「まあ……そうだな」

「決まった？」

「……君で、前向きに考えてはみたい」

「そっか」

私がそう答えるであろうことは、だいたい把握できていたらしい。

川内なりに共感はしてくるようで、そう簡単に信じきれないよね、と言葉を投げた。

彼女は私の考えるところをととも理解してくれているが、今回に限っては勘を信じきれなかったわけではない。むしろ信用する方向に傾いている。

ただ、その勘のおかげで漠然と浮かんだ答えが、彼女に伝えるためには苦しすぎただけで。

「……今のはって相談？」

「そのつもりだ」

「ふーん。そっか。そっかそっか」

やけに嬉しそうな表情。自身の感情をなんとか表に出さないよう努めているらしいが、それでも堪えきれないものがあるようだった。

珍しいなと揶揄される心構えでいたが、そんな様子でもない。よくわからないまま彼女の様子を眺め続ける。言葉は特に浮かんでこなかった。

痛いほどの静寂は、身の丈に合わず耳を聳する。

ここまで突っ走って歩いて今更だが、振る話題を間違えたような気がする。

「話は変わるが」

ところで川内から目を逸らすのは得意な方だ。そんな私に話題を逸らすだけの技量がないはずがなかった。

「恐らく、私は君から悪く思われてはいない。ただの勘だが」

「やけに強気じゃん。自分の勘は信じきれないんじゃない？」

「私にとつて都合のいいことは信じられる」

「ええー、なにそれ……」

「君も極力信じると言ってくれたからな」

「……まあ、信じるも何も、そこは事実だけど」

きまり悪そうに呟く。彼女曰く、どうも悪くは思われていないらしい。

知ってる、とだけ返して言葉を終える。

「……待って」

「どうした」

「都合がいいことは信じきれるんだよね」

「ああ」

「私が提督のこと好きなら都合がいいの？」

「………」

——なるほど。

「まあ、そうなるな」

「……へえ。へへ、そっか。よかつたね」

機嫌がよさそうに彼女がにやつく。

『川内が私を好いていたら都合がいい』というと、私が言いたいところと少しニュアンスが違う気がするが、実際のところ好かれているのなら都合はいい。そこだけは間違いない。

それで、『よかったね』とは。

「少しいいか」

「なに？」

「私が言っていたのは『悪く思われていなければいい』というだけで、『好きでいてくれたら都合がいい』という話ではない。そのニュアンスの違いは汲み取ってほしかった」

「……へっ？」

勘違いしているらしいので是正しておく、隣から調子の外れた声が漏れる。

「……普段の君の様子を見ると、君が私をよく思ってくれていることは分かる」

「えっ、ちよつと」

「君がそう勘違いしてくれて、そのうえで肯定的な反応を落としてくれるのは、つまりそういうことだろうとはなんとなく理解しているが」

「ちよつ、ちがつ……」

歯止めを効かなくしていった私の言説に、彼女は慌てて否定する。

少しは罪悪感が沸くかと身構えていたが、まったくそんなことはない。むしろ嗜虐心のよなものだ。

「違うよ……？　私がそう思つてるとか、そういうことじゃなくて……いや別に嫌いってことでもないんだけど」

——否定しきらないのか。

否定しきっておかなければならない場面で、おそらく私が傷つかないよう否定しきらない川内に、頬も緩みがちになる。なんとか無に保つておきたいので、表情筋を総動員した。

普通は笑うために使うものだが、私の場合その逆の用途に酷使してしまっていた。

嗜虐心に従うまま煽つてしまいたい気もあつたが、それではあまりに理性に申し訳が立たない。

なんとかフオローに回つたほうがいいのかもしれない。そこまで回らない頭で、送る台詞を辿つてみる。

「その、君がそう思つてくれているのなら、それはそれで私に都合がいいことでは……まあ、ある」

「だ、だから違うってば」

逆効果らしかった。

自身の訥弁を誤魔化すように、川内は自身のアイスを口に含む。

「……………」

「……………」

選ぶ言葉を間違えたな、と後悔する。お互いに何も語ることはない、痛いほどの静けさがこの場を包みはじめてから、今頃になってそう感じる。

夜の静寂は冷たい。小さく息を吐く。そのうちの幾ばくもない分だけが凍り付いて、僅かに白く濁るのが分かった。

口に含んだものが溶けきったらしい彼女が、わずかに口を開く。

「……………違わなくは、ないけど」

小さな声。微かなものだったが、この距離で聞こえないほどのものではなかった。きつと聞こえるように言っているのだろう。

辛い。突発的な難聴になりたい。

「川内」

「……………なに」

「もうこの話はやめた方がいいか」

「……………ん。そうだね。できれば」

「そうか」

ダメージは少なからず入っているようで、彼女はなんとか会話を切り上げたらしいかった。

それならそれに合わせてやったほうがいい。こちらとしても最後のひとことで死に切ったところだったので、ありがたくその機会にあやからせてもらう。

……私を殺した台詞は違わなくてはな~~い~~だったか。それがどういう意味かは、まあ、そのままだろう。

いや、このまま終わるのは勿体ないような。

「それで？」

「……なに？」

「君は私にどう思われていたら都合がいいんだ」

「この話はやめようって言わなかった？」

「ああ。私から切り出したな」

「じゃあやめようよ」

「そうだな。それで、どう思われていたら都合がいいんだ」

「あれ？ 話通じてない？」

抑えきつたはずの嗜虐心がぶり返してきたので、煽るならここしかない。最近は彼女による一方的な会話を強いられることが多かったのだ。私にもすこしくらは煽らせて

ほしい。

理性に立てる申し訳が道理を阻んできたが、無視しておく。そんなもの犬にでも食わせておけ。

これ以上の言葉の応酬はやめておきたかっただろうに、川内は求められればある程度応えてしまう損な性格をしているらしかった。

納得のいかないような不満げな声色で、次の言葉を紡いでいく。

「……えと、どう思われたいとか、そのへんの私の希望はともかく。まあ実際のところ、嫌われてはないんじゃないかな」

「なるほど」

「むしろ提督って私のこと好——」

「この話はやめるか」

「……あは」

墓穴。

おかしい。煽るつもりだったのだが。昂り始めていた嗜虐心のようなものが、急激に萎えていくのがわかる。

察した。この先には一方的な展開が待ち受けているのがわかる。

私が辛いだけの展開はいつまで続くのか。少なくとも今日に限っては覆りそうにも

ない。

「でさ、私、提督には好かれてる方だと思っただけど」

「やめてはくれないのか」

なおも話題を固定し続けるつもりらしい彼女に苦言を呈する。残念なことに、川内は聞く耳を持つてくれないようである。

お互い様でしょ、と静かに笑う。

川内を煽ったり川内を揶揄ったり寸劇を始めたり。これから彼女との間で織りなすのは、そうした出しゃばりが許されるだけの余裕を与えられていない会話に違いなかった。

しかし、そんな一方的で、不都合な会話ですら私は気に入っているのだから手に負えない。

「提督、たぶん寒がりだよな」

「……その通りだが、何故分かる」

「冬に対しての恨みが漏れ出てるよ。特に顔に」

「そうか」

できる限り表には出したくないものだったが、そうした側面に限って知らず知らずのうちに見せてしまっていることがある。

とはいえ、表に出ていたところでたいして弊害はなさそうだ。別段矯正すべきものではないだろう。

などと考えていたところ「また妖精さんに避けられるよ」と忠言された。川内は私の扱いが上手い。そこへ帰結するのであればなおそうと簡単に思ってしまう。

「で、思っただけど」

「なんだ」

「寒がりの人が冬に差し掛かっている時期にアイス食べるっておかしくない？」

「いや。たまたま気が乗ることもある」

「ふーん、そういうもんかな。じゃそれはそれでいいや」

これはよくない流れだ。

彼女がどのような展開に持つていくつもりなのかなんとなく察してしまいつつ、抗うだけ無駄なので目で言葉を促した。

そんな私の催促に関係なく、彼女は矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。

「でもわざわざコンビニに買いに行くかな。寒がりのくせに。外が寒いのが分かってるのに」

「さあ」

「コンビニまでの道で気が変わって、結局自分ではアイスを買わなかったかもしれない

けど。余程のことがないと外にも出ないよね、そういう人って。あつたかい部屋で過ごしてや」

「……まあ、そうかもしれない」

「そういえば聞いてなかったけど、提督ってなんでコンビニまで着いてきてくれたの？」

「特に意味は——」

「ほんとに？」

「…………」

考えるまでもなく、特に意味はあつた。この先決して彼女に伝えることはないだろうが。伝えるまでもなく察してしまわれていそうなのは、都合が悪いので考慮しないでおく。

凍てつくような寒さではつい俯きがちになってしまふものだ。そう言い訳して、土にでも目を注ぐことにした。

その前にすこしだけ視線を送り、彼女の満足げな表情だけは確認しておく。すぐに落とすとした。

「でさ、私、提督には好かれてる方だと思っただけど」

「ああ。その通りだ」

「……へーえ？」

——なんだ、この流れは。

彼女からの追求に、気がつけば吐露してしまうため息。すぐに退いてくれるだろうと、曖昧に展開を予測していたのだが。お互いに浅く踏み入って、すこしだけ挑戦してはすぐに退く、臆病な展開。最近は彼女が退いてくれなくなった。

悲しいことに、私だけが中途半端なままの状態を望んでいるらしい。今までずっと曖昧に留めておいた関係を、彼女としてはなるべく決定してしまいたいようである。隣にちらりと目を超越す。なんとなく期待していることが分かる、緊張気味の目つき。

そんな目で見られたところで、特になにも与えてやれないが。追いやられた視線を中空の月に据える。

もう十分に満足したのか、さすがに追及をやめてくれるようで、そこから彼女が言葉を落とすことはなかった。

ちぎれた薄い雲に輪郭を遮られた寒月は、断雲を晴らすことさえしないままぼんやりとその存在を主張している。

決して綺麗と表現できるほどの立派な光景ではない。これまで川内の隣で何度か見る機会があつた満ち足りた月には比べるべくもない、粗末なものだ。

それでも、悪くはないように思う。嫌いではない。こんな月でも、今だけは満月に見劣ることはないように思う。

希釈された光を目に焼き付けながら、なんとなくそう感じた。

「……月が綺麗だね」

予想通りの言葉が落とされる。この国に生まれたからにはどこかで聞いたことのある、月並みの台詞。

眩いた本人はどうも落ち着かないようで、その声はいつもより上擦っていた。

風が木々を撫でる音や、公園の近くから漏れ出す家庭の音。夜に音量が大きくなることとの多い彼女にしては珍しく、そうした雑音が交じる不完全な静寂に対して、水を注ぎない程度の静かな声だった。

「こんな月なら夜戦に映えそうだな」

「きつとね」

「……適当に言ったつもりだったが、映えるのか」

「いや、どうだろ」

「どっちだ」

「どっちでもいいよ」

なんだそれは。

「提督が隣にいるなら、べつに。……なんて」

——なんだこれは。

隣から聞こえてくるのは、言葉と共に沸いた感情を誤魔化すような、小さな笑い声。月に囚われた視界ではその表情を見ることは叶わなかったが、どうせ想像通りだろうと判断して、そのまま空を眺め続ける。

歯が浮く。首が痛い。

「……君は。常々思うが、よくそんなことを言えるな」

「いつものことですよ」

「自覚、あつたんだな」

「自覚っていうか……提督が苦手そうな言葉を選んではいるけど」

彼女の言葉に死にかけるのも、べつに嫌いではない。

私が対処に困る言葉を投げるのはぜひやめていただきたいが、本当にやめてもらってもそれはそれで困る自分がある。

それを自覚できるのが辛いものだ。ああくそ。どうにでもなつてほしい。

「……月が綺麗、だったか」

これ以上辛さを拾ってしまわないように、彼女が落とした台詞を思い返す。

思えば、彼女とはほとんど毎日のように月夜を過ごしてきた。

執務や夕食、入浴を終えてから就寝するまでの間。司令室では暇な時間を持て余し、刹那的な話題すら尽きた頃には自然と窓の外の空を眺めているようなことが多々あつ

た。

ただただ月や星を眺めるだけの時間だったが、暇つぶし程度の前向きな感覚は共有できていたのだろう。月がない日や曇っている日も、それはそれで楽しめていたように思う。

月を覆う雲が西から流れていくこんな夜には、息を吸うごとにそうした思い出ばかりが浮かんでやまない。

——寒くて仕方がない、つもりだったのだが。

体を冷やすはずの空気では抑えきれない熱量を伴って、それらが記憶に溶け込むのが分かった。

「……………」

「……………」

先送りにしていた、隣にいるための言葉。胸につつかえているそれを、口にするかずっと迷っていた。

素面の私にとって、雰囲気には流されない限り音として体外に出してしまうには羞恥心が邪魔すぎるものだ。

だからきつと、今を逃すと次はない。今がまさに、ちょうど都合のいい雰囲気だった。どうせこんな機会がなければ伝える勇氣など出ないのだ。私がそんな人間であるこ

とは川内にも把握されているのだろう。

とにかく言葉を落としてしまうことにする。

欠けているはずの月も、今の彼女にとっては、薄ら寒いほどの綺麗な月らしいから。

「川内」

「……………」

「私は汚い人間だ。戦時中だというのに、できれば死にたくないと感じている。君たちを死地へ送り込むだけの、もっと汚穢に満ちるべき立場にあつて、ありえないことだと思うが」

「……………」

「ただ、月が^{けぶ}煙るこんな日なら、死んでもいい」

「……………」

「月」に「死」を返すだけの、決まり切った文句。文字に触れることで生を充実させていた先人達は、その生のさなかに、とても使い勝手の良いテンプレートを遺してくれていた。

自分なりの素直な言葉では喉をつつかえてしまう私にとって、どうにかして心内の感情を曝け出すために都合がいい。

ひとつ心残りがあるとすれば、「月」の方が、本来なら私の立場から切り出すセリフ

だったような。

「……逆じゃないのか、これ」

「いいじゃんべつに。男女逆なだけで内容は変わらないでしょ」

「それはそうだ」

そういうのもありか。伝えたい内容が変わらないのなら。

……………。

……内容。

この場合、ようは、そういう意味のもので。

動揺。月に留めておいた視界を諦め、彼女の方へと振り向く。数瞬前の自身を思い返して、はつきりと自覚するものがあつた。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

川内はいつしか私の方を向いていたようで、振り向いた私の焦点はちょうどその目とぶつかることになった。

私の目を覗く真つ直ぐな視線は、動揺しきつた私にはよく刺さる。

月に死を送ってしまった私にとって、もはや自分に言い訳をすることはできなかつた。

ケツコンカツコカリ、だなんて言葉が思い浮かぶせいで、言い訳のための文句は輪をかけて崩れ去っていく。

なにか口にしようとしていた言葉は、どこかに去ってしまった。

「……ねえ」

私が月に視線を据えている間に、いつの間にかアイスは食べきっていたらしかった。体を支えるように、ブランコのチェーンを手持無沙汰な左手に握っている。

きつとチェーンは冷たいはずだ。アイスを食べきったことも含め、冷えた指先の感覚は辛いだろうに。そういうえば、この公園に来るまでの道中で、冷え性が羨ましいとかなんとか言っていたか。

……帰り、手は繋いでくれるだろうか。

そうしたほうが私の顔を覗き込みやすいのか、彼女は左手のチェーンにもたれこむように顔を少しだけ傾けた。重力に従うまま揺れた髪を、なんとなく目で追う。

「月、綺麗だった？」

共に見上げていたはずだろうに、落とされたのは他人事のような言葉だった。綺麗かどうかなど、話題を振ってきた彼女が一番知っていることではないだろうか。

そうした疑問を抱く余裕さえ与えてくれない、こちらをまつすぐに刺す視線。

——あるいは最初から月など見ていなかったのかもしれない。

なにも返すことができず、無言のまま彼女の顔を見つめ続ける。緊張した面持ちで唇を軽く噛んでいるのに気が付いて、一連の言動は彼女なりに無理をしていたのかもしれないと臆気に思った。

その真偽はどうでもいい。

僅かに緊張しているらしいその表情は、月などよりも遥かに遠い魅力があった。

「アイス」

「……………」

「ちよつと溶けてきてるけど」

「……………」

「……………食べないの?」

脳を震わせる声。

彼女の顔もまともに見れない。泳ぐ視線を晒してしまっている自覚を持ちつつも、それをなんとかするだけの気力もない。思考も溶けてきた。

ただひとつ考えていたことといえば、先の時代の文豪たちには、今の彼女の言葉へのテンプレートを用意しておいてほしかったとだけ。

「今は寒いから」

勘弁してくれ、と言外に含み、言葉を閉じる。

無理やり落とした空疎な言葉を聞き終え、わざとらしくため息気味の息遣いをこぼした彼女は、やはりというべきか当たり障りのない返答では許してくれないらしく。

「……顔、赤いよ」

彼女の言葉は卑怯だった。

なんとか保っておきたい最後の取り繕いを、白々しく無に還す。

いつだってそうだ。

「……今だけは暑いから。今から死ぬことにするから、その、帰りは暖めてくれ」

手のひらの温もりですこし溶けてきていたものを、溶けきってしまったわないうちに口に運ぶ。まっすぐに伝わる冷たさについ顔を顰めたが、すぐにもとに戻した。

きつとこのあと後悔するのだろうか。くちどけに乗じて体内外を蝕む悴かじけていく感覚は、そのうち吐き出したくなる薄ら寒さを孕んでいる。とてもこの時期に口にするものとは思えない。死ぬ。

ああそういうえば、このアイス、彼女に一口貰われていたんだったか。これは所謂間接が云々のもの。死ぬ。

一応彼女の様子を窺ってみるが、薄く笑みを浮かべている様子を見ただけでは、そこは分かかってやっているんだか分かっていないんだか判別できない。

どちらでもいい。

うだるような暑さと凍みるような寒さ。そんなぐちやぐちやの気持ち悪さも霞む気まずさの中、次に口に含んで溶けたバニラのアイスは、おそらく甘かった。

SKIT

思っていたより依存していたらしいというのが、ここ最近で得た実感だ。

何をするにしても「今どうしてるかな」などと思考が寄つてしまつて、手が付かないとまではいかずとも、仕事の処理能力に陰りが見える。

これはよくないと思い直し、気合を入れて執務を終わらせたあとの休憩中、湯呑を指で突いたりして弄んでいると、不注意ですこしこぼしてしまつたりする。

慌てて拭き取る前に、「すまん」と誰もいないところに謝つてしまうから、もう重症で。

「私は明日死ぬのかもしれない」

「し、司令官……？」

誰に吐き付けるわけでもなかった独り言を、切羽詰まつた末の吐露だと勘違いされ
て、

「寂しいのは分かりますけど、めげちゃダメです！　すぐ帰つてくるんですから！」

と、懸命に励まされてから、そういえば吹雪と一緒にいるんだつた、と思ひ出す。

そうした散漫な注意力で、数えきれないほど失態を晒した。

それらすべて川内が出撃してから十日後とかの話だったから、いかに彼女なしで生きられなくなったか、いやでも自覚した。

冬も更けつつある。

優柔不断らしく川内との距離感に未だ悩んでいると、時間のほうも早く過ぎ去ってしまった。作戦参加艦の選出などあつて、二か月前には大規模作戦海域への出撃が実行された。

北方の逼迫した友軍への輸送作戦で、最終的には北極海の航路を確保するのが目的とされた作戦だった。初参加にしてはそれなりに重要度の高い作戦だったろう。

とはいえ、担務としては後方支援や前哨戦に回っただけなので、特にこれといった滞りもなく進んだ。あとは単純に輸送船団の往復を護衛するだけで、敵方の阻止艦隊を適度に相手取るくらいだ。

任された輸送護衛だけ慎重に終わらせて、あとの本戦は先達に任せる。

この鎮守府から送り出した艦娘たちは、一足先に安全な航路を選んで帰ってきてもらうことになった。

二正面作戦らしく、台湾方面への戦力強化も行うらしいが、これは私の預かるところではない。緊迫した雰囲気だけは理解しつつも、やはり安堵の方が多い。

すべて順調だった。

変わったことといえ、ただちよつと、川内と二か月ほど会えずにいたことくらいで、ほんとうに、それだけ。

秘書艦に関してもそこは吹雪が務めてくれたので、特に問題はない。

失態があつたとしても、ちゃんと些事程度で済んだ。

注意力が散漫になつて飲み物をこぼしたり、見えているはずの棒にぶつかつたりするくらいでしかない。

ほんとうに、それだけ。

……。

自分に嘘はつかないほうがいい。今のうちに撤回しておこう。些事ではなかつたかもしれない。

川内のいない期間、精神的な負担が以前より跳ね上がったのは間違ひなかつた。

それが誰のせいなのかは分かつているが、どうしても他の言い訳がしたくなる。はじめて大規模作戦に触れるから、とか、全艦無事に帰つてくる保証がないから、とか。

そうやって心労の原因を他のどこかに預けてしまえば、きつと私はまともでいられるはずだった。

まともじゃないので、私は今日も茶をこぼした。

それも今日で改善されるはずだ。

数日前に某所を出航した彼女は、このまま何もなければおそらく今日の夕方ごろに帰ってくることになる。

今はいつ来るか分からない通信を相手に一喜一憂しているところだ。

『……びつくりするくらい何もなかったね』

「そんなもんだろう」

来たら来たで、味気ない返事を返してしまうのが私のよくない部分だ。

『うまくやれてた?』

「そう聞いているが」

『そっか、それならいいけど』

作戦中は彼女たちと直接やり取りをすることはなく、本隊の指揮官や大淀を通した連絡が主だったため、彼女の声を聞くのは久しぶりだった。

作戦の内容に関してはただひとつの滞りもなかった。もともと練度も高く経験も多い艦娘ばかりなのだし、当然だった。

むしろうまくやれていたかどうか聞きたいのは私の方だ。

『ねね、提督』

「ん」

『帰ってきたらすこしくらい褒めてくれればいいなって思うんだけど、どうかな』

「ああ。もちろん今回の作戦参加艦には全員に褒賞を——」

『いや……うーん』

期待に沿えない返答だったらしい。

いや、何を言いたいかはわかるつもりだが、ほんとうにその意味で言っているのか、確証が持てない。

『提督』

「なんだ」

だから、なにかしらそうしたサインや根拠が見つかることを望んで、私は次の言葉に期待を寄せるしかない。

『あー、やっぱいいや』

……まあ、そういう奴だ。

『じゃあそろそろ切るね。あと数時間かかりそうだけど、あつたかいお茶用意して待つてて』

「いや」

『ん？ なに？』

「そういえば君は、その、えー……」

『君は？』

「……牛乳、氷入れて飲んだことあるか」

『ないけどなんの話？』

「いやすまん忘れてくれ。いや、そうじゃなくて」

『……………』

「発泡スチロールは燃えるゴミでいいんだったか？」

『なんの話？』

なんの話だろう。分からなかった。

もつと自然な話題の引き延ばし方を懸命に探した。

『じゃあそろそろ』

「いや」

自然なやり方。

「そういえば、風邪はひいてないか」

『大丈夫』

「怪我は」

『あつたとしても治るでしょ』

「変なものを拾い食いしてないか」

『私のこと犬だと思ってる?』

「変な人についていつてないか」

『大丈夫だよお母さん』

「牛乳に氷入れて飲むと案外まろやかになるらしいが」

『そうなんだ、帰ったら一緒に試してみようよ。じゃ! そろそろ』

「いや」

自分に失望した。

川内と会わないうちに、会話の仕方すらも忘れてしまったらしい。

『提督、これいつまでやるの』

「……すまん」

『全然いいんだけど。大丈夫? どうかしたの?』

彼女の声も、若干心配の色を帯びてしまっている。

自分でも何をどうしたいのか、よくわかっていなかった。

会話を引き延ばす理由すら分かっていない。ただこの時間がもう少しだけ生き長らえてほしい、と願っているのは間違いないかった。

「……その。もうすこしだけ繋げないか」

『えっ? う、うん。べつにいいけど。どうしたの?』

「いや……」

『……ふーん、へーえ』

なにか察したように声を和らげる。

この無線の向こうでにやにやと口角を上げている彼女の表情が鮮明に想像できる。想像できてしまうからだ、と彼女のせいにした。

『寂しくなった?』

「そうかもしれない」

『だから無理に話を引き延ばそうとしたの?』

「ああ」

しかし寂しいのとは違った。

その時期はどうに過ぎていて、虚無で日々を過ごしていたから、それ以外だ。

「いや」

『?』

「嬉しかったんだ。声を聞けて。寂しかったわけじゃない」

『そっか』

彼女は嬉しそうに笑った。

『今日の提督、ちよつと素直で、ちよつとめんどくさいね』

「すまん」

『あついやつ、べつに悪い意味じゃなくて』

「……………」

『……むしろその、めんどくさいところがかわいいっていうか』

「……………」

『嫌いじゃないよ』

嫌いじゃない。

そういえばこういう言い回しをする奴だったな、と思ひ出す。

大事なところを彼女は妙にぼかしてしまふから、私は踏み出せないようになっていたのだ。

そういう仕組みだった。

『ね、提督。帰ってきたら私のこと、ちゃんと褒めてね』

「……………ああ、そうだな」

少し時間を開けただけで、もう懐かしい。

頭を支配していた靄が、立ち消える気配がした。

「……………川内」

『ん、なに？ まだ寂しい？』

「冷静になつてしまった。君には本当に申し訳ないが」
『うん？ うん』

「君の周りには僚艦がいるはずだ」

『うん、うん……うん？ あれ？』

彼女のことだ。今きつと、私の言葉に我に返つて、あたふたと周囲を見渡しているの
だろう。

『……あつ』

僚艦たちの生暖かい目に彼女はすこしだけ顔を赤らめて、どうしていいかわからず数
瞬だけフリーズする。

そうやってしばらく固まったあと、間違いなく彼女はこの通信を切ろうとするから、
私はそれをなんとか繋ぎ止めなければならない。

「川内、その……」

『つ切るから！』

「まだ話していたい」

『切るつてば！』

無理だった。今度こそ本当に切られてしまう。

まあ数時間後には実際に会えているだろうからいい。

「……………」

背もたれに体を預けて、天井を見上げた。

なんだか気が抜けるのを感じた。悪い感覚ではなかった。

今まで覆いかぶさっていた泥が、さっぱりと立ち消えていくのを感じていた。

ぼやけていた脳の輪郭が、もとにもどったようだった。

……………。

「まあ、私も人のことを言えないか」

「みたいですね？」

秘書艦の席でにまにまところちらを見つめる吹雪に、私は苦笑を返すしかなかった。

「なんだ、その顔は」

「いえ、べつに」

「そんな愛おしそうな目で見るな」

「お二人がかわいくて」

「やめてくれ」

勘弁してほしい。

……………と思うのと同時に、自然と口角が上がるのが分かった。

「楽しそうですね、司令官」

「ああ。楽しみなんだ」

「楽しみ。会うのがですか？」

「さあ」

一応隠しておく。

隠すまでもなく知られているだろうが。

吹雪が文句ありげな表情をしたので、詰められる前に答えることにした。

「再会とまで大げさじゃなくても、久しぶりに会えるから」

らしくないかもしれないが、それも心地よかった。